女鑑

五年三月十二日第三種郵便物認可

明治三十五年十月五日發

第貳百六拾貳號

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



女鑑第貳百六拾貳號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵劵代用は(一錢、三錢)一割増の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

定價

一冊　金拾錢
六冊三ヶ月分　前金五拾七錢
十二冊半年分　前金壹圓拾錢
廿四冊一年分　前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行　金參拾錢
半頁　金八圓
一頁　金拾貳圓
表紙一頁　金拾六圓
(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十五年十月四日印刷
明治三十五年十月五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊素一
東京市京橋區南八丁堀二丁目十二番地
印刷人　並木艮雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元　株式合社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨の御附記被下度候

總裁小松大宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵令夫人

をんな

第二卷

第九號發兌

毎月一回十五日發行

定價金拾五錢

全國無遞送料

（卷首）本會賛成員中山幸子筆新選女百人一首歌かるた（論說）婦人修徳論　故文學博士西村茂樹●英國の家庭教育（承前）　下田歌子（學藝）和書解題（水鏡）喜田文學士●漢書解題（三國志●晉書其他五書）　丸井文學士●兒童の言語（四）梅澤和軒●明治維新の原動力（七）津田黄昏●作文批評　今泉定介●作歌批評　大口鯛二（齊家）點茶　松浦伯爵●割烹　石井泰次郎（世務）經濟談（會社）伊藤秋南●各地產業の實況（二十四）「長良川の鵜飼」伊奈かく子（譚艸）義理なる子（中・下）岸本柵子●雲雀の雛（下）大塚素江（詞藻）畫讃作例一班、大口鯛二●田邊和氣子日記●みやび會員詞藻（雜錄）刺繡（承前）　木村仲子●眞珠の話、中村綠水●婦人論梗概●家計收支の實況（彙報內外要報十數件）

大賣捌

神田表神保町三　東京堂

京橋區銀座四一　東海堂

神田一ツ橋通町七　有斐閣

京橋槍屋町六一三　北隆館

發行所

東京麴町區下二番町三七　大日本女學會

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

公徳養成

全壹冊
定價五拾錢

曩に明治三十四年四月東京に於て開會したる第三回全國聯合教育會には文部省より「小學校及中學校に於て公徳を養成する方法如何」といふ諮問あり乃ち聯合教育會は反覆審議を盡くして答申書を呈出し且つ之れが完成を帝國教育會に一任せり茲に於て帝國教育會は公徳養成に關する教育者の參考書を編纂するの急務なるを信し十分信憑するに足るべき學者教育家に編纂及請查を依囑し脱稿の上更に再三審議調查して成れるもの即ち本書「公徳養成」なり
本書は斯の如き事情より世に公にするに至りたるものなれば希はくは世の教育に從ふ諸氏の此の書を以て公徳養成の爲め參考の資料に供せられんことを

東京市神田區一ッ橋通り町廿壹番地
明治三十五年九月　**帝國教育會**

東京市日本橋區本町三丁目
發兌書肆　**金港堂書籍株式會社**

●女生徒募集

授業開始入所當日

當女子部は女子に簿記法を教授し家計整理又職業としては計算事務員たらしむる外○華族紳士商家奥向家計整理員○女學校其他出教授○女子部計算事務員紹介保證の依頼に應ず

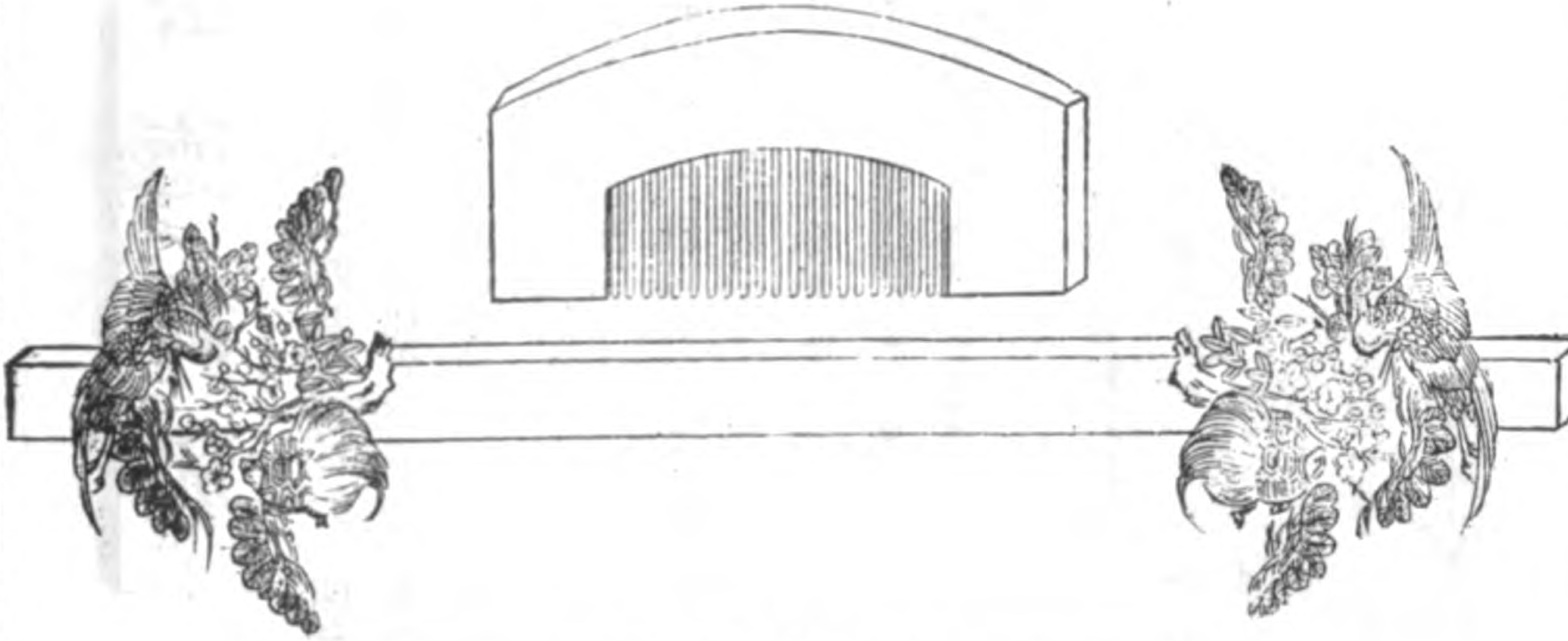
東京市神田區裏猿樂町四番地
私立 **銀行事務員養成所**女子部

女鑑廣告

本社　同樣　取扱　申候

神田千代田町　**博報堂**　電話本局一四四番
京橋區尾張町　**弘報堂**　電話新橋八五一番
京橋區南鍋町　**廣告社**　電話新橋二六一番

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御祝儀用櫛笄

上圖櫛笄の材料は鼈甲を以て随一となせど鼈甲の中にも品質の佳からざる物少からず此品は鼈甲中の最良質を精選して良き工の手に成りたる物なれば透明にして狂を生ぜず浮を出さず幾久しく御道具となる可き逸品なり

本鼈甲製（金二十圓 五十圓 七十五圓 一百圓
一組之價（百五十圓 二百圓 二百五十圓以上

四方張製（金八圓 十圓 十五圓 十八圓 二十圓
一組之價（金二十五圓 三十圓 三十五圓以上

右の外御婦人装飾用品一式時々の流行に魁け新意匠の物品各種取揃へ居候間何卒御來車の上現品御高覽の榮を賜り度候市内は電話又は葉書にて御一報次第各種取揃へ貴覽に可供候地方より御注文の節は御用品詳細に御認め代金御送り被下候へば御注文に應じ多數の内より精選仕即日小包郵便にて御送り可申候尤も御都合に依り代金引換へ小包應用致し御便利御取扱可申上候交換日數は市内一週間地方は里程の遠近に不依三週間以内は代金又は他品と御交換可致候

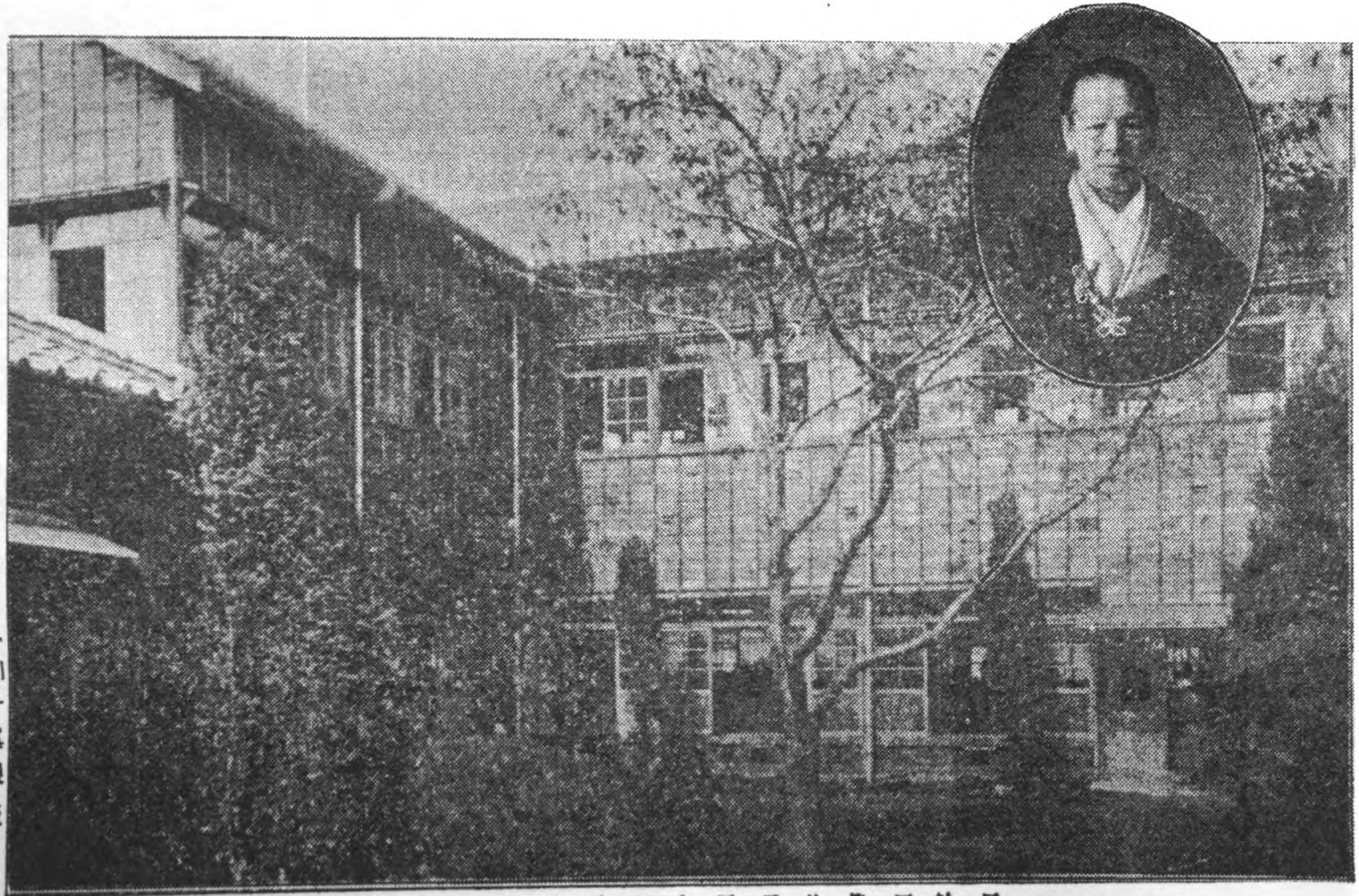
東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

店主 松田幸治郎

（特電話新橋五百五拾壹番）

玉翠館撮影

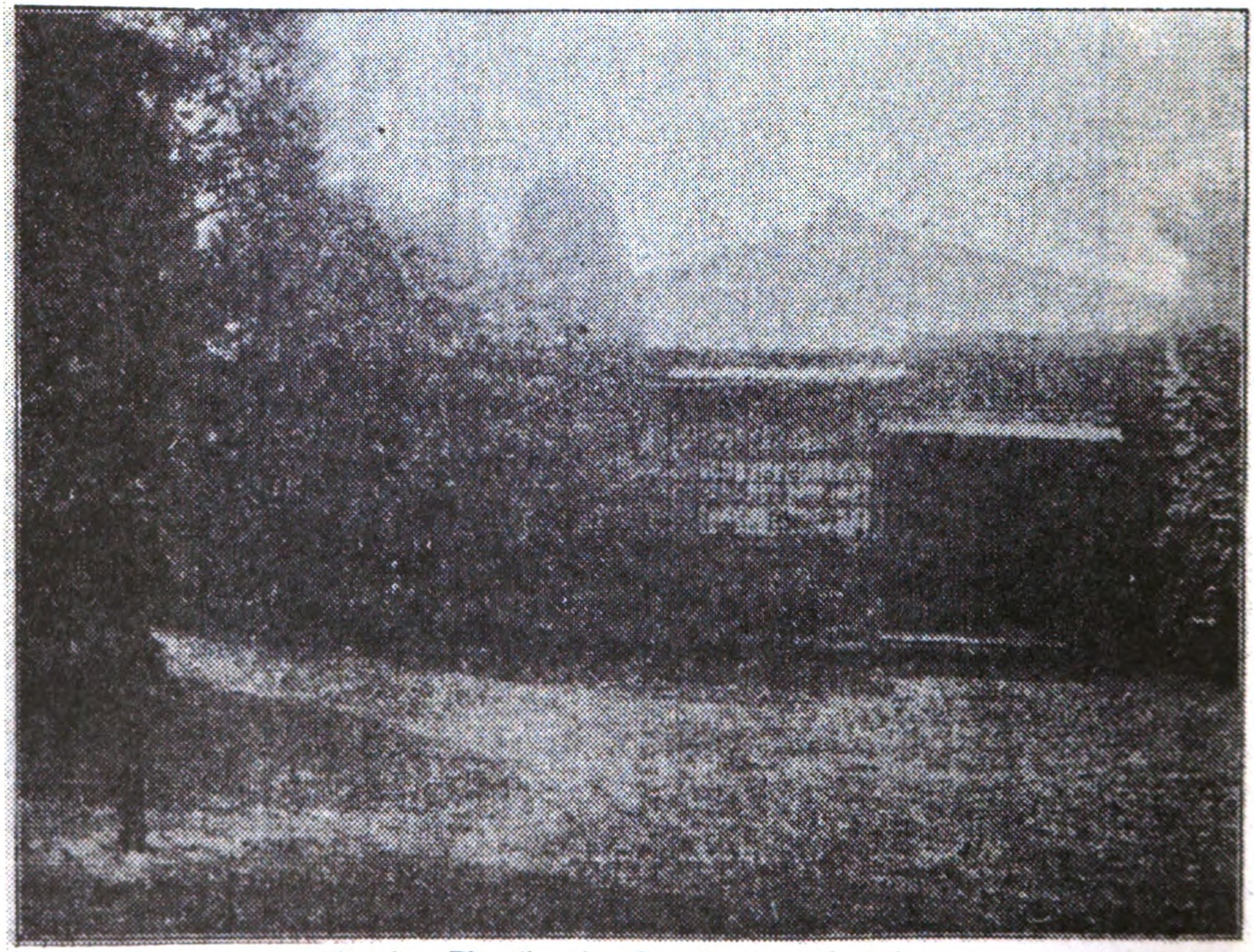


小川一眞製版

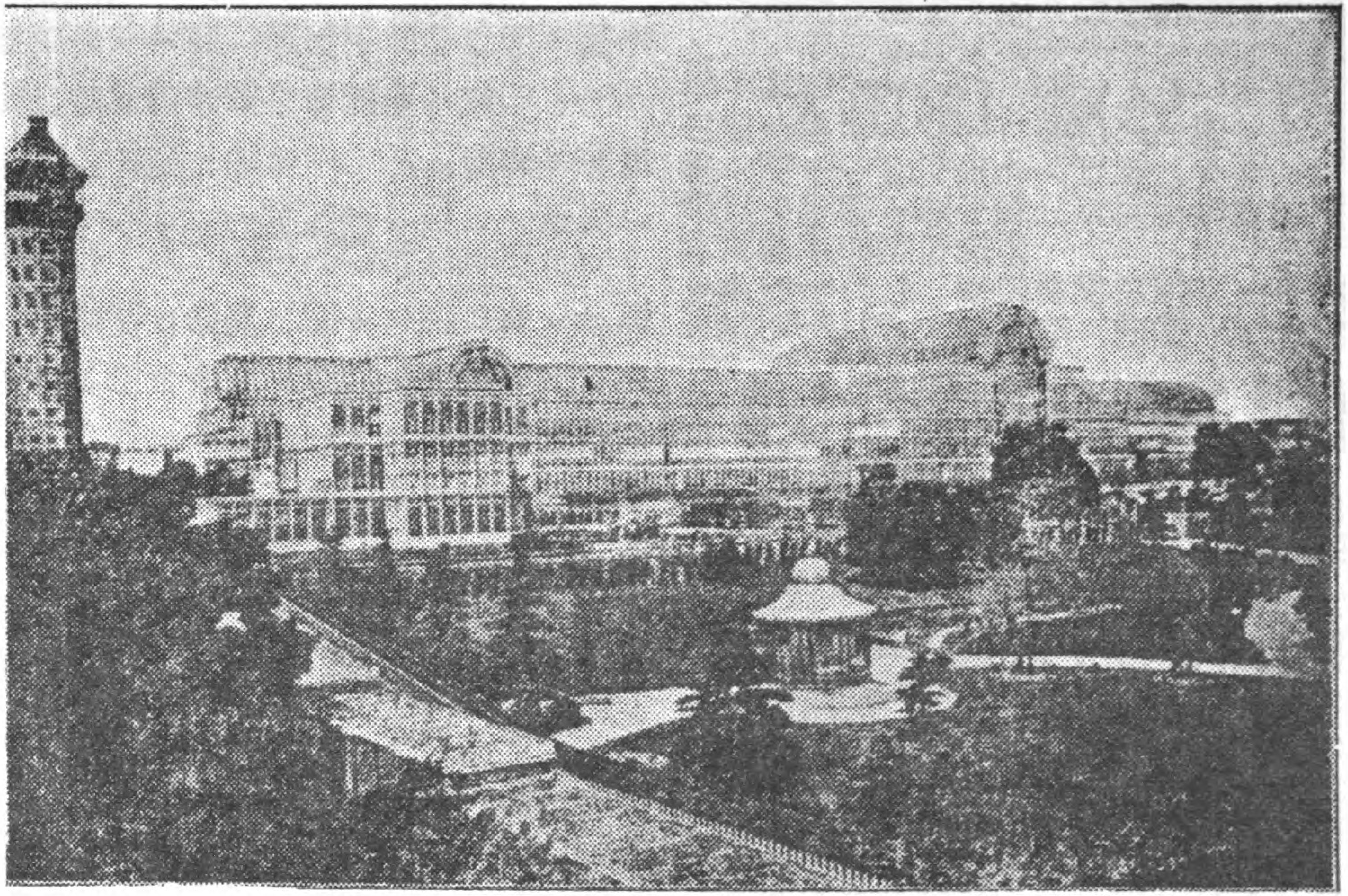
三輪田眞佐子刀自と三輪田女學校



三輪田眞佐子刀自の居室と其庭園



三輪田女學校附屬塾寮



英國水晶宮

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨の御附記被下度候

●わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば

誓つて根治

することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑也▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらん事を乞ふ

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房（電話本局二五四六番）

●肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體

純白色に變化

し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢

特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房

大改良 最新式 時計形文具 兼用 錢入發賣



本品は圖の如く龍頭無雙ニッケル側十九形兩蓋開きにて一面は墨池肉壺検印等

文具を備へ一面は**錢入**銀貨金貨紙幣印紙等を入る龍頭は伸縮自在の**筆**を仕込み體裁頗る優美にて當時流行の**薄形**時計と異らず

景品披露の爲め千個限り時計鎖を進呈す▲特別上等製美術浮彫り兩蓋開き九拾五錢上製の八拾錢小包送料百里内八錢百里外十六錢の割にて添送の事▲切手代用必ず二割増し▲着金即刻送品す▲代金引換小包郵便は面倒手數に付一切御斷り申候事▲着金の上に非ざれば決して送品致さず候

專賣元 東京市神田五軒町十九番地

日新館商店

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨の御記附被下度候

文學博士、ドクトル、オブ、フィロソフィー 中島力造先生
女子高等師範學校教授 篠田利英先生
合著

婦女修身訓

本書は女子のために獨習用として綴り成したものである、されば文章も小學校卒業の程度に照して極めて平易を旨とし主として其趣意の了解せられんことを專一とした、編述者は嘗て文部省の依囑を受けて高等女學校用修身書を作り現に世に行はれて居るが彼の書の上に必要なる心得を附け加へ又同じ趣意をも敷衍して本書を編述したのである◎本書は上卷に於ては專ら女子としての心得を説き、中卷に於ては主として妻母としての心得を説き、下卷に於ては重に人民に必要なる法制經濟に關する心得の一班を説いてある◎本書は今日實際に適切なる最良無二の女子教訓書なれば苟も本邦の子女たるものは言ふまでもなく、女子の教育を普及せしめて善美なる家庭を造り徳風の改善を圖らるゝ人々は必ず一閲せられんことを望む

全三冊 定價 上、中各金二十七錢 下金三十五錢
郵税 各金六錢

高等女學校用

家計簿記

佐久間文太郎著

本書は著者が高等女學校家事科中家計簿記の適切なる教科書なきを患ひこれが需要を充たすの目的を以て編纂せられたるものにして帳面の仕組諸勘定の費目帳面の記入方及び計算等一に實用に適切なる材料に依り最も簡易明晰なる方式を以て著述せられたるものなり。

全一册 定價金三十五錢
郵税 金四錢

東京市日本橋區本町四丁目十六番地

文學社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

訂正
増補 **聖諭略解**

全壹冊 定價四錢
郵税壹冊以上貳冊まで貳錢

本會は明治二十七八年の戰役の時時勢の必要に應じ明治二十三年十月三十日下し賜ひたる教育に關する勅語と明治十五年一月四日我が帝國軍人に下し賜ひたる勅諭とを説明したる小冊子を編纂し題して「聖諭略解」と稱し以て一般の國民に普く聖諭の貫徹せんことを謀りしが爾來年を經ること九年時勢も漸く變遷して復た明治二十七八年の當時に同じからざるを以て更に訂正すべき必要を感じたると共に明治三十二年六月三十日下し賜ひたる改正條約に關する詔勅をも説明して之を増補し其の書名を本題の如く改正せり

此の書は以上記述せるが如く教育上最も大切なる聖諭を説明せるものなれは國民教育に從事せらるゝ大方諸氏の成るべく廣く之を學校の生徒及び一般の國民に熟讀せしむるよう盡力せられんことを望む

發行幷びに發賣所
東京市神田區一ツ橋通り町廿壹番地
帝國教育會

一手大賣捌所
東京市神田區小川町九番地
開發社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候





女鑑

第貳百六拾貳號

婦人と慈善

世に最も崇く、最も美はしく、且つ最も潔きは、報償を拂はざるに施す愛と、價値を求めざるに加ふる惠となり。此愛や則ち慈愛の心也。此惠や則ち慈惠の行也。故に慈愛の心より生ずる慈惠の行は、人間最上の崇高なる者、優美なる者にあらずや。

涙は眞成の判斷者なり。凡ての女性は、物に感じ易く、情に動き易し。物と情とに感動し易きは、愛の心の深厚なれば也。鋭敏なれば也。愛は眞に女性唯一の生命ならずや。されば愛の源泉より流れ出る涙の如何に混々として盡きず、鮮々として麗しきを見よ。愛なければ涙なし。涙は實に愛の發動也。表示也。

哀れなる寡婦の身上話を聞きては、その境遇を想ふて泣き、悲しむべき孤兒の姿を見ては、その身上を懷ふて泣くは云ふまでもなし。芝居の一幕を見ても、袖を掩ひ、講釋の一節を聞きても袂を沾はすは女性の通性なり。常情なり。此の通性と常情とは、如何に世の婦人が、慈愛、慈惠、慈善の心に富めるかを證して餘あるにあらずや。「ショウペンハウエル」曰く、婦人は愛憐の情に富むが故に、愛を表示するに於て、不幸なる者に同情を寄することに就きては、男子よりも多くの愛を有すと。

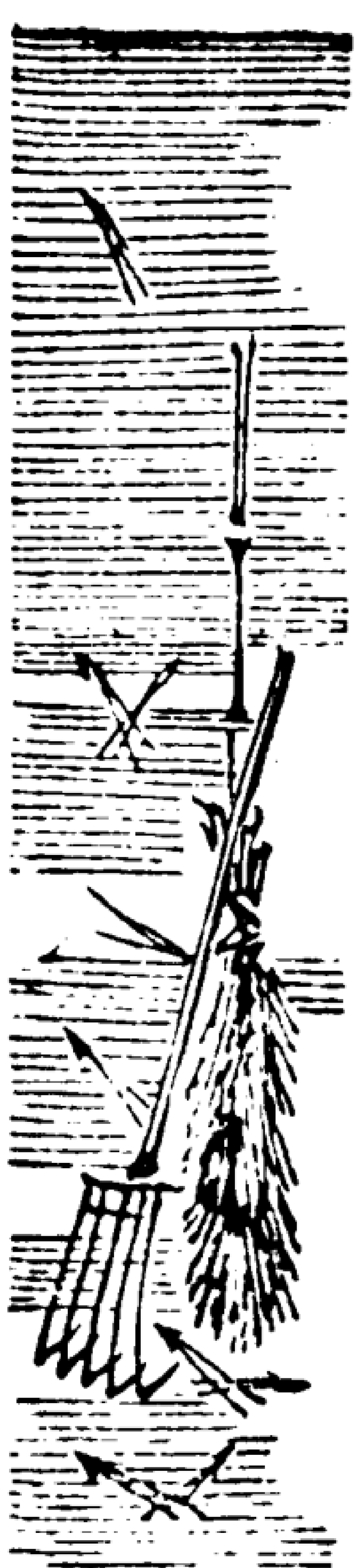
婦人既に生れながらにして、此の貴ぶべき通性と常情とを有す。何ぞ之を發揮して、事實の上に及ばして、世の最も崇く、最も美はしく、且つ最も潔き行となさゞるか、温き慈愛の涙は、慈善の行に依りて、始めて憐むべき他人の身の上に施されて、社會に於ける最も崇高、最も優美なるものとなるにあらずや。

慈善といふことを以て、徒に大なるむつかしき事業と解釋せば、貴紳、富豪等有數の婦人ならでは、如何に慈悲、慈愛の心に富めばとて、實際之を事實にあらはすを得ざるべし。若し慈善にしてかゝる狹き意氣のものなりせば、世間慈善を行ふとを得べきもの果して幾人かあるべき。多くの婦人は唯だ熱き愛の情を以て、我が心を慰め、同情の涙を他人に濺くを以て、自ら滿足せざるを得ざるべし。勿論、慈善會、又は慈善事業などと名づけ、多衆の贊成者、同意者を求めて、幾千萬の義捐金を募集し、之を或る一定の目的に投ずるは大なる慈善なり。有力なる貴婦人若くば令孃が、かゝる事を發企し、實行するは、洵に美徳の最上なるものなれば、吾輩は震災、火災、その他あらゆる厄害等、不幸の出來事あるに際して、貴婦人令孃達が奔走し、盡力し、多大の金額物品を募集して、大なる慈善を施さんことを熱望して已まざるなり。例へば今回鳥島の震災の如きは、有力なる貴婦人、令孃達の最先きに立ちて、奔走盡力すべきものにはあらざる乎。

されど慈善の趣意を以て、慈善會又は慈善事業といふが如き、むづかしく、且大なる仕事とのみ思ふは甚だしき誤りなり。慈善の行を以て位地と富とを有せるものならでは、行ひ難しと考ふるは、大なる間

違あり。道路に行き倒れて、手足をも動かす能はざる哀れの人に、一盃の水を與ゆるは、深き慈善にあらずや。數日の間、食に饑えて、飢餓に叫べる貧民に、一椀の飯を施すは、厚き慈善ありと知らずや。されば餘れる食、弊れたる衣、厘毛のハシタ錢も、孰れか慈善の種たらざるべき、苟くも此心を以て心とせば、何人か又慈善を行ふ能はざらん。一盃の水や微なり。一椀の食は卑し。施す者に於て又何かあらん。然れども施さるゝものに取りては、百金千金の賜物にも優りて、嬉しき場合なきにあらず。物の大小と多寡とは以て慈善を爲すの標準と爲すに足らざる也。諺にも富者の千燈より貧者の一燈といふことあり、人たるもの身分に應じて、慈善を爲さば、貧富の如き、貴賤の如きは、決して顧みるに足らざる也。

吾輩は我國の婦女が情に脆くして、愛の心に深きと遙に歐米婦人社會の上に出づることを確信じて疑はざるが故に、その特性の愛と、同情の涙とを發揮して、世に最も崇く、美はしく、且つ最も潔き慈善の行となして以て、之を世の不幸不運なる同胞の上に施さんことを希はざるを得ざるなり。女性に於ける最も尊ぶべき公共心の發現は、慈善の行に他ならざるを知らば、今日の婦人、殊に教育ある婦人たるもの、唯愛と涙とのみを以て滿足して已むべけんや。





母親の心得（承前）

愛敬女學校長　棚橋絢子

女子を學校の寄宿舍に置くは餘程注意すべきなり予一人としては、如何なる事情あるも、普通の寄宿舍などへはまづ入れざるべし。勿論之を下宿屋に置くが如きは決してなすべからざるは、おのれの言をまたずして明白なり。故に已むを得ず遠方の學校に女子を出したる時は、家庭の嚴肅なる親族等に托するの外あらざるべし。尤も良師の之を預る如き好都合あらば、之に托するは宜しけれども、眞正の良師と好都合とを合せ得る事は極めて稀にして、通常あり得べからざることと思考せざるべからず。さて女子を親族等に托したる時は、前述の家庭教育を、其親族の家庭に於て、親族の子と同樣に受けしめざるべからず。

玆に一言父母、殊に母親の爲に、述べ置かむと欲するは、父母たるもの、其女子が學力智識を自己よりすぐれたりと思考し、己を愚として女兒を賢とし、之を傲慢ならしむるは弊あることなり。此弊害は一般に行はれ、知らず〱の間に甚だしく兒女を害するものあり。但し子女の學問は皆其父母の致さしむるものにて、子女の進歩は父母の進歩なり。父母は之に對して一歩も卑下すべき理由なく、子女もまた父母に對して傲るの理は更になき處なり。彼の學校に通ひて文字を知り、事物を誦記するが如きは、一定の歳月あらば、誰人も成

し得る事にして、白痴ならざる限りは、資金と時間とを費して學問を修業するは容易なる事なり。且つ事物の誦記等皮相の知識は、大なる、價値あるものにあらず。

學校は、勿論學校なりと雖ども、世間もまた一の學校なり。世間の敎ふる敎訓と知識とは實に莫大なるものとす。されば、父母は多年世間なる學校に於て修得せしものにして、加ふるに子女をして學問せしめし者なれば、子女の愛に溺れ、俄に之に隨喜するは理に戻り、且つ人の見る目も頗る醜體と稱すべく、又子女をして其淺渺なる知識と、夢の如く脆弱なる經驗とに滿足せしめ、倨傲なる心を生せしめ、折角の敎育却て身を毀くるものとなるに至らむ。これ深く留意することを要す。

兒女の敎育はかの胎育に始り、婚嫁に至るまで、終始一貫して行うべきものなる事前述の如しと雖も、幼孩幼童に對する敎育は殊に重んずべきなり故に今複雜を厭はずなほ一言せん。

夫れ小兒を敎育するの要は之を一言に約すれば、安詳恭敬にあり。敎㆓小兒㆒先要㆓安詳恭敬㆒と横渠先生の言至れり盡せりといふべし。安とは安靜にして輕卒ならざるを云ひ、詳とは詳審にして粗率ならざるなり、恭は則ち端莊の外面に形はるるもの、敬とは畏懼の中に存するを云ふ。恭は形に付て云ひ、敬は心に付ていふなり。安詳恭敬は皆忠信の本なり。父母之を身に持して兒女を敎ふれば、其放心を收め、德性を養ふを得べし。父母敎ふるに安詳ならば其和順迫らず、事物に臨みて放心するのことなく、詳かに觀察し、緻密に思考するの氣分を兒女に感染すべし、又敎ふるに恭敬ならば、兒女また之に感染悦服し、驕惰の根を絶ち德性を涵養するを得るなり。夫れ吾人德行

の本源は、父母、師長、祖先等の意志及び人類の天職に對し、吾人が感得する畏敬義務の情にあるを以て、父母たるもの恭敬以て兒女に敎へ、此精神を之を感得せしむべきなり。父母の愛、禮に踰え、これを恣にすれば兒女驕惰の情を發し、長ずるに從ひ、其良心をも失ひ、私意に徇して天理を滅するに至らむ。子弟を敎ふるもの初に愼まずんばあるべからざる也。女子を敎育して智の一方に傾き、輕佻浮薄のものを生せざる樣、或は専ら技藝敎育を施し、工女、女中頭、師匠風の忌むべく厭ふべき者を生せざる樣、常に學問とは智行より成り、德性の修養にあることを記し、學問、技藝相共に進みて德備はり、業叶ひ、賢母良妻として慈仁貞淑能く家を治め、婦道を全ふする女子を養成すべし。

以上論述せし事まことに明白知り易けれども、之を行ふに至つては頗る難く、而も行はざるべからざることなり。願くは諸氏と共に精勵其實行を期せむ。知り易く普進平易にして、新奇の議論にあらざるを以て棄つる事なくんば幸なり。（完結）

女子と社會的學問（女子法學の心得第二）

大學院學生
法學士　工藤重義

男子は外を治め、女子は内を整ふとは、古人の稱ふる所にして。之れを現今の時勢に稽ふるも、大體に於て、爭ふ可からざる原則として認めざるを得ず。惟ふに、男子の性は、磊々落々として勇往進取の氣に富む。然るに、女子は之れに反して、其の長所は、溫柔にして事物に綿密なるにあり。故に、男子にして、其の特徴を失ひ、優柔不斷に流るゝ

の不可なると同時に。女子にして、其の長所を捨て、男性的行動をなし、男子の長所を模倣するの不可なるは、明白なる道理なり。之れを以て、吾輩は、現今の所謂、女流交際家、女學生風なるものを忌む。何となれば、彼等は女子の特徴を失ひて、お轉婆となり、女子の内を整ふる天職を忘れて、只管虚名虚譽を事とすればなり。而して、之れを實際に徴するに、かゝる弊害なきことを斷言するは、何人も躊躇する所なる可し。

然りと雖も、讀者誤りて、吾人を以て、女子をして社會に遠からしめ、努めて社會の事柄を知らざらしめんとする、頑固者流となすことなかれ。否吾輩は、大に社會的知識が女子に必要なることを鼓吹せんとするものなり。只、吾輩の擯斥する所は、女ハイカラー半可通者流にあるのみ。

吾輩をして忌憚なくいはしめば、現今の女子一大欠點は、身親から女子の天職を忘れて社會的の人となり、虚名心を働かしめんと力めながら、翻て、其の裏面より看察すれば、女流にも亦必要欠く可からざる社會的知識は却てその最も缺乏する所なるにあり。只管外聞名譽の奴隷となりて必要的知識を等閑視するにあるなり。

讀者若し吾輩の言を疑はゞ、現今最も歡迎せらるる女子雜誌を見よ。茶の湯、生花、書畫、和歌、新体詩の如き、玩弄的嬉戯的の事項が、如何に其の大部分を占むるかを、謂ふなかれ、是れ一に雜誌編輯者の責なりと。讀者の嗜む所は、即ち編輯者の力を注ぐ所ろにして、紙面の體裁は、これ讀者心影の反映なりと知らずや。勿論吾輩と雖も、書畫茶道等を以て、女子に無用物なりとは斷言せず。性情を高尚ならしめ、注意力を鍛錬せしむる等、其の効の沒す可からざるを知る。然りと雖ど

も、其の實用如何と顧みれば、纔かに王侯貴族等の部上流社會の社交用として弄ばるゝにすぎずして、第二流もしくは第二流以下の家政上には全く其の用をなさゞるものにあらずや。然り而して、他の一面に於て、經濟學、教育學、法律、政治等、社會的必要なる諸學科が、等閑視せらるゝは、これ爭ふ可からざる事實にあらずや。斯くの如き境遇の下に成長せる女子が、果して夫を助けて妻たるの本分を盡し、子女を教育して有爲の人物たらしむるを得るやは、吾儕の首肯するに苦しむ所なりとす。

吾儕が、社會的知識の必要、殊に社會的諸學科修養の女子に必要なることを説くは、主として左の理由に基づく。

(一)社會的學問の修養なくんば、夫を佐けて内助の功を完ふする能はざること。

(二)社會的學問の素養なくんば、子女の庭訓を完ふし、有爲の人物たらしむるの難きこと。

(三)社會的の知識なくんば國家の形勢に暗く、從て家庭と國民の義務とを調和する能はざること。

是れなり。

唯茲に一言注意して、讀者の誤解を防ぐは、社會的諸學科修養の程度にあり。いふ迄もなく、女子の之れを學ぶは、之れを家庭の上に適用せんとするにありて、敢て職業として之れを專攻するにあらざれば、強ひて理路を繹ね源泉に溯ぼり、其の範圍を悉くすが如きは、勿論吾儕の稱ふる所にあらざるなり。

吾儕はこれより右の三項目につき實例に徴して社會的學科の效用を説明せんと欲す　(未完)

婚姻哲學

前田長太

(一)婦人の天職

凡ての教育の歸する所は、一身の計に在り、例へば今日の女學生は後日其身を如何に措置すべきものなるか、と云ふ事を眼前に立てゝ、而て教育するのは、女子教育家の第一着に目指す可き所である、女學生其者から考へても、私は今學校に學んで居りますが、後に何に成る積ですか、と云ふ事を我れ吾心に確立一定して置かなければ、將來何にも成らぬ者である、乃で婦人の天職如何と云ふ事は、教育家たる者が其の女學生の爲に、家庭の母たる者が其の子女の爲に、先づ第一に解決しなければならぬ大問題である。

天職は凡ての道德的進歩發達の必須要件である、天の人を造るや、豫め彼は何、此は何と、各自の本分を定めて置いたものである、矢張之を天の攝理と云つても可しからう、所で其の天の攝理の在る所を尋ねて、之に順應して往くのが、人生第一着の事業で、若も此事を考へず我意の向ふ所氣儘勝手に一身の計を立るが如きときは、十中の九までは皆悲運に遭遇し、苦境に沈淪する者である、時に偶然の結果、好運に際するが如き者なきにしもあらざれども、此は例外で、一般の則とすることは出來ぬものである。

仰で天を觀、俯して地を察するに、森羅萬象何れも皆一定の法則により各其の歸向すべき所に歸向して居る、彼の頑冥無智なる木石と雖も虫禽と雖、或は盲目的に或は本能的に其の天則を遵奉して居るものである、唯人間は智惠分別自由の德を備へて居る故、智識以て其の天意の在る所を探り、

自由以て其の本分の如何を撰定しなければならぬ者である、盲目的に動き、本能的にのみ行ふは、人間の性が之を許さぬのである、然し木石の如くなり、禽獸の如くならんを欲する者があれば、吾何をか言はずやだ。

人が其の天職を解して、一生之を追求遂行しやうと思ふときには、天意と相合して、世界の合調を保ち、家庭の平和、社會の安寧等皆之に繫り、頂天立地、偉大なる功勞者として、萬衆の具瞻に價すべき者である。

若し之に反して我意情慾の捕虜となりて、天の指命せる職責を放棄するときには、直に天則の道を脱し、宇内の合調を破り、家國の安寧秩序を亂し、四方八面、世界の亂調者と目せられて、天下後世の嗤笑を招く可き者である。

天職は天意である、天意は法則である、法則以外に幸福はない、幸福なき生活は、其無寧其有に勝るとか知れぬ、想ふて茲に到れば、天職問題の如何に必要なるかは一目瞭然である。

然るに天下の婦人は往々皆輕佻浮薄、毫も其の天職の如何を顧ず、或は我意の赴く所に從ひ、或は嗜好の向ふ所を追ひ、或は情慾の奔る所に就き、或は男子の誘ふが儘に任せ、偶生偶行、更に其出所進退を考へず、其の先後本末を究めざるは、洵に慨歎すべき現象である、失戀の涙、離緣の悲、空閨の嘆等多く皆此に胚胎するものである、さるにても青春妙齡の花にして、暴雨狂風に荒され果るとは、なさけなき次第ならずや。

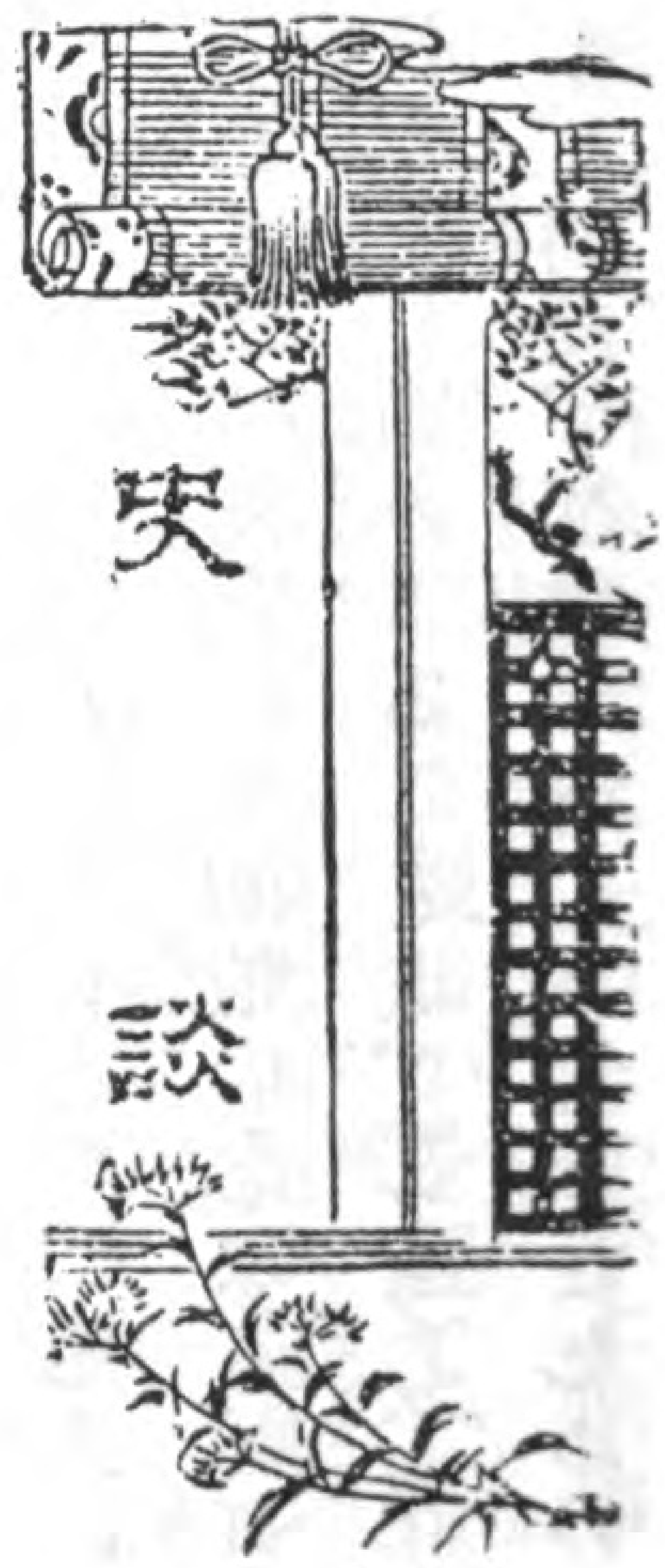
嗚呼世の女性たる者よ、須らく其の天職の在る所を探り、我意嗜好情慾等に欺かれず、天意の導く所に勇往邁進せよ。

世の教育家たる者、家庭の母たる者も亦其の女

生徒、其の子女の爲め、深く茲に考ふる所あれ、さなきときは後來其の生徒、其の子女の悲運失墜の責は、其の大半を已に帶ばなければならぬものである。

乃で婦人の目的は、凡て女學校の目的となつて居るが如く、結婚に在ると云ふ事は、彼の名高き、否、人口に膾炙して居る良妻賢母の四字が明に證據して居る所である、イデ是より結婚に關する哲理を備さに語らむ。

今日青春妙齡の女子にして、其の一身の歸着點の結婚に在るを思はざる者は、誠に尠からう、滔滔たる天下の女性は何れも皆結婚を以て其終局の目的として居る、所が不幸にして此が種々の謬想、妄念、不運、不平、悔恨、失望等の大原因となるのである、故に之に就きて正説を立てるのは極めて必要であると思ふ。



『西比利亞の孝女』（承前）

宮館さた子

遠き旅路に、何時しか、秋も暮れはてゝ、名にし負ふ、北國の冬は時を得顔に、振舞ひにき、見わたすかぎり、野も山も、銀の雪に包まれて、辿るべき、路とてもなければ、たゞ、心のみあこがれて、空しく日を消すことのみぞ多かりける。

ほどへて、『エカテリンボルグ』と稱する、都會に到着せし折には、飢寒交々到りて、殆んど、絶へ入らむばかりなりしが、人々の勸により、『ミレン』夫人とて、同地方に名だゝる、慈善家の許を

訪ねて、救助を請ひしに、快く其承諾を得、やうやく、蘇生の思を爲したりき、夫人は『プラスコブイー』の世にも稀なる、優しき心根をめで丶、我子の如くに愛撫しみ、翌年の春まで、其家に寄寓せしめたる上、讀み書きのこと、一通りを懇に教授せり、蓋し、『プラスコブイー』の父は、終生西比利亞の配所に落魄し、刑餘の人々に伍して賤しき勞役に從事するの外、到底浮ぶ瀬なしと諦らめ居りければ、娘の教育とては、全然等閑に附し來りしなり。

やがて、東風氷を破りて、水肥ゆる小川の汀には、緑一圓に燃へ出づる時季となりければ、『プラスコヴイー』は、『ミレン』夫人に、是迄の厚意を謝し、つきぬ名殘を惜みて、再び征路に上ること丶はなりぬ、夫人は彼の爲に旅裝其他何にくれとなく準備を整へ、且又、『ニジニ』に至る一商人に、途上萬端の保護を依囑せり、或日『カマ』河を遡りたる折、暴雨の爲め、水流凄じく漲り、舟行極めて危險なりしが、折惡しくも『プラスコヴイー』は舷より轉げ落ち、水中の藻屑と化すべかりしを、やうやくにして、救上げられたり、されど、彼は是が爲に、激烈なる熱病に罹り、僅に、殘骸を擁して、『ニジニ』市に到着することを得たりき。

『ニジニ』は『プラスコヴイー』の、生來初めて見ることを得たる、大都會にてありけり、大廈高樓の雲を凌て聳てる、往きこう人の絡繹として、絶へ間なきさま、見るもの聽くものとして、珍奇ならざるはなかりしも、都人士の習とて、他人の艱難辛苦に對しては、露だにも同情の念なく、其が成行に放任して、顧みざることは、『プラスコヴイー』をして、轉た、都會の淋しさを感ぜしめたりき、

彼は病苦を忍びて、徒らに都人士の救助を求めたりき、荒原の寂寥を辿り、風雨の冷酷に對することは、彼の豫期したる所なれど、かゝる都會の、淋しく冷やかなることは、淳朴なる彼の、夢にだも想ひ及ばざる所なりき、されど、天祐の照臨するところ、暫らくも孝女の一身を離れず、悲深き一人の尼は、彼の窮狀を憐みて、其寺院に導き、懇切なる看護を加へたるが爲に、さしも重かりし病も、ほどなく快治してけり、彼は其後永らくの間、同寺院に滯在して、よく嚴格なる宗教上の諸式を奉持し、其感化を受けつゝある間に於て、大に造詣するところあり、若し天祐の擁護に依りて、其素志を貫徹し得たる曉には、直に尼寺に入りて餘生を送らんことを、堅く心に誓ひぬ。

やがて、冬もなかばに近く、橇を驅りて旅行するには、極めて都合よき時季となりしかば、彼は尼寺を辭して、再び旅程に上れり、途上何事もなく、莫斯科に着し、それより幾日かを經て、遂に露京聖彼得士堡に到着せり、西比利亞の配處を辭してより、殆んど十八ヶ月を費し、やうやくにして、目的地に到着することを得たり。

彼は旅行中道伴れとなりたる、一商人の家に寄寓し、且又其勸に依りて、某法律家に依囑し、父に對する宣告の再審願書を認め、之を懷にして高等法院に至り、恐る〳〵之を提出したるに、係官と覺ぼしき人は僅に一見したるのみにて、無言の儘、之を『プラスコヴィー』の手に突返し、剩さへ、守衛の一兵士は、彼を乞食と誤認し、暴力を以て門外に逐出したり。

彼は此の如きの障礙に對して。直に挫屈するものにあらず、否な、彼は一の障礙に遭ふごとに、更に全身の氣力を傾注して、之に對抗するなり、

彼は情ある裁判官の注意を惹きて、願書を受理せらるゝの機會あるべしと信じ、日々高等法院に到り、其階下に佇立すること十五日、されど、憐むべし、法院の官吏中、誰一人として彼の熱誠に、目をくるゝものさへなく、失望言はんかたなかりしが、其翌日も例に依りて、門前に佇立しける折、今しも、出勤の一裁判官は、彼の堅忍なるに着目し、願書を取り上げて、之を通讀せり、此時、彼はやうやく蘇生の想を爲せしが、彼の喜は唯一時の幻影に過ぎずして、件の裁判官は其衣嚢を探りて、五『ルーブル』の銀行紙幣一枚を取出し、之を願書に巻き收めて『プラスコヴイー』の手に返付せり。

是より前、彼は恩人『ミレン』夫人より、二通の紹介狀を得て之を携帯し來りき、一は『チー』公爵夫人に、一は『エル』夫人に宛てたるものにして呉々も彼の身上を依頼したるものなりき、されども、兩夫人の邸宅は共に『子ヴア』河の對岸なる『ヴアツセリ、オストローヴ』と稱する處に在りて、時しも久しく結ばれし河上の氷、漸く解けんとし、河上の交通極めて危險なりしかば、警察は一時其交通を遮斷したるが爲に、空しく對岸を望みて、わこがるゝのみありき。

高臺院夫人

文學士　麻鄉主人

身を眇たる一介の輕卒より興して百戰百鬪の果てには、我が大和島根を其が掌裡に握り、尙ほ之れに慊らで餘威の向ふ所、雞林八道を己が勇將鋭卒の馬蹄に蹂躙せしめ、武名大明四百州を壓せし豐太閤秀吉に就いては、何人も稔聞せしなるべ

し、余は今其配たりし高臺院夫人を語るべし。秀吉の生まるゝとき其母日輪懐に入ると夢みきと傳ふげにや其燒くが如き勢威は夫の烈日のたれに外ならず、比喩稍當を失するの嫌あるも若し秀吉の天下の覇主たりしを以て之を日の中天に懸るが如しと云ひ得べくんば、余は其の貞淑慈愛なる高臺院夫人の和光同仁の美德は之を天心に澄める月に比すべきを思ふ、日月双懸して、滿天下の子女顏色を生ぜしとも云ふべき歟。

夫人性は淺野氏、名は詳らかならねど或はおねへと云ひたりしにや、實に秀吉が糟糠の妻ありき、彼れ未だ虎嘯せず、僅かに織田氏の部卒に伍して碌々蟄龍の怨を吞みしとき、夫人は人の媒によりて、彼れが宿の女房となりき、席の敷物、欠げたる土器は此の新婿花嫁の華燭の典を飾りしものなり、彼等三々九度の盃に酌みしは定めて酸酒なりけんかし、此の時に於て、何人か當時の藤吉郎の將來太閤となる豫想すべき、此の際夫人の昔めし艱苦の如何ばかり堪へ難かりけん、秀吉固より不世出の雄傑なれば、自から磊落豪放小事を顧みざるようの事もありしならんに此れが內助の妻たるもの、亦なみ〳〵の婦女子にては叶ふまし、古へ齊の太公望の妻は、愚かにも、开が夫の非常の器なるを知らで、覆水盆に返らずてふ憂き名を殘したり、人々當時の夫人の懐を察すべし。

一方より云へば夫人は世にも類稀れなる幸福の人ともいふべし、夫の餘光に輝されて、身は輝やく許りの榮華に飽きし時もあるべし、さはれ後庭幾百の婢妾侍女の上に立ちて、之を禦御し、互に怨言なからしむるには自から犯し難き威容と、人を心服せしむるに足る慈眼を兼ね備ざるべからず世に高貴の夫人は少なからずされど、侍婢に翫弄

せられて、雛形の飾物たらざるもの幾干かある、世に英明の夫人も亦多かるべし、しかも、群婢を服するに足らではしたなき偶語を他に洩らさゞるものは誠に寥々たり、主人は嘗て其侍女等の秀吉の怒に觸れて、嚴しき刑にも處せらるべかりしを、百方救解して、秀吉を宥め秀吉も夫人に免じて、此度は罪を許すと怒を解きしことあり、これ夫人の人を心服せしむるに足る慈悲の恩にあらずや、夫人秀吉に事ること貞淑、其の東西征戰の際に於て、常に態々遠境に人を遣はして、安否を候せり、秀吉の夫人に送りし消息の世に傳はれるものあり、夫妻間の情誼掬すべし。

夫人は決して尼將軍政子の如く妬悍の性にてはあらざりき、秀吉の寵姫を淀君と云ふ、淺井長政の女にして、絶世の美色あり、秀頼の生母なれば、後には豐臣氏の社稷は己が意に任せし程の才女なれど、秀吉の之を見る決して夫人と一つ並ならず夫人は飽迄も嫡室たるの威嚴と待遇を失はず、嘗て秀吉小田原陣中にありて、一書を夫人に送れる中に

返々はやてきをとりかこへいれ候ておき候間、あぶなき事はこれなく候まゝ、心やすく候べく候、わかぎみ秀頼こいしく候へども、ゆく／＼のため、又はてんかおだやかに申つく可候と存候へば、こいしき事もおもいきり候まゝ、心やすく候べく候、我等もやいとうまでいたし、みのようじやう候まゝ、きづかい候まじく候、おの／＼へも申ふれ、大めうどもにようぼうをよばせ小たわらにありつき候へと申ふれ、みぎとう／＼りのごとくにながぢんを申つけ候まゝ其ために、よどの物をよび候はん間、そもじよりもいよ／＼申つかわせ候てまへかどによそい

させ候べく候其もじにつゝきゝ候てはよどの物我等のきにわい候ようにこまかにつかれ候まゝ、心やすくめしよせ候よし、よどへも其もじより申やり、人をつかはせ候べく候、我等としをとり可申候とも、としの内に一どうは其方へ參候て大まんどころ秀吉の母又はわかぎみをもみ可申候まゝ、御心やすく候べく候、

とあり、此れ秀吉小田原にありて持久の計を爲し諸大名に各其妻女を招かしめ、自からも寵姫淀君を召さんとせしなり、之を一讀すれば、秀吉の天眞爛熳の性を見ると共に、夫人の政子の如き嫉妬の情に婦德を汚す底の人にあらざるを知るべし、又秀吉の夫人を待つことの懇なりしを察するを得るなり、政子は實に稀有の傑女なり、されど其初めに於ては所謂穴隙を鑽るの譏を免かれず、一度賴朝の傍姪を知るや、輕々しき所行に世人を顰蹙せしめたること多し、女子として範るべきは寧ろ高臺院夫人ならずや、

夫人の秀頼を見ること己が出の如し、秀吉も亦常に夫人をして秀頼の敎養を督せしめたりき、文祿二年秀吉名護屋の陣にありて、秀頼の生まれしをきゝ、喜に堪へず、名を「ひろい」と命ぜしめて、懇に夫人に諭すことあり、此の後とても、秀頼は恰かも夫人の所生の如く待遇せられしあり、されば、秀吉世を去りて、秀頼嗣立の後、夫人に事ふるに嫡母の禮を失はず、秀頼大阪より夫人に上れる消息の傳はれるものあるが、辭句叮嚀を極めたり、

遮莫、秀吉薨後夫人の境遇を見よ、固より故太閤の正室として臣下の尊敬古に變らざりしと雖も、温柔貞淑なる夫人は何時迄も世に出でゝ、人と功を爭ふを欲せず、輔弼の忠良に秀頼を托し自か

らは京都高臺院に幽居を構へ、敢て世の俗塵に交はらざりき、其心高からずや、然れども又決して豊臣の家を忘れずして、後年秀頼の生母淀君の恣睢に豊臣氏の社稷永く祀を絶たんとする際夫人徳川、豊臣兩氏の間に居りて、百方盡瘁せし所ありと聞く、しかも一介の婦人の悲さ、固より一本の支ふ所にあらざれば、秀吉の汗血に成りし豊臣の大厦は忽ちに傾倒の悲運に逢へり、夫人秀吉の正室として、一婢妾淀君の短識、徳川の老猾をして乘せしめしを見し時、九折の魂を傷ましめしこと幾度ぞ、想ふて此に至れば、悲涙襟を濕すを禁ずる能はず。

夫人一代の事歴世に傳はるもの少なし、今はたゞ其一端をものして、世人の英雄秀吉と共に永く此の貞婦を忘れざらんことを冀ふのみ。　（完）



國文學講義

井上頼文

紫式部日記講義（四十）

御帳のひんがしおもて、二まばかりに、三十餘人ゐなみたりし、人々のけはひこそ、見物なりしかいぎのおものは、うねめどもまゐる。

戸ぐちのかたに、御湯どのゝへだての、御びやうぶにかさねて、又、みなみむきにたてゝ、白きみづし、一よろひにまゐりすゑたり。

夜ふくるまゝに、月のくまなきに、うねめ、もひとり、みぐしあげども、とのもり、かんもりの女

官かはもしねらをり。

○釋義

○けはひ　氣延の義にて、景色または、容子などいふに當る○見物　壯觀の意○いぎのおもの　威儀の御膳にて五夜に行はるゝ御式なり。いぎ、一本に、つぎに作る。今、類從本に似て改めつ○うねめ　釆女は、もと、陛下の御膳の御給事をつかさどる女官の稱にて、上古よりありし職なり、大寶の制には、宮内省の被官に、釆女司ありて、釆女に關する一切の事をつかさどれり。本居宣長大人の說に、釆女は、主と、御饌に奉仕する者にて、頂に、領巾を掛くる故に云ふ。と、あるがごとし、後宮職員令水司の條に、尙水一人、掌レ進ニ漿水(謂　飦汁爲レ漿也)雜粥ニ之事上　典水二人　掌同レ尙水ニ　釆女六人と見え、また、膳司の條に、尙膳一人、掌下知ニ御膳一　進食先嘗、惣ニ攝　膳羞酒醴、諸　餅蔬菓ニ之事上　典膳二人　掌同ニ尙膳一　掌膳四人　掌同ニ典膳一　釆女六十人　とありて、その登用法は、凡諸氏、氏　別貢レ女　皆限ニ年卅以下、十三以上一雖レ非ニ氏名一、欲ニ自進仕一者聽(謂　氏　別　貢一一人一之外、別欲ニ進仕一也)其貢ニ釆女一者　郡少領以上姉妹、及、女形容端正　者　皆申ニ中務省奏聞と見えたり。されど、はやく、かかる制度は行はれずなりて、その名のみ存せるなり。こゝは、中宮の御殿づきの釆女なり○戸ぐちのかた　入り口の方なり○御湯どのゝへだて　御湯殿の隔てなり。こゝに、御湯殿といへるは、御くりや(食物ツクル場所)のことなり、湯あみをする所と思ひまがふべからず。徒然草に、雉、松茸などは、御ゆどののうへに

かゝりたるも、くるしからずなど見えたる、これなり○かさねて　ひとつわるに、またその上にの意○みなみむきに　御屛風を南向に立てゝなり○一よろひ一雙なり○まゐりすゑたり威儀の御膳を献備せりとの意○月のくまなきに　月影さえて、暗き陰もなきにの意○もひとり　飲料水等の事をつかさどる女官の稱なり、上の釆女の註に○引けゐ、後宮職員令、水司の條を參考すべし○みぐしわけ　女官の稱職記の別記に、久安六年正月十九日、禄法、女官錄、內侍所云々、理髮六人(各六丈、絹二疋)云々と見えたる理髮の女官のことなるべし、しからば、釵を以て髮をわけて、御膳に奉仕する女房のことなり、かみわげのうねめ、などいふもあり。上文に、おものまゐるとて、女房八人ひとつ色に、さうぞきて、かみわげ、しろきもとゆひして、しろき御はんもてつゞきまゐる、など見えたり○とのもり　後宮職員令に、殿司　尚殿　一人　掌供ニ奉輿、繖、膏、沐、燈、油、火燭、薪、炭之事、典殿　二人　掌同尚殿女孺六人と見えて、御殿のことを掌る女官なるがこゝは、中宮の御殿のことをとりまかなふ女房なり○かんもり　中宮の御殿の御掃除をつかさどる女房の稱なり、後宮職員令に、掃司尚掃　一人　掌レ供ニ奉牀、席、灑掃、鋪設之事一典掃　二人　掌同ニ尚掃一　女孺　十人　など見ゆ○かほもしらぬをり　さえわたりたる月のひかりに、顔も見しらぬ者までが、うちまざり居るも見ゆるとの意なり　(評解次號)

和畫通信講義　(第卅四回)

山崎彩峨

墨畫にては、挾墨にて葉を畫き、淡墨にて、花瓣

學藝



花莖を畫き、濃墨にて、花心を入るゝなり。

彩色譜にては、青色を濃墨、又は藍色にて、挾墨となして、葉を畫き、花は、胡粉を合めし寫生に臙脂、又は、紫色黄か、青色赭墨かにて畫き、花心を、紅色または赭墨濃墨等にて、打ち入るゝなり。

地質學の話

在大學　早苗生

地質學の一端、取り分け地上を變化するに就いての話をしようと思ふが、就中火熱の勢力は一番研究して面白いと思ふから第一火熱の勢力から御話を初めて漸々有機體、水、空氣の勢力に移ろうと思ふ。

火熱の勢力

空氣と水との二勢力は陸地を削り去り、削り去つたものは更らに河口に堆積し　又たは湖海の底に沈めて、地面の凹凸を平均するものであるから或る人は之れを地面を平準にする勢力、即ち平等主義を行ふ作用と云ふてをるが眞に其の通りで、此の勢力計りが地上に働いた時は其れこそ大變、高い山も深い谷も何にも個も遠慮なく壓しなべて海面として地球は全く唯だ碧々たる海原となるのである。

だが儘に成らぬは浮世のならいで、一物が勢力あれば、他に之れを抑壓する力が出來るので、これでも一方には地面の凹凸を平かにする平等主義の力が起ると共に他方では急進主義の力が有るのである、急進主義の力とは何であるかと云へば土地を高める力なので今御話せんとする火熱の勢力で

ある、して此れ等平等主義、急進主義、言ひ換ふれば水火の二勢力は現今の地球表面の形狀を造り出したものである、して又た地球の表面を變化する空氣と水との勢力は那邊より其の勢力を生じてくるかと云へば皆な〳〵太陽の溫熱に因るのである、飈々たる風の吹き荒んで樹木を倒し、沛然たる大雨の車軸を流し、白鷗飛ぶあたり怒濤の岩を打ち岸を嚙み、或は漾々として海の如く、急激の流たくましきもの等、凡て地球の表面に於ける運動は、其の趣は各々同一ではないが此れ皆な太陽熱が千變萬化して成したる行爲である。

太陽が無かつた時には地球は冷やかで暗く、其の上部かであつて生物がない、淋しい殺風景な月世界の樣になるであろうよ、之れに反し陸を高めんとするに汲々たる火熱の勢力は其の勢を地の中から仰ぎ來つて表面に出でるので其の源は地球內部の熱なのである、夫から火熱の勢力を御話する前に先づ地球內部の熱と並に其の熱が如何なる形であるかを御話して、其れより火山なり地震等の話しに移るのは順序であろうと思ふ。

地球內部の熱……其の狀態

地上の溫度は緯度に由つて差ふけれども、通常其の平均をとつて華氏の六十度としてをる總て地表に於ける溫度は何處でも晝は暖で夜は冷で、して冬は寒く夏は暑くある、さは云へ、地下に段々下つて行くにつけて晝夜と四季の寒暖の差は漸〳〵減少し、トー〳〵終には之れを感ずることが無い樣になる。

取りも直さず晝夜寒暖の差は地下數尺を降れば消へてしまい、其の四季の差なんかも地下六七十尺

の下であれば決して〳〵無いのである、だけれども地下六七十尺以上を降れば四季の寒暖に因つて少しも影響を被らないけれど地中の熱を受けることは、深ければ深い程多いので、地中の熱の地下に降るに連れて段々増加するのは深い井に引き比べても直ぐにわかる事である、又た鑛山の深坑に徴しても明かであつて其の増加する割合は所に因つて等しくないけれども地下六十四尺を降るごとに華氏の一度を増加するとしてをる、だから地下拾七町餘を下れば華氏の百度を増す割合である。斯様の割合で地熱の度が増すのであるから地下五六里を降つた時には其の熱度は極く〳〵高くつて唯だに水を蒸發せしめる計りではなく、彼の堅い花剛岩其他の堅い岩石でも皆な溶解するは餘儀ないことなのである。

元より地球の内部の物體は掩ふて居る地皮の爲めに壓しつけられて非常の壓力を受けてをるから地中で物體を溶解する力は地上に於けるものよりも層一層、強いものでなくてはならない、其の上地熱増加の割合は場所で同一ではないけれども、地下に降るに從つて次第〳〵に増すことは一樣であつて地球内部の極く〳〵熱いことを吾人に知らしめる確實な證據である。

地面に湧いて出る温泉を見るのに彼の豆州熱海の温泉の様なのは其の熱度が高くつて華氏の二百十二度、とりも直さず水の沸騰點以上に達し、上州草津温泉、相州箱根温泉、信州澁温泉等は華氏の百度以上の温熱を有し此の他、華氏百度内外の温度を有してをる温泉は本邦計りでも屈指するに暇がない程澤山ある。

これ等の事に因つて考へて見るのに地球の内部は其の表面より熱あらざるを得ずで、又た地上に廣

く散布せる火山から時々熱湯、岩汁等をふき出す事を見ても地球の内部が甚だ熱いのを想像することが出來る。

（以下次號）

家庭

慈母と愛兒（承前）

山形縣女子師範學校長　津田元德

●●●●●●●●●兩親の飲酒並に感情――されば、受胎當時に於て酩酊せるか、若くは嫉妬憤恚等、感情の平穩ならざるあらば、決して玉の如き心身兩全の兒童は得られざるべし、得られざるのみならず、瘋癲白痴と稱するもの、皆之より生ぜざるはなし、米國マサチユセット州の報告によれば、白痴者三百名の家族を調査したる中にて、百四十五名までは強酒家の子なりしといふ

●●●●●●●受胎後血液の變化――血液の變化中、兩親情慾の熾んなる時の乳汁の如き、頗ぶる危險のものはあらざるべし、彼の急性腦膜炎、腦膜炎、外耳炎等、流產、產死、若くは、幼兒死亡の最大原因となすもの、若くは、盲啞を生ぜしむる最大原因をなすもの、若くは、瘋癲白痴の最大原因をなすもの、大概此に基因せざるはなし、蓋し、何等の原因を問はず、母體に於て、熱を發するは、血液に變化を生じ、從て乳汁を汚し、遂に、最大なる危險を呈するに至るは左の一例にても明かなり、

●●●●カーペンター心理生理書に、

曾て匠人あり、其家に止宿する兵士と爭論し、終に兵士の劍を拔て迫る所と爲る、匠人の妻

之を見て始めは戰慄の外無かりしが、終に怒り起て身を以て二人の間に投じ、劍を兵士の手より奪ひ取り寸斷して捨つ、此の時二三の隣人來りて闘者を引き分け、事漸く靜まる然るに婦憤怒尙は猛烈なるに際し、此の時までは頗る健康にして除念も無く遊び居たる嬰兒を哺乳したり、何ぞ知らん是れ兒の命數の盡る所ぞとは、此の時に至るまで未だ曾て病に罹りたること無かりしに、數分時間にして乳を放し、手足亦動かず、悶絶して母の胸懷に死す云々と

出生後の嬰兒尙此の如し、況んや胎內脆弱の胎兒に於てをや、此れ胎內後五ケ月位より男女席を同しくせざる所以とす、從て母體の激情、心身特に神經過度、使用等により、其血液の變化を來すの危險なる熱病下痢病等に於て同樣の危險を生ずると同理たるべし、實に此等は胎敎中の胎敎といはざるべからず世の父母たるもの最大の注意を爲さゞるべからざるものなり、

此の同理により出生後彼の兒童が腦膜炎等にて死亡し、若くは不具者となるの大原因は、此汚乳の作用たるを知るべし、されば何等の事情を問はず、母體發熱後の乳汁を與ふべからず、從て乳母を撰擇するも、亦其血族其體格等を唯一の標準とせんより其情欲の如何を知らざるべからざれど、こは頗ぶる容易ならざる事なれば、一時其乳汁を撿して誠に純正なりとするも其の以降を保し難ければ、寧ろ母體及び乳母のかゝる危險に遭遇せしめんより、牛乳の勝れるに(成分は劣れども)若かざるなり、

●●●●●母體の顚躓――尙胎敎中最も注意すべきは、心身

過度の使用に伴ひ、或は其履物、居處等の不注意より、躓き倒るゝ事なりとす、されば、小學にも、婦人子を姙まば寢ぬるに側せず、坐するに邊せず、立つに蹕せず、邪味を食はず、切目正しからざれば食せず、席正しからざれば坐せずと、稱せし所以なり、此蹉跌の爲に打腦を生じ、若くは胎兒の位置を變化せしめ、其の血液の流通を止め、然らざるも前に屢〻述べたる母體血液の變化を來し、胎兒の心身に變動を及ぼす爲頗ぶる危險なりとす、此れ前前章に胎内中の注意の數條を掲げし所以なり、

此等の諸項を顧みれば、胎敎の効力豈決して鮮少ならんや　（未完）

家庭俳句（一）

内田茂文

◎朝起きは身の藥なり啼く鶉　稍月

一年の謀は春にあり、一日の計は朝に在りと云ふからには朝は一日中の歷史の第一ページを埋むる劈頭の大切なる時であるから總てに注意せねばならぬと同時に朝寢坊をしては成らぬ、世俗に譬へにも朝起きは三文の徳と云ふ語があります、朝寢をして利益を得た例は未だ聞きません、且つ朝の空氣は新鮮であつて至極身体に宜いから此新らしい朝の空氣を呼吸して日々の課業に早く着手すると同時に啼く鶉を聞く果報をも得らるゝと云ふものです

◎子の爲めに風待つ夜なり栗落る　碓嶺

子を待つ親の情と云ふものは總て斯の如きもの

です、雨につけ風につけ我が兒の爲めには喜ばしき事のあれかしと心に祈ら間とてはありません、今宵あたりは風にても吹き荒みて栗の實杯にても落ちたらんには嘸や嬉しかるらんとの意味、所謂子は三界の首伽なる語意を言外に含ましたものです。

◎夕飯の夜に入る宿や蟋蟀鳴く　尚山

虫を籠に飼ひ置きて鳴く音を聞うと云ふ風流家の贅澤は別として家の内に自然に蟲の音を聞くは概して中流以下、田舍住居の下層社會で有うませふ、良人は外に出て稼ぎ妻は内に在りて働き日暮を待つて家内一處に團欒して點火頃に夕飯を喫する家の光景を寫したもの、求めて蟲を聴くなど云ふ贅は學び難きも、擲すべき自然の風流、殊に家内中が一日の勞れを夜に入りて足踏み延して樂しく暮らす家庭の和合、この裡には又云ふべからざる人生の趣味がある。

◎落栗や慾なき子にも智恵のつく　猗竹

孟母三遷の比喩を引くは古臭いが小兒は實に無垢潔白の糸であるから是を如何樣に染め上げやうと其親たるものか周圍の制裁一つです、實に實に注意すべき事です、栗落ちずば及ばぬものとして取らんとする念も無かろうなれど落栗を拾ひ爭ふ小兒の常として他よりも、より多く拾はんとする慾の添ひ來るは自然の習慣であるから警めねばならぬ事です。

◎手傳ふて客に成りけり假鮓　如濤

是は平民的家庭には常に行はるゝ事です、敢て鮓とは限らねども時節柄と云ひ殊に五目飯とか鮓とか云ふものは平民的家庭には多く厨に試験されて常に家庭を賑はすものである、遊びに來合した人が拵へ方を手傳ひて出來上た後ち客と

なつて其の料理を賞翫すると云ふ愉快なる家庭の好趣味を詠だものです。

◎子を借りて涼みに出たる娘かな　　酔　民

誦し來つて直ちに其嚴格なる正しき家庭の程を想像されて餘りある句です、由來俗間に行はるる涼臺と云ふものは戸毎の軒に腰掛臺を据へて老となく幼となく男となく女となく打雜りて種種なる世間の四方八方話しを爲し居るものである「涼臺また始まつた星の論」と云ふ古い川柳がある是等は罪のない涼みですが中にはアラレもなき如何しき、談話杯も在つて妙齢の女子に聞かせるは甚だ芳ばしからぬから良家の娘は雜居の夕涼は堅く禁じられてあるのです、それであるから幼子を抱きて夫に托し、僅に、涼みに出ると云ふ良家の孃などの境遇とも解すべき句です。

◎猿蟹の噺や柿を喰ひながら

同じ齢頃の小兒打ち寄りて木の實果物を喰ひながら母親が手枕の添乳に聴いた猿蟹合戰、桃太郎の話しなどして遊ぶ罪なき小兒の家庭なるべし。

裁縫——實修

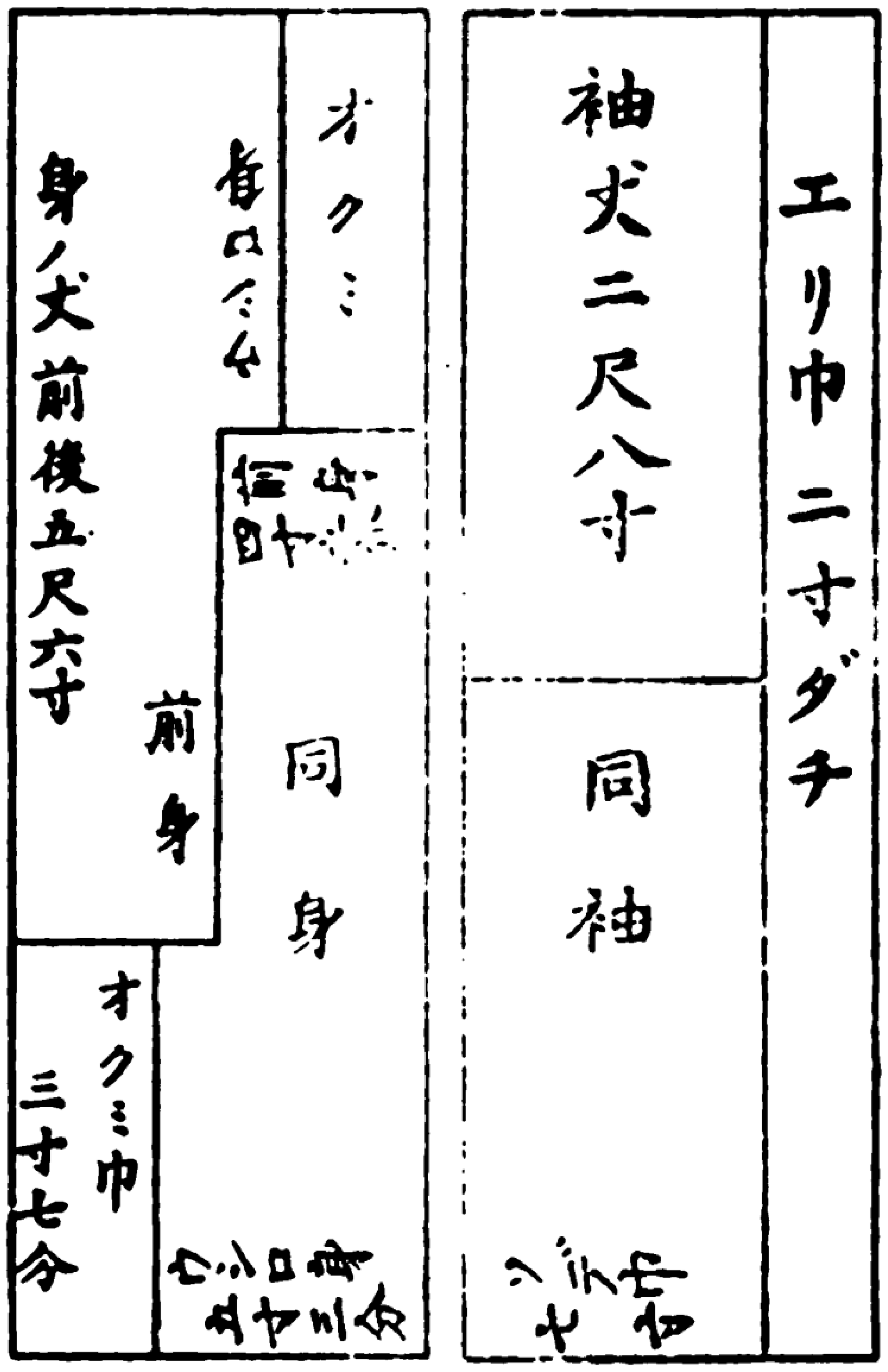
東京野口裁縫専門女學校長　野口兼吉

三つ身袷縫方の順序

先づ裏袖に袖口を掛け、次に裏袖を自已の向ふへ表袖を自已の方に持ち、口明きの印を合せ、表と裏とを少しゆるくして、袖口の切を引きつり、待針を刺して、これを縫ひ、折目を表の方へかへし次に口明きの所を持ち、(但し其持方は左の袖は裏を自己の方へ右の袖は表を自己の方へ持つべし)

尺壹丈四尺巾九寸布三ッ身裁方左の圖

四枚共にこれを止め、夫れより袂の角迄縫ひ、次に袖巾の印を附け、八ッ口を縫ひ、折目は裏の方

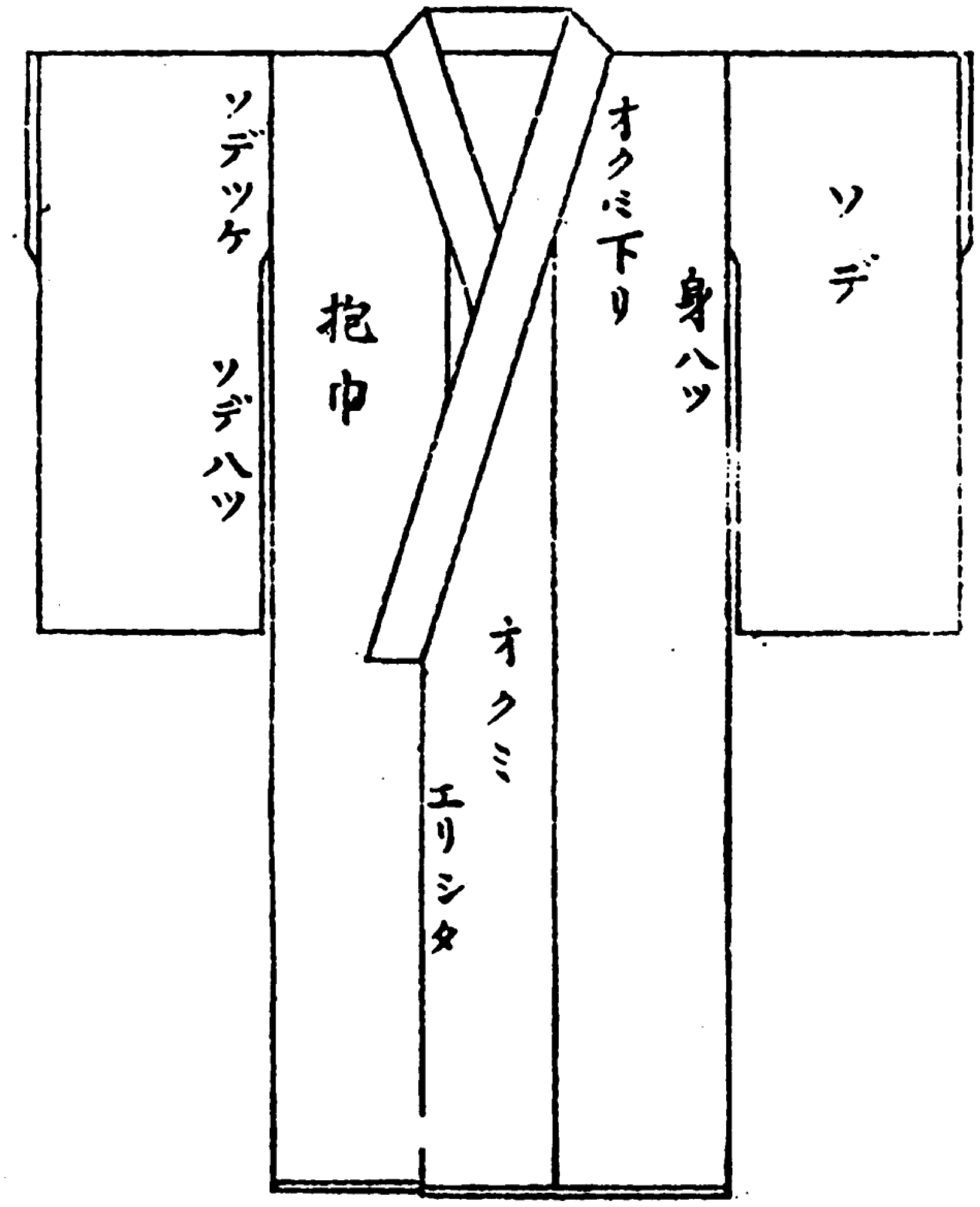


へかへし、袖下は四枚共に縫ひ、折目は表の方へかへし、袂の所の縫込は、最初袖下を折り、次にたてを折り、これを縫ひ付けて引返し、縫目を正しくして躾糸を掛け、次に身頃を取り、衿肩を右

とし、脊を縫ひて折目は自己の方へ返して下に置き、らしろ巾と肩巾との印を付け脇を縫ひ折目は前身頃の方へ返し、次に前巾及び抱の巾印を付け又折を附け、そこへ衽を揃へ、待針を刺し、左右共に下より衽を付け、折目は衽の方へ返し、次に裏の身頃を取り、衿肩を右に持ち脊をぬひ、折目は自己の向ふへ返し、次にうしろ巾と肩巾との印を附け、脇を縫ひ、折目は前身頃の方へ返し、次に前巾及抱巾の印を附け、又折を附け、其所へ衽を揃へ、待針を刺し、右左共裾より衽を附け、折目は衽の方へ返し、次に表と裏との裾口の縫目を能く揃へ、待針を刺し裾を合せ、折目は三厘ほどきせをかけて表の方へ返し、其所へ躾糸を掛け、右左共かくし躾糸をかけ、裾ふきの出をよくきめてふき綴をなし、次に裏と表との間にて脊と脇の縫目を綴ぢ、次に身の八ッ口を表と裏とを合せて

縫ひ又袖付の所は袖と身頃とを四枚共に止め、表袖を縫ひ付け、折目は袖の方へ返し、次に裏袖をぬひ付、折目は身頃の方へ返し、次に衽の縫目を綴ぢ、表と裏の衽巾を揃へ、折目を付け衿下を縫ひ、引返し正しくなして衽先を裏表と身頃と共に閉ぢ、次に脊より左右へ衿を付下し、衿巾のはしに裏衿をぬひ付け、折目は裏衿の方へ返し、衿巾の印を付け、衿先は五厘の縫しろ、折目は裏の方へ返し、三つ衿にしん切を入れて襟を絎け、火のしを掛る時は上の圖の如く出來上りまする。（柿沼しま子筆記）

三ツ身袷出來上り圖



四季家庭料理

大西よし子

はしがき

治庖の道の日に開け行くは誠に喜ばしきことで

家庭

す、併し新聞雜誌紙上で見る諸先生方の献立や料理法は實は餘り結構過ぎて、私共の如き一家の主婦が直に之を臺所に試みよふとするにはチト困難です、左なきだに治庖の極意は、手加減匙加減に依るもの故、文字の上で學ぶは誠に迂遠の憾みがある上、高尚に過ぎるとツイ試みるにもオックーに等閑勝ちになります私は此憾みに堪へず、一昨年より赤堀峯翁先生に就て實習しました、其技素より拙、ナゲ中々人を教へるまでには進まず又教ゆる積りで習ふたのでもありませんが、自家臺所に應用しつゝある献立を世間同感の方々に報告して少しでも味よくそして經濟に仕上げることを、御勸めまうすも强がち無用の事ではあるまいかと存じ、諸先生方の御笑ひも顧みず、本紙に掲載する事としました、それ故ホンの臺所料理でして、通例なら献立を主とし材料を從とするのですが私のは材料を主とし、四季折々市場に有り勝の物を題として献立を組立てる積りです、卑近丈けに應用が爲し易き故一人でも試みられる方が出來れば望みは足る譯でござります。

第壹

材料

一 鯒（活きたる七八寸のもの壹尾）　一 鯵（四五寸位のもの貳尾）

一 胡瓜 壹本　一 胡蘿蔔 貳本

一 茗荷、青紫蘇生姜、山葵各少許

献立

一 皿 こちの『あらひ』かづら胡蘿蔔、山葵

一 膾 鯵、胡瓜胡蘿蔔、靑紫蘇の實、生姜

一 椀 こち、白味噌、茗荷、へぎ柚子

料理法

先づ鯒を十分間清水に入るゝか、或は出刄庖丁にて三度程頭部を打てば死するを以て、直に其鰓を取り、三枚におろし(左右の身と中骨とつまりは三つに割る意なり)『エラ』の下にて左右各八九分の長サの身を取り、(是れが椀の材料となる)其殘りの分を皮を爼に着けて、尾の方より庖丁をねかして徐々と皮を剝ぎ、然る後『毛拔』にて骨を拔き可成薄く『あらひ』にそぎ、堀井戸なれば摺鉢に其身を入れ、三四度清水を汲みかへて洗ふべく水道なれば笊に入れ、捻口にあて四五度搖りながら洗へば身は縮むあり、扨別に丼に水を盛り、少許の鹽を投じ置き、縮みたる身を一寸浸して直に絞り上ぐ、是れ即ち『あらひ』なり、皿に盛り、山葵を添ふること形の如くすべし、又『あしらひ』としての、胡蘿蔔は、西洋種を一寸五分位に切り、表皮を去り、薄くむきて後、縦なりに細く刻むべし。

椀は前に取り置きたる鯒の身に、少許の鹽を振りかけ、直に湯引(小鍋に湯を沸し置き一寸魚を其中に投じ、色の變るを見て直に引上ぐ)を爲し、別に茗荷を縦に薄く刻み、へぎたる柚と共に水に入れ置く、扨又湯引したる跡の七輪にて適宜の量に鰹節の煮汁を拵へ、西京製白味噌を入れて、之を味噌漉或は『すいのう』にて漉し、加減を試みたる後、鯒を入れ、温まる位にして椀に盛る、其時茗荷を投じ柚を椀の蓋に載す。

鱠は先づ鰺を三枚におろし、強き鹽を十五分間程あて置き、水にて能く洗ひ、鹽分を取りたる後、布巾にて水氣を拭ひ、酢の中にシタ〳〵に入れ置き十分程經て、之を揚げ骨を拔き皮を剝ぎ(爪にて可なり)たる後斜に二分位つゝに切り、更に前の酢に投じ、手にて軟かく絞り置く、別に胡瓜、胡蘿蔔を二寸位の長さに、生姜を五分位の長さに

家庭

切り薄くへぎたる後刻み、皿又は丼に入れ十分間程鹽をあて、(手にて揉むを禁ず)水にて洗ひ上げ、強く絞りたる後、酢に一寸浸して、更に絞り置く、扨又別に胡麻を能く摩り油の出るまで)砂糖を一小匙程投じ少許酢と醤油とを混じ、此中に前記の鯵と胡瓜等を投じ、よく混ぜて後皿に盛り揚げ青紫蘇を添ふべし。(以下次號)

女子服飾の沿革(十五回)

上田信成

前回まで、晴、褻、釆女の三装束の大略はすみましたから、今回は襲の色目に就て、其有名なもののみを記るします、このことは、中古の物語文など御覧になるには、是非覺えて居なければならぬことですから、一見了解し易い様に、表を作つて、記載いたすことゝしましたから、これだけの事は是非記臆して頂きたいのである、

元襲と云ふは衣を打重ねる義で在つて、色目とは、夏は何色の衣に何色の衣を重ねるとか、又何々の時は何々の色を重ねると云ふ、一定の制があつた、其一定の色々を襲の色目と云ふのである、俗言で申さば、重着の色合とでも云ふのです、

色目一覧(五十音順)

名目	表	裏
赤色	蘇芳	濃縹
赤朽葉	黄	萌黄
赤櫨	赤黄	萌黄
楝	紫	薄紫
葵	薄青	薄紫
青鈍	濃縹	同上
卯花	白	青
落栗色	蘇芳に黒	香色
蝸	萌黄	同
楓		
枯色	白	薄青
菊	白	蘇芳
桔梗	縹色	同上
黄朽葉	朽葉の黄ばみたるもの	

標目	表	裏
紅梅	紅	紫
櫻萌黄	萌黄	赤花
白菊	白	蘇芳
菫	紫	薄紫
淺黄	薄紺	同上
菖蒲	青	紅梅
青朽葉	青	黄
青柳	濃青	同上
梅	白	蘇芳
掻練	紅（うちたるもの）	同（はりたるもの）
樺櫻	蘇芳	赤花
枯野	黄	薄青
香色	薄香色	紅
黄菊	黄	青
麹塵	青	青

標目	表	裏
胡桃	香色	青
櫻	白	濃蘇芳
白重	白	白
蘇芳	薄蘇芳	濃蘇芳
月草	花田	薄花田
躑躅	蘇芳	青
木賊	黒青	白
花櫻	白	青
花菖蒲	白	萌黄
花菜色	經黄 緯山吹	打青
蒲	黄	萌黄
萩	蘇芳	青
二藍	濃縹	縹色
藤	濃紫	白
柘	萌黄	紫

名目	表	裏
海松	萌黄	青
紫匂	紫	薄紫
紅葉	紅	青
龍膽	蘇芳	青
若かへで	薄青	紅
葛	青に黒	淡青色
撫子	紅梅	青
花薄	白	薄紅
花撫子	紫	紅
花橘	朽葉色	青

標目	表	裏
櫨紅葉	蘇芳に黒	黄
檜皮	蘇芳	縹
二色	薄色	青
牡丹	白	紅梅
檀	蘇芳	黄
虫青	青	二藍
萌黄	薄青	縹色
雪下	白	紅
若苗色	濃萌黄	同上
女郎花	經青 緯黄	萌黄

元より其種類は澤山ありますが、以上記るしましたゞけ、記憶すれば大抵不都合はないでせう

此外に女房の服としては汗衫細長の二種がありますが、これは男女に限らず、童の時着用するもの

でありますから、此處では畧しまして、終りに、壺の裝束の事に就て、一寸記るしておきます、

○壺裝束

壺裝束とは婦人の物詣或は旅行の時などに着用したものでして、云はゞ旅行服であります、昔しは上等の婦人は外出するにも、中々徒歩はせなんだのですが、此時代の中頃より、都近くの神社佛閣に詣るのに、往々徒歩したらしいのである、併しこれはたまさかの事で、源氏物語や、枕の草紙などに見えて居るのは、多く中等の婦人らしいのである、而して其樣は、武家時代に爲つては、かづき裝束とも云つて被衣に市女笠と定まつて居ましたが、此時代には未だ左樣な定めは出來て居ませんから、充分にはわかりませんが、其當時の本とか、或は後に出來た被衣裝束などに依て考へますに、大抵後へ垂れた髮を小袖の中に着こみ、兩方の褄をつばね折りて前にはせ、市女笠を被りたる姿を云ふのである、枕草子に髮きこめたる怪しのものなど云ふ語も、これを云つたものでありませう、名義はつばね裝束といふより轉じたものでせう、尚くわしくは鎌倉時代の部でお話いたしませう。



春日驗記所載
婦人家居の裝

終りに一寸申しておきますが、衣服に綿を入れることも此時より、始まつたのであり、此の以前は

單衣か袷であつて、冬の寒い時などには、これを幾つも重ねて着たのである、處が世を經るに從つて段々簡略を主とする樣になりましたから、自分の宅に居る時には、幾つせ〳〵着用するのは如何にも不便であるのみならず、又經財上も餘りよくないからと云ふので、一枚か二枚かで事足る樣に綿を入れて着ること丶ありました、之が即ち今日ある綿入衣の起源であります、此後は尊き人も卑しき人も、一般に寒中は綿入を用ふる樣になりました、

以上記るしましたのは即ち平安時代の女子衣服の一班でありますが、申すまでもなくこれは尊い身分の人のみでありまして、無位無官の賤女は無論かやうな姿はせなかつたのであります、然らば平安時代の賤女は、如何なる衣服をつけて居たかと、問はれなば、一向に記るしたものがないで、一寸答に苦しみますが、幸に繪と云ふものが傳はつて居りますので、其名稱はわかりませぬが、形丈けは確かに想像することが出來ます、即ち下に記るしました圖は何れも此時代の賤女を寫したもので

平安時代賤女之圖

信貴山緣起所載 鳥羽僧正筆



法隆寺所藏扇面圖



ありますから、之に依て想像しますれば、此の時代の賤女は大抵かやうな風であつたと云ふことだけは窺ひ知ることが出來ます、

枕草紙に現れたる社會

文學士　小林雨塔

（第二）學問

當時縉紳、佳姫といはるゝもの　、いかばかり讀書の心得ありしが、藤原師尹、其女芳子、後の村上の女御宣耀殿女御の御家にありし時、之に戒めて曰ふ樣「一つには、御手を習ひ給へ、次にはきんの御琴を、いかで人につきまさらんとおぼせ、さて古今の歌二十卷を皆うかべさせ給はんを、御學問にはせさせ給へ」と、當時の貴女の最も心得べき事共は此くありけむ、人々相互の交際に、和歌の切要なりしこと一方ならず、語らんと欲する所あれば、之を歌に詠じ出して示す、之れが應答には、返歌せではある可らず、男子の女子を見ては、戲るに、和歌を以てし、其返歌の巧拙に由りて、品位の高下せらるゝと甚だしく、かゝるとき、才氣勝れ、返歌速やかに巧なるものは、世の譽を得るなり、從て手跡の必要もありぬべし、殊に宮中閑遊多くして、之に侍する輩、和歌手跡に拙なからんは、いかばかり心苦しかりけん、歌集の數々自ら寫し持ちて、之を暗記するものあり、此の他和漢朗詠集、白氏文集、及樂天の詩等專ら讀ばれ、詩文中なる名句を覺へ居りて、他人と應答の際用ゆるは、賢しとせられ、覺へざらんものは、時に人の笑を招く、又史記漢書の類も、亦多く讀まれし所なれども、此等を讀む人は已に碩學博覽の名を得しが如し、以上は男女共に然りしと雖、

皆縉紳貴女の事、下流の者の文學なきは、云はずもの事なりかし、

（第三）上下の懸隔

此の頃上下の懸隔は甚だしかりしが如し、草子中に散見する所に由りて察するに、貴人の輩の下流に對する同情殆どこれなく、之を一概に下種と呼びて、人らしく云はず、清女が下種の家に明月のさし入り、雪の白く降れるを見ては、口をしなど、あるは寺に籠り居りしに、下種の近く寄り來しはいと惡しと、又下種の女の、殿上人の美しきを賞するは、分を知らず、をこの事ありなど記せるあり、甚しきに至ては、彼等宮女の輩すら賤しき者の家の燒かれしを嘆き云ふに、聞きて人々之を笑ひ、其不文なるに乘じては、歌を詠じて之を弄せしたぐひ、此等上下差等の大なりし一證として見るを得べし、女房等珍らしく郊外に出でゝは、在所の男女を召し集めて、舞ひ跳らしめしもあり、貴種の輩の世に誇りし樣思ひ遣るべし、

（第四）男女の語らひ

風俗の淫縱放恣なりしは殆ど意表に出づ、先きに述べし如く、男女互に歌を以て相挑み、相應へ、男に歌いひかけられて返歌せぬは、女子の耻と思はれしに似たり、當代の戀とは肉交の謂にして、純潔なる情交に安ずるものなく、一女子の同時に二三の男に通ずるも珍らしからず、一男子の己に定まれる妻ある身なりとも、他の二三女に通ふも頗る多かり、されば其情誼のあはく〵しかりしも想像し得べく、他人一片の甜言に俄かに絶つもあり、端なき感情の衝突に、永年の契を捨てし類珍らしからず、中には女のたゞならぬ身とあつて、捨てらるゝもあり、且當時の情勢として、早婚行はれ、又男女相通ずるを耻とせず、艶書等男女

交々其友に示して、情夫情婦の情の濃やかなるを誇り、衆人稠座の前に之を談じて憚らず、故らに雨の夜に女を訪ひて、己が情のたゞならぬを衒はんとす「人の心々なればにやあらん、物見しり出ひ知りたる女の、心ありと見ゆるなどをばかたらひて、數多いく所もあり、もとよりの便宜どもあれば、繁うしも得來ぬを、猶さるいみじかりし折に來りし事など、人にも語りつがせ、身をほめられんと思ふ人の所爲にや」と清女は記せり、殊に宮中に於ける男女の交通の自在なりしこと然くべし、深夜外より入りて、女を訪ふも妨げず、さらずとも男の女の局に行きて、物語し戯るゝは、公然許され、畏れ多くも、天子皇后の御前も憚らず、又却て見て樂まれし狀あり、相逢ふての明朝は、後朝の文とて、男の方より、女に文を朝露の干ぬ間に送り來る戯も可笑し、

されど當時尙天子を除きまつりては、妾の名目ありしとも見へず、一人の定妻の外、他の女に通ずるは自由なりしなるべけれど、必ずしも家に容るるにあらず、離合常なかりしなり、當時結婚の風は、父母の許を受て、己が好める、或は親の意に任せて、さるべき男を己れの家に通はしむる事をさへ、世には婿とると云ふあり、又女の方より男の家に通ふもありしが如し、さて相逢ふこと暫時にして、互に飽きて忘るゝもあり、情誼愈々濃やかにあれば、爰に正しき夫妻となる、尙私通の多かりしは云はずともならん、

（第五）上下程々の生活

上萬乘の御樣を窺ふに、流石に億兆の尊敬を受けられしは云ふ迄もなけれど、宮人との御間、甚だ嚴なりしものとも見へず、宮女等の男と戯れ語る樣を見ては、喜び玉ひ、後宮に入られては、宮女

の中に居玉ひて笛吹き遊ばされしこともあり、又殿上人、上達部共に、宮女を集めての御戯もありしなり、

○○○皇后、中宮の上を見るに、宮女等と物語る様なと、頗る打ち解けられ「女房と物いひ、戯れなどし給ふを、いさゝか恥しとも思ひたらず、聞え返し、空言などの給ひかくるを、爭い論じなど聞ゆるは、目もあやに、あさましきまで、あいなく面ぞ赤むや「女房の情人と語るも、御目に煩しゝとも思ひ玉はず、時には、之を以て戯れかけ揶揄い玉ふこともあり、宮女も又忌み憚らず、男の言動の面白ろく可笑しきは、何呉となく、故に御前に啓す、又皇后の外戚の男女、しからずとも他の殿上人等、自由に後宮に參內し、宮女と戯るゝは常なりしが如し。



○○○殿上人、上達部は、前々記する所にて畧見ゆる如く、管絃、和歌の道に通せしは、最も榮ある人と知られ、弓馬兵箭の道殆ど癈せられ、閑遊是れ事とするものから、只風流に優しからんを望みて、言語粗く行爲烈しきは、嘲り笑ふて交らす、思を苦むるは衣冠服裝の上なり、彼等外に出づる時は警蹕せしめ、通常は互に名を言はす、官名を口に呼びかはせしと云ふ、

宮の女房は、多く貴種の家の女なれば、皆和歌の道に暗からず、又此の心得なくば、勤を終ゆる能はざりしなるべし、中には宮仕の勤の憂さに、出で、暫くしてまかり退くもあり「中々に人にもいはれ、むづかしき事」ありしならん、世俗は宮仕の女をいかに見しか、清女は記して曰く「宮仕する人をば、あはく\しう、わろきことに思ひ居たる男こそいとにくけれ」と、實に上天子を初め奉り、上達部殿上人四位五位六位、又は女房の從者ども、あらゆる男に面を曝し、多くの人の中に立ち交らへば、自ら情も淡々しく、「うへなどいひて、かしづきすゑたる」世の夫婦よりも、情濃やかならざりしは固より其の所なり、

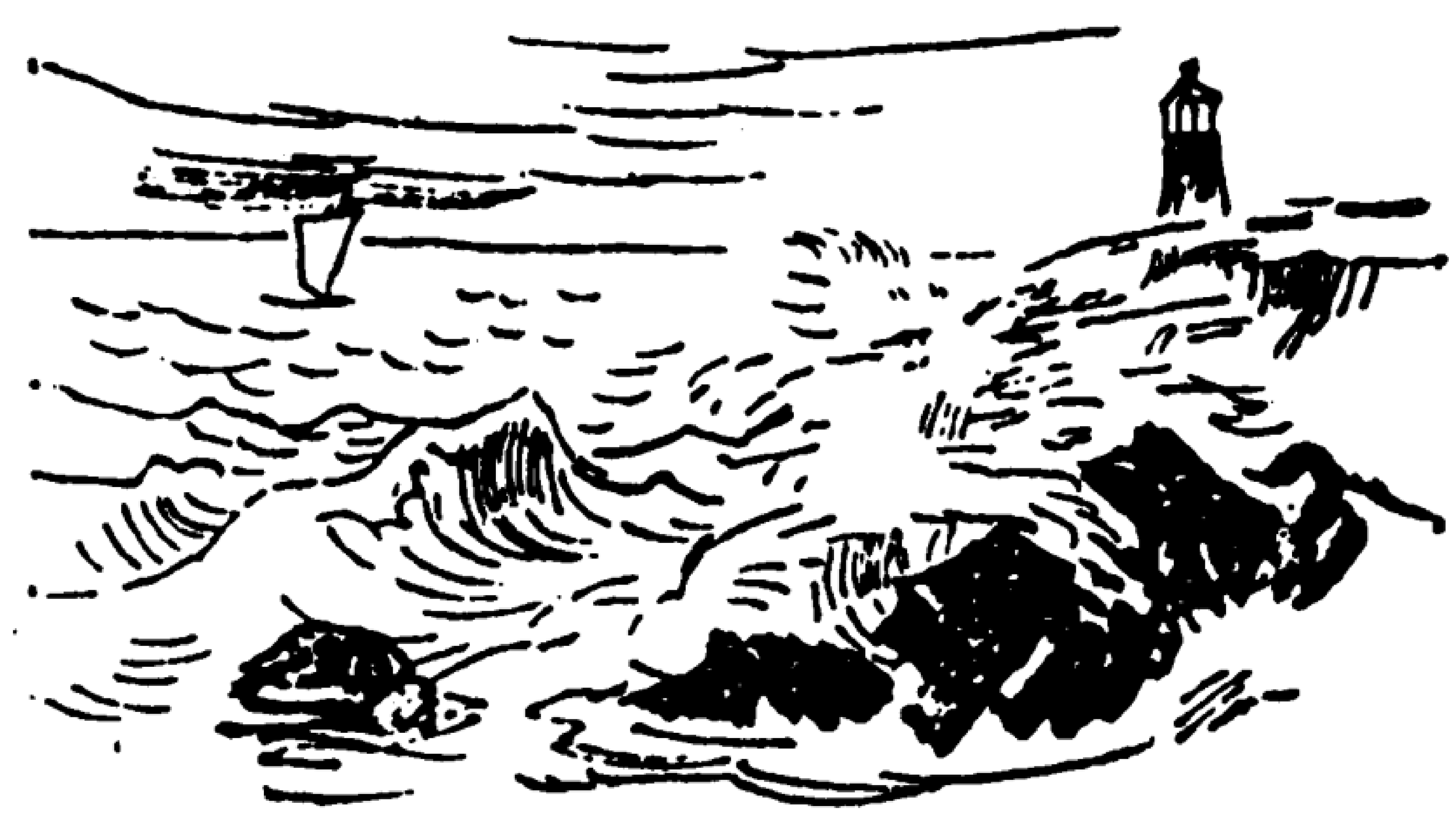
後宮に勤むる宮女等は、里亭に下り居る時ありとも、人多く出入し、私かに其援引によりて官位を望むもあり、後宮にては、内謁など行はれしなるべし、彼等の出入に、車を用ひ得しは、五月雨の頃のみなりとか、物見には物見車と云ふに乗り行き、車の上ながら見るなり、居常白粉など化粧し居りしと見ゆ、

女房の皇子、皇女の御乳母となりては、「唐衣も着ず、姿をだに用意なく、白衣にて御前に添ひ臥して、御帳のうちを居所にして、女房どもを呼びつかひ、局に物いひやり、文とりつかせなどして在るさま、云ひ盡すべくだにあらず」とあるにて、權威ありし樣見ゆ、

その頃官吏の叙任は「除目の程など、内裏わたりはいとをかし、雪降りこほりなどしたるに、申文もてありし、四位五位、わかやかに心地よげなるは、いとたのもしげなり、老いて頭白きなどが、人にとかく案内いひ、女房の局によりて、おのが身のかしこきよしなど、心をやりて說き聞するを、

若き人々は眞似し笑へど、いかでか知らん、よきに奏し給へ、啓し給へなどいひても、得たるはなし、得ずなりぬるこそいとあはれなれ」と記せるにて知らるゝ如し、然に援引請託の行はれしならん、

靱負佐と云ふあり、市井の巡撿なり、「靱負佐の夜行、狩衣すがたもいとあやしげなり、……六位藏人、うへの判官とうちいひて、世になくさらく\しきものに覺え、里人げすなどは、この世の人とだに思ひたらず、目をだに見合せで恐ぢわなゝく」、實に疇間庶民の目を聳やかす樣の、夜にありて、己が女の許とて「内裏わたりの廊などに忍びて入りふしたる」に似つかはしからず、當時の役員皆此の如し、



藏人は最も勢ありし官にして、もと地下の輩ながら、昇殿を許され、前には並び立つべくもあらざりし殿上人と、相共に道行きなどす、されば後に巡爵せられて、藏人の役儀を經へ、地下に下るは、泣き哀しみて惜しみし所なり、

○法師の素行修まらず、淫逸にして女犯の戒を省みざるは、俗人に異ならず、「男も女も法師も、ちぎり深くかたらふ人の、末まで中よきかたし」と、されど何人の之を非難せしもありしか、「精進物のあしきを食ひ、寢ぬるをも、若きは物もゆかしからん、女などある所をも、などか忌みたる樣に、さしのぞかずもあらん、それをしも安からずいふ」と、淸女が同情も可笑し、

又法師は多く人の輕ずる所となりて「いとたのもしきわざを、唯木のはしなどのやうに思ひたらんこそ、いとほしけれ」「法師のなにがし、供奉などいひてあり、なども、何とかは見ゆる、經たふとく讀み、みめ淸げなるにつけても、女にあなづられて、なりからこそすれ云々、」されど「僧都僧正になりぬれば、佛の現れ給へるにこそとおぼし惑いてかしこまるさまは、何にかは似たる」と、法師も僧都僧正ならぬ程は、木の端の如く思はれしか、是れ全く彼等破戒の爲とはいへ、又當時俗衆の信仰の敬虔ならざりし所以なり、

○○修驗者の輩は、修業として高野、熊野等の高山を攀ぢて、恐しき目も見、山中に籠りて心神を鍛ふ、業終へて驗ある名を得れば、所々に呼ばれて、夜もよくは寢やらず、「いたく煩ふ人にかゝりて、物祟調ずるも、いと苦しければ困じてうち眠れば、ねぶりなどのみしてと咎むるもいと所狹く」「驗者の物祟調ずとて、いみじうしたりかほに、獨鈷や珠數などもたせて、せみ聲にしぼり出し、讀み居たれば、聊去氣もなく、護法もつかねば、集めて念じ居たるに、男も女も怪しと思ふに、時のかはるまで讀みこうして、更につかず、たちねとて、珠數とりかへしてあれど、驗なしやとうちいひて、額より上ざまに、頭さぐりあげて、あくびをおのれうちして、よりふしぬる」、其生活の狀此の如し、

此の草子の作者貴種なればにや、下民の狀態を記すること審らかならず、聊か見得し所を記さんに、

○○農民の狀は、「賀茂に詣づる道に女どもの、新しき折敷のやうなるものを笠にきて、いと多くたてり、歌をうたひ、起き伏すやうに見えて、唯何すとな

く、うしろざまに行くは、いかなるにかゝわらん」と、此れ田植のさまならん、「ほとゝぎすよ、おれよ、かやつよ、おれなきてぞ、われは田にたつ」といふ田植歌も、流石に稚なげなり、「八月晦日がたに、太秦にまうづとて見れば、穂に出でたる田に、人多くてさわぐ、稲刈るなりけり、……これは女もまじらず、男の片手に、いと赤き稲の、もとは青きを刈りもちて、刀か何にかあらん、もとを切るさまの、やすげにめでたき事にいとせまほしく見ゆ云々」、收穫の光景なるべし、



○○船人の波風荒き海の面をも恐れず、「思へば船に乗りてありく人ばかり、ゆくしきものこそなけれ」と、都人の思ひしも實に理に、「ましてそこひも知らず、千尋などもあらんに、物をいと多く積み入れたれば、水際は唯一尺ばかりだになきに、下種どもの、聊恐しとも思ひたらず、走りありき、つゆあらくもせば、沈みやせんと思ふに、大なる松の木などの、二三尺ばかりにてまろかなるを、五つ六つぽう／＼と投げ入れなどするこそいみじけれ、海遠く波風たゝぬ平安の宮裏に、閑日月を送るもの、、此く見しもをもし

ろし、術工匠、相撲、うち猿樂言、傀儡等の名見ゆれど、其さま本書のみにては詳らかに知り難し、うち猿樂言は、市井を徘徊し、人家に呼び入れられては、戲言に人の樂をなすものなり、又強盗、盗人の文字所に見ゆ、乞食の聲多く市中を彷徨せしと見へ、殊に驚くべきは、禁中に出入して、皇后さへの御目に觸れしこととなり、宮女等群れ集りて戯れかけ、歌ひ跳らしめ、時には皇后等の御衣の舊きを賜りしことなどあり、佛供の下し賜へと、禁裏後宮の椽の下まで入り來る、其さまを記するを見るに、「老いたる女の法師のいめじく煤けたるかりばかまの筒とかやのやうに細く短く、帶より下五寸ばかりなる、衣とかやいふべからん、同じやうに煤けたるを着て、猿のさまにていふなりけり」若き女房等「男やあるいづこにか住む」と口々に問ひ、「よるは誰とねん、ひたちのすけとねん、ねたるはだもよし……」卑猥の歌を歌ひ舞ふ、かゝる徒の禁中に出入せし、いかに守衛のをろそかなりしにやあらん

（完）

諸道の歴史

文學士　宮崎鳥府生

繪　畫（中）

土佐家系

春日基光―隆能―隆親
　―光長―經隆―邦隆
　―慶恩
　―行長
　―隆兼
　―長隆……行廣
　―光秀
行廣―光重―光弘……
行廣―行秀―廣周―光信……

文華の咲き匂ひたる平安の榮花も一度源平の武士等、都大路を濶歩するに至りては、忽に昨日の夢となり、凡ての事物は悉く改まりぬれども、ひとり繪畫の道は幸にも、土佐家の隨一、光長、慶恩、經隆等の手によりて増々進歩發達の運に接したりき、殊に光長の如きは其技量土佐家の巨魁にして、其畫く處何れも社會萬般の事實を取りて縑素に上せ、意いたる處筆又至りて、毫も檢束せらるゝ所なし、加ふるに慶恩の如き名手同門相たすけて、研究の結果は、平安時代の如き軟弱なる畫風を脫し、筆力勇健眞物に接するが如き思ひあらしめたりき、其作の今に傳はるもの元より多きも、其大作として尤も喧傳せられたるは、光長の伴大納言草子、年中行事繪卷、地獄草子、慶恩の平治物語繪卷、過去現在因果經、當麻曼荼羅緣起等なり、

又光長、慶恩と時を同じくして、左京太夫藤原信實朝臣あり、この人出でゝより似畫は益々興隆したり、次で貞永、天福の頃、後堀河院、殊に似顏畫を御好みありて、信實をして畫かゝしめられし由著聞集に見えたり、信實の絶技はよく人の知る處にして、今日其作北野天神緣起、紫式部日記繪卷、繪師草子などの、光長、慶恩が作と同賞せらるゝにても明かなり、因に云人の似顏畫をかゝせ給ひしことは此以前旣に花山法王の書寫上人をかゝせ給ひしこと見え、又百濟川成、童子の面を寫して其人を得、將門が首を寫して實檢に供せしことなど數多史籍に散見したり、されば爾來似顏畫は名手の作として世に歡迎せられたるが、後堀河天皇の御代は殊に主上の御嗜好たるを以て、大に流行したりければ、著聞集にさへかくは記るせるなるべし、之を起原と思ひまがう可らず、

鎌倉時代の繪師
（鶴ヶ岡放生會歌合繪）



又此時代の末に至りて宅磨榮賀なる者出で、始めて古來の倭畫に漢土の畫風を交へ、一種宅磨流なるものを創始したり、其子孫爲氏、爲成等よく、此流を發揮し遂に一家をなしたりと云ふ、

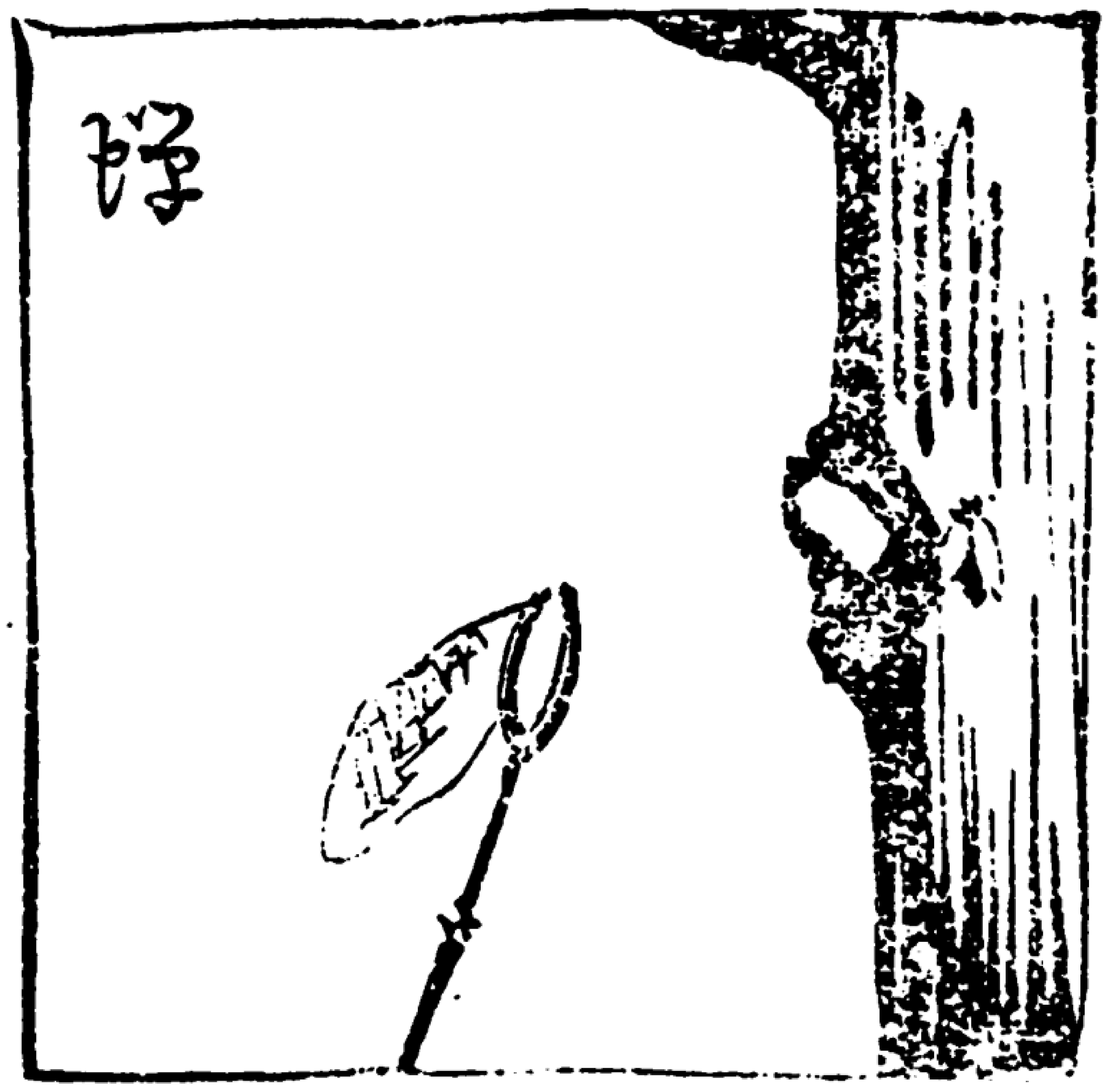
漢畫畧系

○明兆如雪―周文
- 正信（姓狩野）―元信（號古法眼）（狩野家祖）―直信
- 雪舟（雪舟流祖）
  - 秋月
  - 雪村
  - 蛇足（曾我流祖）―宋丈
- 宋丹（姓小栗、宋丹流祖）―宋栗
- 能阿彌（號眞能）
  - 藝阿彌
  - 相阿彌

漢畫は明德、應永の頃、明國より如雪なる者、來朝して、京都に畫學校を建て、支那宋元の畫風を

敎授したり、之より漢畫の名稱は興りしなり、按ずるに漢畫は墨畫にして草筆なり、日本各派中尤も往古のものあり、さるは男龍始め後世來朝の畫工の奬勵にかゝり、以て進步の域に達せしなり、かゝれば其かみの畫は悉く漢畫とも云ふべきなるを只に繪とのみ唱へしぞかし、其後巨勢金岡一派を開きしよりは、これによりて土佐家の倭畫を生じたりき、爰に於て從來の漢畫は遂に其面かげを失するに至りたり、然りと雖も、此時代に至りて、倭畫も亦漢畫の爲に一時衰頽を見るに至れり、

其伯豆州の產にして、東山殿義政に仕へし、狩野祐勢正信を始めとし、周文、雪舟、等觀、宋淵等、亦この畫法を如雪に受け、專心研究の結果、正信雪舟の二人は遂に一派を創始するに至れり、又此時に於て淡路の僧明兆なる者、頗る此技に長じ、常に公卿間を往來して斯畫を弘めたりと云ふ、兆殿司と稱するは卽ちこの僧なれり、是より當時の畫風は三派に分離し、土佐派は畫所預として公家に根據を固め、雪舟、元信、の二流は專ら東山殿によりて其發達を奬勵したりける、爰に於てか漢畫は一時に勢力を得、巨勢土佐兩家を除くの外後世日本の畫師は殆ど雪舟を學ばざる者なきに至れりと云ふ、



畫伯雪舟は備中國赤濱の產なり、諱は等揚、備溪齋と號す、中年京に上りて相國寺に入り、讀經の傍、如雪、周文に於て漢畫を學ぶ、後、寬正年中

支那に至り、四明山に登りて、天童第一座と爲れ

周文─雪舟┬雪村┬雲山
　　　　　│　　└雲林
　　　　　└等顔…等益─等伯

り、雪舟の明にあるや、名山勝地を探訪し、遂に運妙を極めたりと云ふ、其後、明帝の勅によりて禮部院の壁に畫き、又明人の乞に應じて、日本の富士、三保、淸見の三勝を畫きしに、當時の鴻儒詹仲、大に之を稱して自ら和賛を其上に加へたりとぞ、後之を表裝して、一は支那に一は日本にありと云へり、成化中、日本に歸り周防の山口雲谷寺に住せり、故に雲谷又は雲谷軒の別號を有したりき、

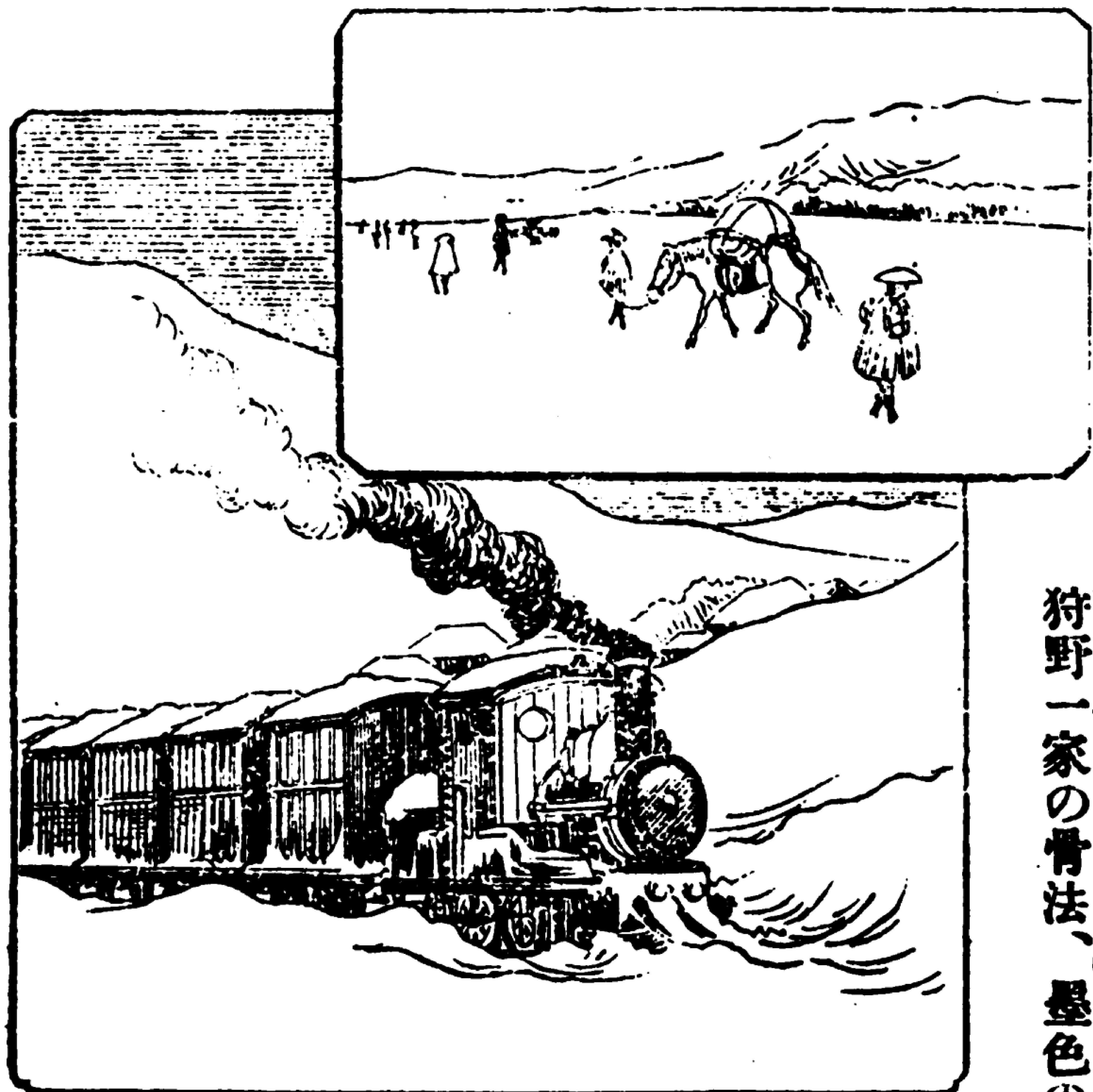
狩野正信は相州小田原の人なり、剃髪して祐勢と改む、東山慈照院殿の近侍也、畫は周文の弟子にして、斯道の名手なり、或時東山殿金殿を作り、宗丹に命じて畫かしめたりしに、畫き終らずして歿したりしかば、正信をして之を畫かしむ、其筆法一に宗丹と異なるなし、將軍大に喜びて頗る歎待したりしと云ふ、一子元信又

周文─正信─●元信(狩野家祖)(號古法眼)─●直信…松榮─●永德─
　●山雪─永納
　●山樂…光敎
　光信─孝信─●尚信─●常信─●周信(姓古川號養朴)
　●守信(號探幽)…探雪
　　●探信
　　●探山

無双の名手として世にあらはるゝや、遂に天下の畫工長として法眼の位に叙せらる、其子直信

又法眼に叙せられしを以て、世に之を古法眼と稱して、狩野家の宗となす、爾來暫時我邦の畫界は土佐派(倭畫)雪舟派(漢畫) 狩野派(和漢折衷)の三家分立して遂に之を支配するに至れり。

抜に狩野家は元信に依て創立せられたり、元信若きより倭畫の筆格を立てんと欲したるも、當時戰國の事とて意の如くならざるより、難を諸國に逃れ、遂に一流を創始せり、其苦心思ふべし、狩野永納が土佐光信、僧雪舟、狩野元信を日本の三大畫家と許したるも亦宜なるべし、其後守信に至りて草筆の畫、大に進歩し、狩野一家の骨法、墨色の淡濃をあらはしたり、實に元信は狩野家の祖となすと同時に、日本に於ける漢畫の祖として忘る可らざるものなり、



松嶋紀行

文學士　濱田紅於

目には定かに見えねども、荻の上風、萩の下露、我もうき世を秋の空は、物かなしかるを、學の窓にたれこめて、徒

に思に惱まむもおこのわざなれば、九月十一日の快晴に乘じ、同僚嚴苔及び學生華仙華月等六名を促して、正午過ぐる頃、ゆくりなくあこがれいでぬ。さして行くは松島やよからむと、停車場にいそげば、一時の列車はなさけなくも動き初めたり。次の鹽釜行は四時を過ぎざるべからず、とやかくと云ひのゝりし程に、三時二十三分の列車は來りぬ。はやく乘るべし、乘りて後に後圖を議せむと云ふものありければ、すなはち赤切符を求む。空なごりなく霽れ渡りて、日かげ花やかなれど、初秋の風身にしみ〴〵と車窓よりながむれば、七つヶ森の緑うるはしく、千町の小田にうちなびく垂穗の稻のうまし稻、さてはかなたの雜木林、こなたの鎭守の森など、とりいでゝ云ふべきものならねども、なほ心ゆくまゝにうちながめつゝ、諸生の問に應じて、曾遊の風景を説きし程に、いつしか岩切驛を過ぎて、利府驛につきぬ。滊車を下りて、野路を渡り、山路を踰えて、鹽釜町に入る、鹽釜神社に詣でむの志なきにしもあらねど、いと行手のいそがれて、華表の外より遙拜しつゝ、やがて埠頭に立て舟を呼ぶ。舟子聲に應じて來り、扁舟に棹さして松島に向ふ。時正に四時、

時已に晩ければ、再遊を期して、只近海を周航せしのみ、軟風徐ろに吹いて、海波いと穩かに、櫓の音低くきこえて、欵乃の聲ほがらかなり、港口を出づれば、眼界大に開けて、岩手の島嶼遐邇に點散す、白帆の去來するは蝴蝶の飛べるが如く、波間の漁舟に綸を垂るゝ人は、閑鷗と倶に機を忘れて、全く世外の仙たるに似たり。海のかなたに打かすめるは、雲か山かそもいづれの國ぞ。

白帆孕みつくして走るほどに、島迎へ嶼送り、殆

んど應接に遑あらず。形大艦の浮べるが如きあり、翠松天籟の樂を奏し、名も知らぬ草風にゆらめく、海波怒る所、巉巖窪みて白沫澎湃し、時ならぬ雪を散らす。舟は獅子ヶ崎に至りて一轉し、艫を右に向く。舟子樸茂にして仁者の風あり、彼此を指點して曰く、親に堪當裸島、曰く十二のくさぎ島、曰くかの海角を回ぐれば松島の町を望むべしと、予夙に藤村の詩を讀んで、瑞巖寺の宏壯を知る。獨眼龍が偉蹟も見まほしく、富山の眺望も心にかかれど、夕陽已に虞淵に沈みて、腹中虚しきを覺えたれば、巖苔のいさめを納れて、再遊の時を期しぬ。年少氣鋭逆浪に抗せむことを主張せし華仙等の不平顏も笑止なりや。舟を石門のこなたに止めて、夕榮の空のけしきをながむ、巖苔と華月と舷に凭て、島山のたゝずまひを寫生す。悾々子なるものあり、口須臾も唱吟の聲を絶たず、嬌音宛轉として浪を度り、餘韻縹渺として巉岩に反響す。但惜むらくは好漢文字を解せず、さる程に茜の色やう〳〵褪せて、淡紫の空えも云はれず遠山は女繪の如くかすみはて、横雲棚引くさま又なくをかし、寫生成りぬとて、巖苔畫帖を示す、予忽ち筆を執て賛すらく、今更に稱へ云ふべき言もなし。あはれこの島あはれ此海、筆力の輕妙、詞藻の拙劣、固より日を同じうして語るべからず日光の餘影全く去りつくして、半輪の月は已に中天にさえ渡りぬ。金龍波に驤りて、風の色益々白く、零露海に横はりて、衣手轉た寒し。携へし所の梨子已に健兒の健啖する所となりて、饑愈防迫り來る。舟子曰く麥酒一罎ありと、善哉々々、地獄に佛の感あり。忽ち盃を引て微醺を估ふ。巖苔もと酒膽極めて小に、健兒等は未だ醍醐の味を知らず、故に盃は獨り我手に歸して一罎即ち索く

甁を敲いて低唱すれば、悠々子舳に座して高吟し健兒聲を齊しうして舟遊の歌を唄ふ。玉兎は斗牛の間を徘徊して、太白天の一方に陸離たり、詩興頓に動くと雖も、予もと韻事を知らず、低回呻吟して、辛じて一首を得たり。「初秋の月しろ冴えて松島の、島山かくれ雁鳴き渡る」嚴谷曰く、我未だ鴻雁を聽かず、對へて曰く文人の法螺ありと、健兒等手を拍て大に笑ふ。かくて舟はいつしか鹽釜港に入りぬ。兩岸の燈影波に映じ、欸乃の聲曲にひゞき來る。舟を岸頭に捨てゝ陸に上れば、遊客絡繹黄塵萬丈我等はまたうき世の人となりぬ。逆旅樓上晩餐を命じて、連りに數碗を傾け、箸を投じて腹を鼓すれば、汽笛一聲、火輪車は來れり。倉忙歸裝を理めて樓を辭し、車室に座するや。轣轆の音きこえて車は動き初めたり。車窓に倚りて見渡せば、月は愈々明にして玲瓏玉の如く、稻葉におく露しげくして、蛩々の聲かこつが如く、訴ふるが如し。八時半車は靑葉城下に駐りぬ。



來て見ればそれ程になき富士の山、想像は常に事實と齟齬するものなれば、松島の景も聞きし程にはあらざるべけれど、海のけしき、島のたゝずまひ臨觀の値なしとなさず。この日舟遊せし所、松島灣の十が一に出でざれば、門を入りて堂に上らざるが如し。故に景致の妙を語ることを得ず、たゞ惜む所は海藻繁榮して、淸冽深泓の槪なかりしとのみ、

結婚に對するトルストイ翁の意見

法科大學　佐藤天風

(三)翁の排結婚說

彼の斷案は、總ての場合に於て大膽なり、異性間に於ける關係に就ても、彼は豫言者の態度を以て揚言して曰く基督敎的一夫一婦は或る宗敎の許容する一夫多妻或は一妻多夫の其よりも優る、然れども淸淨を保てる獨身の生活は、更に一夫一婦の其よりも尊としと、豈に世に之れ以上の大膽なる斷案あらんや、世は一代の暗潮に乘じて、淫靡風をなせるの時、斷乎として、此大意見を發表す、吾人は寧ろ如何なる時代に於ても、如斯きより、より大膽なる意見を發見すること能はざりき、畢竟するに是れ最も熱誠なる宗敎的確信より源泉を湧出するに異ならずと雖ども、彼が此一代の斷定を下せし所以が、かの徒爾なる波羅門一派の禁慾主義と其歸趣を殊にし、更に高尙なる理想より迸生し來りしを識別するは、之れ斯論に於て最も重要なる事に屬せずんば非ず、要するに印度に於ける波羅門一派の禁慾は常に未來世にありての安逸を求むる我慾の妄信より來りしものなるも、彼に於ける禁慾の目的は蓋し獸性を離脫して更らに崇高なる人生を認識するによりて來りしものなり、請ふ如何にして彼は如斯に推論し來れるかを觀察せん、

彼は劈頭第一に於て、世人の通有ある肉慾的交際の見解を喝破して曰く、世人は虛僞なる科學の暈に據りて、肉慾が人生に於ける生理的必然の要求にして、之れを滿足せしむるは、あながち罪惡なりと云ふべからずとなし、之れを健康發育衛生の

諸點より立論し來る、然れども、予は之れを目して正當なる觀念となすことを得ず、何となれば之れ精神肉體の局部的要求に適さずして却つて之れが爲めに他部の精神肉體の荒廢を來たすこと尠からず、一言以て蔽へば、之れ一局部の爲めに、他の生血を吸取併呑し盡すものなればなりと、然り是れ又僅かに一の眞理を示せる教訓ならざるべからず、何となれば高イの轉化は、常に進化の法則によりて進まさるべからざると同時に、進化は或る一面の發達と、又反對側に於ける他面の退却を意味する者也、而して彼トルストイ翁が、常に崇高幽遠の理想に生き、清淨潔白の進化に向て之れを實現せんとするには、少なくとも如斯は必然に到達すべき論鋒にして、又決して、空理なる僻見なりと云ふべからざればなり、

如斯にして彼は冒頭の喝破を收め、更に彼が排結婚說の前提として、近世の思潮を動搖する、かの一切の淫風亂行を攻擊せり、世に殆んど普通として見爲さるゝ交際社會（勿論西洋の）の私通不義及び無節慾無道なるあらゆる階級の姦淫邪行は之れ到底人類の最高理想に昇進すべき經路に非らずして却て禽獸に近つくべき第一歩なるを論じ、更に色を勵まして曰く、人類社會の繁殖と、及び人類社會の永續は、彼等兩性交際の大目的には非らず彼等は快樂を求めんが爲めに相接し、彼等は相接せんが爲めに、あらゆる口實を求む、故に生兒は彼等の意とする所にあらず、爲めに彼等は厭ふべき罪惡をも犯し、或は避妊をさへ敢て普通なりと認むるに至るものあるに至りき、之れを以てか、生兒は彼等にありて無意味に化了しせられ、育兒法は何等の高尚なる意味を以て人類の發達を計るものにも非らずなりぬ、是れ最大なる罪惡と云ふ

べくして、何處に眞正なる愛の成立を認むべき、かの小說的詩人的觀念より、戀愛を以て人生至高の美的發顯となし、好んで戀愛すべき對手を漁し行く者の如きさへ、却つて是れ沒美沒理想の甚しきものに非ずやと、是れ彼が大聲叱呼する所にして、更に之れを要言して曰く、所謂世の小說的美觀は、神的人性を發揮する理想の前に、何等一片の關係を有するものに非ずして、其思想は詩及び小說に實現せらるべきものと雖ども、或は却て、些少の價値のコンマ以下にあるべき者すらあり、況んや常に誘惑の覆面とあり易き、かの快樂と稱するものに於てをやと、嗚呼之れ時弊の心髓を貫きし、一大銳鋒利刄に非ずして何ぞ、世の青年子女をして、墮落の第一步に近かしむるは實にかの淫猥なる戀愛小說なり、野卑淫奔、赤裸々の醜狀痴態を描きて、自ら人世の神秘を開鑰せしとなすかの似而非戀愛小說家なり、滔々として千里の勢をなす現代の潮流は、源泉に此一大汚濁を橫へ、子女の好奇心を誘ひ、青年の熱中的精力を導き、遂に出づべからざるの迷宮に伴ふもの、嗚呼是れ實にト翁の所謂小說的戀愛也、而して彼が、嚴肅なる鞭撻は、直ちに之れを以て滿足せず、更に一步を彼等の壘壁中に進めたり、此に於て彼は短刀直入戀愛其物の根底を疑ひて謂へらく、戀愛の根底には、性慾的要素を包含せざるか、又如斯一人の上に向ひたる愛即ち戀愛は、果して野獸性を脫却すべき博愛的人道に背かざるべきか、而して此所謂戀愛は、果して兄弟的愛の精神より以上のものなるべきか、若し之れ以下に降るべくは、之れ至高なる理想に遠かりたるもの、即ち理想に對して罪惡の一塊にあらざるべきかと、彼はしかく想ひて沈思せり、而して其瞑想の結果、彼は斷

として基督教の理想に背ける一大罪惡なりと斷せり、故に自由戀愛及び自由結婚は推理の結果として大なる罪惡の一に數へられ同時に總ての結婚は不純潔なる不平等なる愛を誘起し人生の至高理想に達する一の障害と見做され、又た罪惡の一部たるべきものとなされたり、而して彼の所謂「一夫一婦は一夫多妻或一妻多夫に優り清淨獨身の生涯は一夫一婦の其よりも優れり」なる結論は、實に斯の如くにして推論せられ來りたるものなりき」然り而して、彼は實に一歩を進めて曰く、人生の至高理想は基督の理想なり、基督の理想は高尚幽遠にして、之れに多少を接近するを得るも、幾許か之れに近きしは察知すべからず、何となれば理想の絶對は神にして、吾人



は有限にして絶對者たらざればなり、故に吾人は常に其歩武を進めて理想の面前に有價値の者とならざるべからざるも、吾人は常に其徑路を顧みずして、絶えず崇高なる向上の精神を振はずんばあらず、之れやがて人生の價値の存する所にして、亦壯大壯儼の理想ある所以なり、今や一夫多妻が罪惡と認められ、一夫一婦が眞理なりとせられたる時代は過ぎ去れり、吾人は更らに進化して、深遠なる清淨獨身の生活と、宏大なる兄弟的博愛の精神に住すべきの時を迎へ、以て天上の平和郷を地上に降下すべし、如斯獨身の生活は、或は人類の剿絶なりと云ひ得るも、之れ科學が太陽の冷却すべき日を數へて、生物凍死の斷案を下

すと同一にして、吾人が恐怖すべき事實にはあらざるなり、只だ人生の理想は尊くして、神的人格を發揮すべき事こそ、之れ吾人が精意猛進すべきものに非ずや、人生の目的は人類の繁殖と人類の永續に非ず、彼等は何れの時にか消滅すべきもの者なり、故に吾人は好んで清淨獨身の生活に進むべしと、嗚呼是れ議論の大要にして、かのマルサスが人口論を唱へて、人類の剿絶を唱道せし如く、最も明白なる最も大膽なるものと云はざるを得ざると同時に、彼は之れに對する有力なる駁論あるを豫期せざるべからざるなり、（未完）

婦人と訪問（第二百五十九號のつゞき）

土肥羊次郎

●其二十一●●●●　知り合の婦人にして出產したる者ある時は、成るべく八日目、若しくは一ヶ月內に訪問すべし。

註に曰く　產婦は一週間を經過すれば、人に面會すること妨なしとす。

●其三十二●●●●　產婦を訪問するときは、決して長座すべからず。

註に曰く　長座すれば、啻に產婦を疲勞せしむるのみならず、由なき談話の爲めに、偶々喜憂の情を激動せしむる恐れあれば也。

●其二十三●●●●　產婦を訪問せし際は、力めて赤子を稱揚し生母の心を滿足せしむべし。

●其二十四●●●●　訪問の際には犬猫は勿論、子供の如きと雖も、成るべく伴ひ行かざるを法とす、

●其二十五●●●●　訪問して食事時限まで悠々閑談すべからず、サッサと其の前に用談を終えて、暇を乞ひ去るべし。

●其二十六●●● 訪問の際は、濫りに目角をキヨロつかせて主人の室内を見廻すべからず。

●其二十七●●● 訪問の際は、座に入りて人の前に座を占め背を向くべからず。

●其二十八●●● 訪問の際は主人の勸めるにあらざれば其の席に在る樂器を弄し、或は讀物を見るべからず。

●其二十七●●● 自分の時計を出して主人のソレと對照しつゝ時刻をはかる樣を爲すべからず。

●其二十九●●● 主人宅の室内裝飾品、若しくは、什器に手を觸るべからず。

●其三十●●● 勸を待たずして、病人若しくは、若夫婦の室に入るべからず。

●其三十一●●● 談話の盡るに拘らず、躊躇して長座するは訪問者の大禁なり。

●其三十二●●● 主人方なる婦人の外出せんとするに際し、遠慮せずして、座に就き停ることあるべからず。

●其三十三●●● 主人席に入つては勝手に窓戸を開閉し或は裝置の整頓を亂すべからず。

●其三十四●●● 戸を叩き案内を乞ひ勸ありたる後にあらざれば、決してツカ〳〵と主人宅に上り込むべからず。

●其三十五●●● 一旦去らんとて座を立ち、再び譯もなく、復席躊躇すべからず。

●其三十六●●● 主人の來るを待つ間に、其の室内に立つたり居たりし、或は匾額などを見廻りつゝ逍遙すべからず。

●其三十七●●● 目出度き席、或は平和にして格別の意味なき訪問には、總て算盤づく、換言すれば凡そ事の權衡比較に係る談話を試むべからず。

●其三十八●●● 訪問せし主人宅取込みの樣子ある

時は、氣を利かして一時之を避け、一日或は二日の後に延引する事

●其三十九　不運にして落魄したる人を訪問するには必ず華奢の風采態度を避け、衣服は勿論總ての裝飾を質素にし、苟且にも富裕がましき趣を現すべからず。

●其四十　口ギタナく己の近所合壁を誹訐しソレからソレと話を持ち廻すべからず。

●其四十一　女子にして單身男子を訪問するは病氣見舞、或は職務上の用向あるときに限るべし。

●其四十二　接待の良否を量らず、濫りに主人と交際なき己の朋友を伴ひて訪問するは、主人の迷惑なるのみならず、伴はれたる朋友も頗る迷惑を感ずる譯なれば、謹んで之を犯さゞるを要す。

●其四十三　大抵先方の都合を計り、迷惑なかるべきや否やを篤と考察し、然る後始めて訪問すべし。

●其四十四　人を訪問せんとする時は成るべくダシヌケを避け、豫め端書或は傳言にて其の旨先方へ通知し置くを可しとす。

●其四十五　遠方の知己より、招待を受けたる時は、其の發着時日や大約の滯在日子豫定等返書旁々報知し置くべし。

（未完）



小說



花賣娘

八木原骸華

（下）

昔の夢には似もやらぬが、メレはその天質の美と愛くるしい風姿とに助けられて、蝶よ花よと彼の拾ひ上げられた婦人ジエネから愛せられて、二年三年をまた夢の間に育つて了つたのである。

或日のこと、ジエネはメレを膝元に寄せて。

『メレや、お前も最早大分大きくなつたで、何時までも怠けて遊んで斗り居てはなりません、少しは働くと云ふことをしなければなりません。』

と、ジエネは常になく嚴格に云ひ聞かせたのである、メレは驚いて、鈴の樣な眼を張つて、暫時ジエネの顏を瞶めて居たが。

『叔母さん』。

恰も責め詰るかの樣に呼びかけた。

『ホ、、、、、何ですねエ此兒は、其麼顏をしてさ、不思議な事でも聞いたやうに』

『でも、叔母さん。』

『まだ那麼顏をして居るよ、この子は、何がでもだエ、エメレ。』

『でも叔母さん、私の阿母樣は申しましたよ、働くといふことは貧乏人のすることだつて、私は貧乏人じやアありませんねエ、ねエ叔母さん』

ジエネは磕と答へに窮したのである、が、やがて。

『メレさん、成程、お前も昔は貴族家に育つたらうが、阿母樣が亡くなられて今では、私の家で

養はれて居るものを………、あの私の家はね、お前は知るまいが、お前の家の様にお金が澤山ありやアしませんよ、お金がなければお前働かないでは詮方がないじやアないか、よくまア考へて見てお呉れよ、メレさん。』

メレは暫時首を低れて考へて、居たが、悟つた所でもあつたのか、笑み崩れて、問ひかけた。

『叔母さん、働くッて、甚麼ことをするの。』

『そりやアお前、さう六ケ敷いことではないんだよ、私の籠ね、そらお前の好物な、あの好物な花籠へ花を入れてね、それを町へ持ち出して、通る人に買つて頂戴、買つて頂戴ッて、それはお前、お前のその愛嬌にめんじても、買はない人はありやアしないよ、それにねメレさん、町へ出て多くの人に見られたり、見たりする中にはお前の戀しがつて居る、カードさんに遭へる事がないともいはれないじやアないか、ねえメレさん。』

死人に魂の入つた様に、メレは急に別人になつて勇み立つた、雀躍して喜んだのである。

『叔母さん、行かして頂戴、今から直ぐ、買つて來ませう、さア叔母さん、お早く花を入れて頂戴、後生だから、叔母さん、お願ひだからよー叔母さん。』

勇むメレに引替へて、勇まれたジエ子は、頬に涙を傳はらして、聲を曇らせながら。

『メレさん、尤だよ、お前がさう急き立てるのも、したがメレさん、最早今日は晩いから、明日の朝から始めることにするがよからう。』

ジエ子の涙を讀んだメレは、もうせがまなかつたのである、やがて日は暮れ、夜は明けた。

初陣の若武者その儘のメレは、花籠を提げて、町

へ出た其日から、薔薇娘と異名を附けられて、賣れる賣れる、籠を提げ出した日から、丁度一月目に、到頭自分で賣花店を出すことになつた。町人が待ちに待つた八月の十五日は來た、この日は、羅馬敎會の祭日で、聖母メレが昇天日なのであるメレの花店は常に倍して朝から忙しい。

「花を下さいな、その薔薇の花を」

と云ひ乍ら店へ入つて來たのは、八歲斗りの愛らしい男の兒であつた、メレは如才なく。

『はい、どれがよろしいのですか、あゝこれですか、この色ならば貴下の阿母樣によくお似合で御座いませう。』

メレは怪訝な顏をした、折角喜ばせやうとした男の兒は、メレの言葉と共に淚ぐんだからである。

『あれ、貴下如何かなすつて。』

『僕の阿母樣は、在りやあしない』

一句、一句の彼の時此の時、一人の氣高い紳士は

『林檎を下さい、その一番好いのを』

と、店に入つて來たが、メレは氣が注かなかつた、紳士は一男一女の樣子に眼を注けた。

『あれ、阿母樣はお在なさらないの、さう、惡いことを申しました、では貴下は、何誰の爲に花をお買ひなさるのですか、エ坊樣』

『誰つて、僕、姉さんの爲に買ふのさ』

『それはまあ結構……』

男の兒は、急にメレを遮つて。

『その姉さんも、久しい後に別れた切り……、』

『何ですつて、姉さんもお在なさらない……、どうしてこの花を姉さんにあげますか』

『聖母メレを、姉さんと思つて繪像の前へ供へます、僕はね、五歲の時恐しい目に遭つて、阿母樣は殺され、父樣は行衛知れず、姉さんも見え

國光社發行圖書割引券

書目	部數	代價	郵稅

合計金

摘要

切取線

御注文に關する注意

◎割引券を以て御注文の分（教科書を除く）に限り定價の**一割引**を以て御送本可仕候

◎地方よりの御注文は總て前金御送附にあらざれば送本不仕候

◎市內の御申込は現品引換に代金御支拂相成候とも苦しからず候

◎郵券代用を以て御送金下され候節は必ず一割增御送附相成度候

◎御注文の御書信は書名編次冊數及び住所姓名等文字明瞭に御記載相成度候

◎金壹圓以上の御注文に對しては領收證を差出し候得共金壹圓以下は送本を以て辨用可致候

◎注文品々切の際は品替を請求し返金は一切謝絕仕候

◎御照會は返金用郵券添付又は往復端書に相願度候未納税不足税の信書は一切請取不申候

◎代金は總て東京京橋區築地二丁目株式會社國光社會計課宛御送付被下度候

御注文主住所氏名

東京市京橋區築地二丁目

株式會社 國光社

電話 新橋特八八番
新橋二六九三番

切取線



大日本圖按協會編輯
圖按
第七號八月廿五日發行
毎月一回廿五日發行
定價 一册 金拾五錢
六 册前金八拾五錢
十二册前金壹圓六拾錢
郵税 一册ニ付金壹錢
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 合資會社 國光社
電話新橋 特八八番 二六九三番

なくなつたの、』

メレは暫時無言で、涙でこの話を迎へて居た。が、急に思ひ中つたといふ面地で。

『貴下のお名前は。』

と、輕く問ひかけて、少年の顏を覗き込んだ。

『カードドナルト。』

無邪氣、無雜作の一言は、メレの胸に犇と徹へて彼は後方にダジダジとよろけて、僅に踏み耐へて少年の身體に抱きついて。

『私、私、私が其お前の姉のメレです、カードさんお前は私の…………。』

耳に接吻して、急に言葉も出なかつた。

何時の間にやら、店の中の椅子にかゝつて居た以前の紳士は。

『よい兒達だ、お前方の名は何と云ひます。』

後から急に問はれた二人は、驚いて飛び退いた。

『何も恐いことはありません。』

カードは口を開いたのである。

『僕の名は、カードドナルト、これは僕の姉さんでメレ』。

紳士は滿面笑み崩れて、口の中で二人の名を繰り返して居たが、やがて一男一女を左右に抱きわげて、右を見、左を見て、いとも靜に。

『乃公が子爵ドナルドであります、御前方の父であります。』

姉弟は父に抱きついて、夢かと斗り喜んだ。

優曇華の花を、賣花店に得た、親子三人は、徐に感謝の祈禱をして、神の攝理の不思議なことを讚美したのである。

駒鳥物語（つゞき）

しのゝめ

辨太郎が段々大きくなるにつれて此の不思議な評判は愈々遠くまで聞えて、千里二千里もある樣な外國からでも態々辨太郎を見に來る樣になつて毎日毎晩うるさい程のお客樣だ、何しろ汚ない衣服は天鵞絨や絹織のものになつて、空つぽの巾着も一寸觸ると金が一杯溢れる樣になり、破れた家も直に立派な御殿となるよーな譯なので、仕舞には外國と戰つて無茶苦茶に敗けた王樣、何にも出來ない怠け者、足腰も立たない病人達までがやつて來るよーになつた。

辨太郎はもー昔の辨太郎ぢや無い。北國の王樣よりも立派な御殿の中に住んで、衣服は眞珠か何かを鏤めた金色のぴか〳〵するのを着、毎日絹蒲團の上ばかりを歩いて、御膳の時は金剛石で作つた茶椀で食べると云ふ樣な次第。見る者聞く者も唯唯呆れて此の世の中にも斯んな立派なものが有るかしらんと疑ぐる斗りであつた。

斯ふ云ふ風にして段々年月もたつうちに、辨太郎や、爺さんや、娘までが何と云ふわけでもなく贅澤な暮をするのが最早そろ〳〵倦きて厭になる樣になつた、年にすれば極く僅かの間ではあるが、三人はもー人間のする有と有ゆる贅澤を仕盡して、樂みと云ふ樂みも、立派といふ立派も、もー通り越して了つて、何も彼もつまらない樣になつて來た。そこで三人の樂みは何時からともなく金を貯めるよりは、いつそどーしたら金を使へるか、どーしたら心持よー金を減らすことが出來るかと云ふことに苦勞して來た。

同時に御客樣もうるさくつてならない樣になつたそれはつまり此の家へ來る者は皆んな慾張りな奴等ばかで何も仕ないで一寸辨太郞に金や着物を作つてもらをーと夫ばかりで來るのだと悟つたからであるそこで辨太郞も色々に考へて、とー／＼家の門を二重にして、打つても叩いても開へ無い樣にして了つた。

けれども此の世の中に太陽の光が盡きない如く、金を欲しがる人間も無くあるものではない。辨太郞が工夫してよー／＼造つた門も僅か三日と、經たない裡に人々は最早門を毀して、續々家の中へ入り込んで、又前の樣に辨太郞の膝の下に頻りと低頭をしては其の玉のよーな手で一寸撫でゝ吳れと賴む。

家の中は又前に倍した沸返るよーな大さわぎ、朝も晩も晝も夜中も、幾千人といふ人は海嘯の如くに押寄せて、なぐる、ける、をこる、泣く、其のやかましさと言つたら何うして眠る所のさわぎぢやない。逃げ出そーと思つても最早人の壁は幾重にも周圍をかこんで、蟻の穴ほどのすき間も無い。爺さんは、いくら頑丈だといつても老る齡だし其娘といつても女の事だから、幾千人の人に壓れ揉れて、二人とも呼吸がつまつて倒れた上へ人が將棊倒しに重なつたので、遂に二人とも下じきになつて死んで了つた。

辨太郞は此でよー／＼爺さんが口癖のよーに言つた駒鳥の事をふいと考へ出した。あア是が復讐であつたのかと思ひ當ると一層自分の祖父や母が死ぬのを目前に見た事から恐しさがしみじみとこみ上げて來る、何といふ嚴しい罰であらう。此の世の中に是程大きな報ひが又とあろーか、金を欲し

かゝる人間の心あア、是程恐ろしいものが他にあろーか、祖父の話しに、金を煙の樣に消して了ふ人に出つ喰せば、自分の手は普通にあると聞いたが其の人、自分を助けて呉れる其の恩人は果して何所の國に居るのであろー?

四、

どーしてあの圍をぬけて出よーか、辨太郎は自分の母や祖父が死んだ明る日の夕方、家から左ほど遠からぬ寥しい村を一人ぼつ〳〵歩いて行くのである、人に見付けられるのを恐れてか、深く顔を外套の襟に埋めて成べく手が他の物に觸れない樣うつ向いて兩手を握り乍ら、まだ何か考へ込んでゐる。何しろ十幾日と云ふ間一滴の水さへも飲まないので、腹は餓き切つて一歩々々あるく度に氣ばかりはづんで、だら〳〵冷汗が出る樣な仕末、漸々の事で小さな家を見付出し何でも宜い食はせてもらをーと、悦しまぎれに遂ひ扉を二つ程敲けさまに叩くとサア大變だ、汚ない破れ家は急に立派な宮殿になつて了つた。辨太郎は蒼くなつて逃げ出し、今度はちーさな森を見付けて、木實なんかを食ひ乍ら其の晩は其所の草の上にぐつすり眠つて了つた。

晝間の疲勞にすつかり寢込んだ辨太郎は、昨日までは絹のふわ〳〵した柔かな蒲團の上に寢たのが今日はがさ〳〵した草の上なので、なんぼ疲勞れ切つてるとは言つても、少つとは寢心が惡いと見へて、色々夢中で悶きまわつてゐる。ところが其の悶く度毎に兩方の手が衣服や草や何かに觸わるので、其所いら中は金剛石や、薔薇、や錦やで閃々する斗りだけれど、辨太郎は少しも知らないで不相變ぐう〳〵眠つてゐる。

すると丁度この時此森に通りかゝつた二人連の泥

棒がある、何も知らずに鼻唄か何かを歌ひ乍らやつて來た。と一人は突然立ち止つて、

『こう否に良い香がするぢや無えか、待て〳〵。』

と直に提燈を灯けて見ると大變なさわぎだ。其所いら中花だらけ、ぴか〳〵する金や金剛石が石ころの樣に轉つてゐる、夫ばかりぢやないちーさな小兒が其の花の無茶苦茶に咲いてる眞ん中にごろりと横になつて他愛もなく眠つてゐる。

『何うしだんだらう？變だなア……兄哥、最早花が咲くのかしら、あんまり早え樣ぢやねえか。』

『そうよなア、少うし早過ぎる樣だなア……何うだい此の金は？』

『必と神さまの子なんだね、見ねえ彼の頬ぺたが福々としてよ。何うだい奇麗な衣服ぢやねえか。なア兄哥。』

『ウム、………そうかも知れねえな、………まア好いや落つこつてる物だけ拾つてこうぢねえか。えゝをい袋を出しねえ、袋を。』

『をう來た、奇麗だなア、兄哥衣服にも着いてるぜ。』

二人は顔を見合せてにつこり笑ひ乍ら、片つ方の奴が頻りと袋へ拾ひ込むと片つ方では一生懸命になつて小刀でちよきちよき衣服に着いてる飾りを取る、と時々又辨太郎は昨日の夢でも見て居るのか、うん〳〵うなり乍ら寢返りを打つ。

『えッ吃驚した、兄哥もう往こうぢやねえか、神樣だよ。小さくつても強いんだよ、ええをい嫌か、嫌なら俺先きへ行くぜ、眼でも御覺しになつて見ろ、ひどい目に遇うぞ。』

『ウム往こう、もう澤山だ、………待て〳〵是だけ受つてこうぢや無えか、え、て前え内方のを取れな、俺ア此所を取らア、行掛の駄賃だアな』

二人は密と辨太郎のそばへ拔足で寄つて、今兩方の腕環を取らうとしはじめた。所が不思議！密と二人で兩手を持つたか持たないのに、二人の姿は急に立派な紳士に變つて了つた、見合して二度びつくり、二人はもう眞蒼になつてわな〳〵慄へ出した。

『詐だ〳〵兄哥何仕よー？』

『御免なさい神樣、もー仕ませんから。』

『何うぞ、……神さま』

泣聲を出して辨太郎に低頭つて二人は亦一所に顏を上げて見合せるか早いか、袋も何も放りつばなしで一生懸命に逃げ出して了つた。が辨太郎は此んな事は少しも知らない、

五、

翌朝になつて眼を覺して見ると少し驚いた。昨日迄青々とした原だと思つた所は色々な奇麗な花が一面に咲いて、其所いら中には金貨や寶石が泥だらけになつて、ごろ〳〵轉がつてゐる。のみならず自分の衣服までも全で變つてゐる。何うしたのだろー？と暫くは茫然考へてゐたが、漸つとの事自分の手に思ひ付いて又眞蒼になつて了つた。と見ると自分の傍に大きな袋が捨てゝある。ウム是りや何んでも誰かが來て俺を見付けたに違いない。そーだ〳〵と膝を打つが早いか、其まま無茶苦茶に逃げ出した。

左樣一里ばかりも驅け出したと思ふ頃、腹の飢じさに覺えず立止つて見ると直ぐ途の傍に低い袖垣を結つた小さな家が一軒ある。小じんまりとした如何にも美しい家で、殊に屋根一面に咲き亂れてゐる色々の花が朝日に照り映つて、其のまばゆい事、辨太郎は又此に賴んで見ようと近よると、折ふし流れる樣な琴の音につれて心も何も蕩ける斗

りの唱歌の聲がきこえる。辨太郎は愈々悦しくなつて、此家なら必と休まして呉れるに違ひないと、今度は能く氣をつけて昨夜のよーな事のない樣。門の扉を靴の先でトン〳〵と三ツ斗り叩いて直ぐ開いたのを幸ひ、默つて庭の方へ這入りこんだ。

『お頼申します……お頼申します。』

『ハイ……』

見ると十六七の美しい娘がしとやかに椽側に顯れた、辨太郎は少しどぎまぎし乍ら、成べく手が他の物に觸れない樣、緊つかりと胸に疊んで。

『甚だ申兼ねますが、……實は昨日から一杯の水も飮まず、餓くて堪らないので、何卒何なりとお情にわづかり度いのですが……』

『ハイ、もー此んな汚ない家で、居る者と申せば私獨り、別になにも御座いませんが、何かお上り下さい。不味いものでもさし上ましよー』

『それでは暫く御免被ります』

敷石の上へ靴をぬいで、其儘上り込んだ。

『何かこちらへ、大變に取り亂しまして……』

見ると座敷は狹い六疊斗りの室であるが、其の奇麗な事。娘は靜かに琴を片づけて、奥に行つた。やがて又娘の姿が辨太郎の前に顯れたかと思ふと今度は色々の御馳走がづらりと列んだ。

けれど悲しい事には辨太郎は一品でも口へ運ぶ事が出來ない。喉からは手の出る程食ひたいのであるが、手を使へば直に見付かると云ふ恐れがあるので、暫く浦山敷そーに凝と見つめて居たが、遂遂思ひ切つて。

『重ね〳〵我儘な事ばかり申しますよーですが、私は非常に空腹で、之を戴きたいのは山々なんですが、私の手は何んにも持つことが出來ないのでありますが、御親切に甘へる樣で御座りますが、

何卒助けると思召して、私に食べさして戴く譯には參りますまいか、何も恐れ入りますが。……」

「それは〳〵嘸々御不自由な事でございましよう。宜うございますとも……」

娘は丁度赤ん坊にでも食べさせる樣な具合に、箸をとつて食べたいと云ふものを食させ、仕舞には葡萄酒までも飲せてやつた。辨太郎は生き復たやうな心持で、昨日からの疲勞や何やらで、他人の家も何もかも皆んな忘れて、そこに轉がると直ぐぐつすり寢込んで了つた。娘は辨太郎の眠つたのを見て、又琴を出して頻りに何か唄ひだした。

――この女はつひ昨年頃から此に引移して來た詩人で、名前は志賀里子といふ今年十六になる娘だ――

漸々夕方になつて辨太郎は眼をさました。その時の心地好さ。生れてから此んな悦しい事には出遇つた事がないと獨語した位だ。元來里子といふのは親もなく兄弟もなく一人ぼつちで、琴を彈くのと詩を作るのとが何よりの樂な所から、少しばかりの金を賴りに、此の小さな家に住んでいるので、自分のその樂の外には欲しいものも、面白いものも何にも無いと云ふ人だ。

で里子は初め辨太郎が來た時から、何うして斯んな立派な人が來たのだろー、何の用事があつて來たのだか、考へれば考へる程怪しくて仕方がないと獨語して居た。けれど態々尋ねる程のことでもないので、唯好い友達が出來た位に思つて居た。二日三日と經つ内に二人は愈々睦じくなつた。けれど未だ辨太郎は自分の身の上に就ては何にも言はない。里子も亦強いて聞こーとも思はないので、二人はたゞもー此世に親も親戚もない同じ哀れな身の上と云ふ斗りで、其の仲好さと言つたら

眞實の兄弟でも斯までは思はれる位であつた。

ある日のことであつた。辨太郎は里子と一所に裏の花園を遊び廻つて、彼方此方にぶらついてゐたが、ふと見ると自分の傍に何だか知らぬが大變に奇麗な花が咲いてゐる。赤いのや青いのや、又黄いのや、それは〳〵大きな花が澤山に咲き亂れてゐるので、里子が一枝を摘んで自分の髮に差したのを見て。つひ忘れて辨太郎も一枝を取らうとすると、不思議！不思議！辨太郎が慥かに花だと思つた一枝は大きな桃の枝であつた。はッとをどろいて手を引く途端に一羽の雀のひよッくり突當つて、これは又急に大きな鵝鳥になつて了つた。

里子はこの有樣を見て唯驚くばかり、茫然とそこに立つてゐる。辨太郎も斯なつてはもう秘し切れないので、遂々自分の身の上を話して了つた。

ところが其の翌る日は丁度里子が何所かそこらへ遊に行くと言つてゐた日なので。辨太郎は朝早くから起きて色々の事を仕末して、里子には此の上もない立派な着物を着せ、靴も何も出來丈の奇麗なものにして、おまけに大した金貨まで持たせてやッた。そして辨太郎は此の日から四五日一人で好く留守居をすると約束までした。

里子は勢よく出たかと思ふと間もなく、衣服も何も汚ないびろ〳〵なのを着て平氣で歸つて來た、聞けば里子は家を出ると直ぐ盜賊に出喰して、餘り可哀そーなので、金貨も衣服もなにもかも皆んな呉れて了つた、こんな悦しかつた日は又と無いと言つてゐる。

翌る日も又行くと云ふのでちやんと昨日のよーにして遣つた。ところが今度は腰の曲つた婆さんに呉れたと言ふ。其の翌日も又その次も……

斯いふ風にして左樣十日もたつたかと思ふ頃の早

朝、里子は又行くと言ふので、辨太郎は例の通り色々の事をして遣つて、サア出掛けようと一足家の玄關から踏み出した時、何を思ひ付たか急に振り返つた。途端に送りだして來た辨太郎の手は里子の手と一寸觸れたか觸れないかと思はれる位柔かにさわつたのに、何したのだろう、辨太郎の身體が急にしびれて來てぶる〳〵と震へだした。と思ふ拍子に辨太郎は又急に自分の手の事、爺の言つた事に思ひついた。でも未だ不安心なので密と里子の衣服に觸つて見たが何もならない。愈々普通の手になつたと色々掴んで見るが皆んな其儘、何もならず、色さへも變つたものはない。

二人とも余り不思議なので只茫然と見合つて居ると、丁度その時庭の小さな木の枝に一羽の駒鳥がとまツて、頻りに此方を向いては「チッチッ」と囀つてゐる。

すると突然二人の前に小さな人が一人現れた。奇麗な黒天鵞絨の帽子に灰色の洋服を着て、鼻の高い、眼の光つた、腮鬚は扇のよーに胸に廣がつて丁度駒鳥のやうな。

『コラ辨太郎お前は知るまいが。俺はお前の祖父をさんざん今日まで困らした駒鳥だよ。命名式の晩言つた通り、お前は今金を煙のよーに消して了ふ里子と一所になつたから最早普通の手になつて了つたのだ。これから前は夫婦になろーが何しよーが俺は關はない。が辨太郎能く考へて見ろ、いくら樂だと言つても、欲い金でも餘り多くなれば自分の爲めには反つて害となるものだ。お前もこれまでゞ隨分思ひ知つたらうが、この後とも能くいましめて祖父のよーにあるなよ、いゝか、必と忘れるんぢやないぞ。』

言つたかと思ふと、もー何の影もない。（をはり）



駒迎　東久世通禧

逢坂のせきのすきむらもるつきに
たつかみしろしかひのくろ駒

遠樹紅　鍋島直大

わか庭はまたかはらねと遠やまは
霜やおくらむもみちしにけり

山家菊　長谷信成

秋のかはやゝうすらきしやま里に
にほひそめたりしらきくの花

衛生會　宮地巖夫

世のひとのいのちを野へに市まちに
こゝろをつくすつとひなり鳧

岸頭萩　阪正臣

ちるまゝに波の皺にそおほれける
岸のひたひのあきはきの花

憐寸　荻原巖雄

腰かけしとなりの人におくりけり
すりしつけ木の燃る火たねを

虫聲　芝葛鎭

遠くなり近くきこえておもしろし
かせふきすさふ庭のむしの音

窓朝顔　大口鯛二

秋さむきいほりの窓にはひかゝり
ひるまてさけり朝かほのはな

深夜虫　加藤義清

呉たけのよふかきまとになく虫の
こゑはねさめの友とこそなれ

文林

秋園　　蜂須賀隨子

百くさの花はあせゆくあきのいろを
そのゝこずゑに染かへてみむ

山家鳥　　近衛貞子

狩人のたえずとひくるやまさとの
とりはいつこに隠れはてけむ

騎兵　　小池道子

のる駒のわおとたかくも響くなり
皇いくさ人やみちならすらむ

松平樂翁　　南鄕柳子

いさぎよきこゝろの奥のしら川の
流れのすゑをくみてこそしれ

林蔦　　松平健子

もずの鳴かたやまかけの栗はやし
懸れるくずのはなさきにけり

暮山月　　佐藤艶子

暮はてゝおぼろにありし山きはを
ふたゝび見せていつる月かな

雁來　　田中瀧子

打かはすつばさの音もさえわたる
よさむのそらに雁はきにけり

夕女郎子　　小川直子

ゆふぎりになりはかくれて女郎花
まはあらぬ社ゆかしかりけれ

浦鶴鳴月　　中村禮子

秋もやゝわりあけの月のかけさゆる
うらの松はらたつのなくなり

鷄　　河村重子

逢さかの關も戸さゝぬ御代にあひて
とりもそら音を計らさるらむ

秋千草　下田春興

いつれをかとりてかさゝむとり／＼に
色なつかしき野邊の八千草

菅公　山岡良旗

捧けもの御衣の香こそしのはるれ
こゝろつくしの秋の夜の月

秋田家　下田春興

落穂をあさるすゝめすら
もゝよろこひをうたふなり
秋のみのりのあまる代は
とりもうられしとおもふらむ

秋山家

まかきにまねくしのすゝき
ほに出て母やまちまさむ
つまきにそへしさゝくりの
ゑみつゝかへるしつおとめ

秋旅

かしこの峰のしかのこゑ
こゝのすそ野のまはき原
秋の野やまのしなさため
つれ／＼ならぬたひ路かな

秋草

いふせかりつるなつくさも
秋のにしきとなりにけり
うつれはかはる代の中の
人のこゝろをいろに出て。



文林

野寺の墓

クレー原詩
橋村意譯

一

夕ぐれおくる鐘の聲
響くかたより黄昏れて
牧場の牛はわが小舍に
畑の農夫はわが家に
休まんとてや歸りゆき
地に殘りたる影はたゞ
暗とわれとの二人なり

二

森かげ木かげはのぐらく
沈みゆく目の夕まぐれ
ものゝ淋しき色ばかり
滿ち渡りたる空の雲
眠むげにひゞく鈴の音は
歸り遲れし小羊か
虫の羽風もかすなり

三

蔦かづらにうづもれて
古塔の屋根の梟の
月の光にさびれなく
聲よりほかに聲もなく
隱れ家近くねらひよる
敵とやわれを想ふらめ
夜のけしきは靜にて

四

かのことふりし松の陰
この苔青き杉の本
つもれる土はなにあらん

つらなる石は誰がしるし
岩の床ぞ枕なる
なかき夢路はさめやらず
村の祖先の靈はこゝ

五

花の香おくる朝の風
しは鳴く鶏の朝の聲
妻よびかけるつばくらめ
反響にかへる里の笛
さむき枕にねむる兒の
夢よびかへすすべもなく
呼べは應ふる風さむき

六

室温かき家もあれ
埋火深き宿もあれ
夕飯の煙わがために

立わぶるべき妻もなく
かへる人をし待顔に
笑みてはすがる父の膝
圍みし子らの影もなし

七

麥いくたびかその人の
鎌にかゝりて刈られけん
畑いくたびか其人の
鍬にすかれて榮えけん
牧場の牛も野の馬も
代る松杉も森の樹も
その人にこそまかせたれ

（未完）





歌の庭

十月五日兼題

菊盛久

天

熊本市東寺原町　田代綾子

千代こめし竹のまがきに咲きくの
　はなはさかりもひさしかりけり

評、趣向おもしろし

地

東京市神田南甲賀町四ケ地　牧　粂子

つくろはぬ籬なからに千代しめて
　うつろふへくも見えぬきくかな

評、つくろはぬまがきの菊なかなかに見所あり

人

東京麹町區元園町一ノ六　戸塚てつ子

色も香もたへたるのみか盛りさへ
　ひさしかりけりしらぎくのはな

評、とりたつるふしもなけれとよくとゝのひたり

甲之部

長崎　内藤美與子

しつくにもよはひのふてふ菊なれは
　はなのさかりそひさしかりける

大阪　桝田益子

さきいてゝ世をあか月とをかきつに
　ちよをしめたるしら菊のはな

東京　篠田圓子

かりそめにゆひしまかきに匂ひても
　さかりはひさししらきくのはな

肥後　田代靜子

露にさきしもにかほりてあはれ世の
　うきしらきくそさかりひさしき

露しもをかさねあからになゝへ八重
さかりひさしきしらきくのはな
大阪　伊勢村竹子

千世かけて植にし庭のきくの花
さきのさかりそ久しかりける
埼玉　横田香羽子

ひさに匂ふ菊をし見れは移しうゑし
みさへ老せぬこゝちこそすれ
長崎　八尾いへ子

秋ふかくにほひぬるかな老まつの
木かけにさけるしらさくのはな
大阪　大阪谷新子

つゆしもをいくよかさねて色も香も
ふかくなりゆくしらきくのはな
三河　永井さい子

乙之部

仙人は友とやすらむおきなくさ
はなのさかりのはてしなければ
岐阜　吉村せい子

やれ垣にさけるしらきく日數へて
花の香さむく秋ふけにけり
茨城　内田さた子

さきしより日數へぬれとうつろはて
めかれぬはなはきくにそありける
肥後　坂本登子

床しくも千代しめかほにさき出てゝ
さかりひさしきませのしらきく
伊豫　栁たけ子

垂乳根の千代のかさしとなしてまし
さかりさひしきゝくのはなかさ
但馬　田尻保代

千代かけて盛ひさしきしらきくの
にほひもゆかしあきのはなその
神奈川　田邊房子

やちくさのさきかけなしゝ白きくの
あれにしにはになほにほふかな
安藝　和住千鶴子

あれはてしまかきに匂ふしらきくの
千代のかたりそいとゝゆかしき
埼玉　森谷もと子

置つゆのたまをかさしてよろつよの
あきをかはらすに匂ふしらきく
肥後　千知波楯子

花と言へは蛙へてあたなる世の中に
きくはさかりもひさしかりけり
廣島　衣罡澄子

日數へていやか上にもさくきくの
うつろふことはしらすやあらなん
肥後　坂井ぬい子

幾千代もかはらてに匂ふしらきくの
はなのさかりそひさしかりける
肥後　坂本美智子

咲きし日をわするゝまてにしら菊の
いろもかはらてひさしかりけり
駿河　佐野きやう子

おきまよふ霜にもあせすしらきくは
肥後　坂本きく子

秋の庭

さかりひさしくさきにほひぬる

なけゆかば袖に千とせもうつるらん　東京　片山あや子
色とり〱のきくのはなその

しめゆひしかきれの外に匂ふまで　東京　片山ふみ子
露にいろそふこしきくの花

またさしに千ともせにほへ八千草に　東京　内田きみ子
さきかわりたる野邊のしらきく

初霜の置てふたゝひにほふまで　東京　吾妻ちか子
うゑてひさしき庭のしらきく

しらつきのたまさへにほふ竹かきに　東京　三好珍子
さかりひさしきしらきくのはな

うすくこくまかきににほふきくの花　富山　長谷川初枝子
いくたひなりてかさしたりしか

もゝくさのはなは大方かつろへと　山口　田村多豆子
さかり久しきにはの白菊

仙人のあきのかさしときくのはな　山口　村上操子
うへもさかりのひさしかるらむ

九重のくもゐのにはに千代しめて　岐阜　佐藤蒼生子
さかりひさしきしらきくのはな

虫のねもかれにしにはに咲いてゝ　大阪　大阪谷信子
さかりひさしきなきなくさかな

こと草のかれにしにはにひさしくも　大阪　伊勢村花子
あきなしめたるしらきくのはな

我やどは千代の根さしのきく咲きて　埼玉　横田秋子
さかり久しくにほふあきかな

おく霜にまかひし庭のませ垣に　伊豫　竹村竹里子
また咲きにほふしら菊のはな

咲てより日かずへぬれといろも香も　大阪　中館やう子
かはらてにほふ黄きくしらきく

おほかたの花のとゝめにさきいてゝ　東京　北島操子
うつなふこともしらきくのはな

ませのうちに月日かされし菊のはな　肥後　佐々小琴子
なつかしき香にゝほひぬるかな

生したてしわか世のひぬるこゝちして　熊本　日高かず子
さかりひさしきにはのしらきく

うきあきのこゝろつくしもしら菊の　和歌山　池田松枝子
はなはちよもとさきにほふかな

村さめのつゆもおもけにはきすゝき　松江　常盤松子
なれふす野へに匂ふきくかな

もゝくさの花のとちめに咲きいてゝ　石狩　阪本榮子
御代なかつきにゝほふしらきく

おく露の霜となりてもうすろはぬ　東京　大木光子
きくやちとせのいろ香なるらむ

うつしうゑしそのかひありてわか庭の　東京　椎野鋭子
まかきのきくのさかりひさしき

おく霜にへたられてもしらきくの　東京　椎野清子
にほひはかりはうすれさりけり

あたにちるはなにならはて千代までと　東京　椎野蕭子
にほふもゆかしにはのしらきく

しもおきてあれし垣根にいまもなほ　東京　椎野秀子
ひとむらきくそあきなのこせる

霜にあひてなほ匂ふなりちよ八千よ　相洲　岡安常子
あきのあはれもしらきくのはな

丙之部

おく露ないくよかされて白菊の　札幌　山田嫁美子
　秋のかきりなさきにほふらむ

色もかもいまにかはらぬしらきくは　京都　坪内りき子
　あきなかつきにさけはなるらむ

いろも香もかはらさりけりはつ霜の　名古屋　瀬木せき子
　むすふまかきのしらきくのはな

もゝちくさかれてさひしきわか庭に　東京　椎野ぬき子
　ちとせなかけてにほふしらきく

やま人のよはひなこめてにほふらむ　東京　松村あさ子
　おいてふこともしらきくのはな

仙人やうつしうゑけむませかきに　栃木　青木たま子
　老せす匂ふしらきくの花

はきちりておくつゆしろきにはのもに　長門　杉　道子
　なかくもにほふ白菊のはな

白つゆなかさして今朝もうるはしき　肥後　佐々有鄰子
　にほひこほるゝきくのはなかな

おしなへて花のさかりはみしかきな　東京　北島功子
　菊はかり世に久しきはなし

しもかれしそのにもにほふ菊のはな　大阪　橋本しか子
　さかりひさしきいろもなつかし

我やとにうつしうゑにしゝらきくの　東京　高橋津音子
　ちよなちきりてはなさきにけり

世のちりもかゝらぬ園のしらきくは　大阪　伊勢村春子
　めくみのつゆに千代や經ぬらむ

やちくさのはなは散れともみそのふの　近江　夏目松枝子
　きくは今なほさかりなるらむ

うつろはてさきにさきそふ白きくの　肥後　佐藤直子
　はなのいろこそ千代もにほはめ

ひさかたの星にまかへるきくのはな　松山　上原のぶ子
　うつろふ秋もしらてさくらむ

いろも香もうつろふあきなしらきくの　長門　岩田章子
　しもにいろなはませに咲くなり

移しうゑやしなひたてゝ見る園の　東京　川村松子
　きくのさかりは萬代もへん

明星のひかりにまかふ露のたま　東京　川村きく子
　かさしてにほふ庭のしらきく

わかやとのにはのしらきく幾日へて　肥後　坂井みは子
　千代もかはらぬかににほふらむ

さきいてゝさかり久しきしらきくは　肥後　板本美代子
　千代もつきせぬはなのいろかな

しつかやのにはのしら菊さきいてゝ　肥後　坂本竹子
　五百代も千代も香にゝほふらむ

ゆふつゝのほしかあらぬか久かたの　肥後　德永雪枝子
　くもゐのにはのしらきくのはな

おく霜にちとせのいろもあせすして　肥後　德永しずゐ
　さかりひさしきしらきくのはな

さきいてゝ日なふるまゝに白きくの　肥後　志方圓子
　いろかもふかくにほひぬるかな

やちくさの花のなこりな見せかほに　東京　永井さき子
　さかりひさしき野邊のしらきく

久方のくも井のにはにひさしくも　伊勢　池田椿子
　さき匂ふらむしらきくの花

咲いてゝひさしきゝくのはなの上に　東京　山本梓子
　つゆも千たひ千おきかはるらむ

あれはてし庭にひともとしらきくの　かをりもなかくさきのこるかな　安藝　和住ちつ子

千五百秋のかほりてにほふきくなれは　花のさかりもひさしかりけり　伊豫　小田操子

花といふ花のなかにもめてたきは　み代なかつきにゝほふしらきく　伊豫　吉見貞子

日かすのみうつろひゆきて咲しより　いろ香かはらぬしらきくのはな　伊豫　梯京子

ゆく秋のかたみにさきしきくのはな　ふゆのいろ香もなほまさるらむ　埼玉　前野志賀子

おくしもの日數はあまたふりしかと　ちるてふことなしらきくのはな　埼玉　前野ふさ子

くさ〳〵のはなはうつれと庭のおもの　きくはいつまてさきにほふらん　愛媛　黒川亞子

くれてゆく秋のうらみのなきまてに　ひさしくにほふにはのきくかな　駿河　佐野みさ子

もゝしきの大内山のしらきくは　さかりひさしくかにゝほひつゝ　茨城　荒野たに子

かれ草ののこるかき根に千代しめて　ひとりときめくにはのしらきく　讃岐　藤田光惠子

久しくもさきそふきくのはなの上に　はつしもさへもおきわすれけむ　横須賀　上田雪子

あきふかみ人目もかれしにはのおもに　きくのみ[illegible]さきにほふなり　横須賀　岩橋化子

栗拾ひに誘ふ文

熊本市光琳寺町　日高かず子

天

つゞれさせてふ虫の音に驚かされて、つゝれさす身の葛おくれがちにて、夜寒の頃のみけしきさへ聞え承らぬおぼつかなさよ。さても去年よりちぎりまゐらせし某の山の栗、今年もいたく實りて、昨日今日は木のもとあやうきまで落つれば、里の子に魁けて來よとの使、今朝しもそこなる伯母の許より參り侍りぬ。いつしかとまちつけてうれしう、山路の秋の淋しさをよそにして、笑みこぼるゝささ栗の、袖にも手にもあまるばかりきそひて拾はなむたのしさ、今より思ひやらるゝに、垣根つゝきの野邊には秋草咲亂れ、山の紅葉も色こくなりぬとか、一夜わかさば掉鹿の聲も枕邊近く聞き、虫の音の品定めも心のまゝならんかし。そはとまれかくまれ、わすは幸學の舍も休日に侍れば、御

子達殘らず召連れさせ給ひてんや、喜久雄露子も袋縫ひつゝ明けなんを千秋の思にてさわぎ侍り。世はなれし山里にまゐらすべきわへのなければ、手つくりの芋ほりて待ち侍るとなむ。わりごは用なきことにこそ、朝まだき御館へものし侍らんに、あしわけはおはさずもがな、かならずとそゝのかしまつるになむ、かしこ。

評。秋の野分の景色に、田舍樂の趣をさへ添ひて、氣も心も浮き立たん許りに認めし筆の跡、最と巧みなり。

地

長門秋 奥玉江　岩田章子

門田の稲葉おとなへど、吾が宿の籬の菊、未だ蕾もふくよかならぬに、はや咲き出でたりとて、今朝、河上の里より送れる大輪小輪、とり交へて野菊の亂れ咲、よしや梅櫻桃李一時に開くとも、水無月秋立つ鄙ぞ願はしうなん。はや四方の山々も瀧田姫の情に燃え、わきて樂しき秋のあの山この丘に、さゝ栗、しば栗、色つきぬとや。そと面こそいが〳〵しけれ、内いかで針を含むべき。待ちし名月も程遠くもからねば、珍らしき鄙の山づとに、月前の御饌飾り給はずや。いで打ち立たせ給へ。來ん日曜の朝、殘りの月影、笠に戴いて上る筏の水馴竿に、阿武川なる浮寢の鳥驚かし申さむ。さしたる御障だにあらせられずば、諸共にとの仰承りたうよ。是非弟君も召しつれ給へや、光子も待ちあこがれはべれば。

こはその鄙の菊にこそ、君がみ机の上へと別ち進ずるになん。使の者へ、兎角の御返事賜はれかし。

あなかしこ。

評。かゝる優しき誘ひに逢ひて、誰が否とて辭まるべき。いざ諸共に栗拾ひて秋の野山をあさり暮さん。

人

神田區三崎町二ノ八　中村八重子

吹き來る風に、尾花の袖も、うちなびき。招かれ置ける、道芝の霜さへ、朝な〳〵、いやまさりぬるを、秋の哀を他なる都の御住居の、今日この頃は、如何におはすや。八重葎、しげれる宿は、淺茅生にすだく鹿の音より、ほかにとて物もなきわ

びしさに、去年君と共に、秋の夜長の文讀むまどに、千々の事ども語りつゝ、はてはいつしか文机枕に、うたゝねせしも幾夜なりけむと、そゞろ思出でられ、御なつかしさ、やるせなく、せめては一日君をこの山里へ向ひ奉らん、何がな興ある事もと、思案いたし居候折から、老爺の後の山に落居しとて、持ち參りしは、いともいかめしき、針の甲冑。柿色直衣にて身を堅めし、栗の木の落武者にて候ひき。さなり〳〵、これこそ、君を招き參らする屈強の料なれ。と急ぎ山へ登り見れば、賊とや土も見えぬまで陣堅う、張りし武士。敵御座んなれと云はん許りにて針の甲冑いからして控へしさま、恐ろしうて、手も出されぬほどに候。あわれ、私一人にては、負戰となり候はん。はや〳〵御加勢あれや。御出馬のあるまでは、合戰見合すべければ、かくはる〴〵との御出陣も「骨折損の草臥れ盆け」とな思し給ひそ。君の勳功に報も奉らんには、生捕りし武者は家產に參らすべし。また後の山に妻こふ掉鹿の聲をちこちに聞ゆる、砧の音など御歌袋重きまで、參らせん。露けき野路のいとはしなどゝのたまひて友の危きを見捨て給はゞ、つきぬ御恨ぞかし。かしこ。

評。さても其日打落し給ひたる甲武者の首は、其數凡そ何百級にて候ひしか。己れも首實驗の席に列りたき心地ぞする。

松江　常盤松子

秋風のいとあわたゞしう吹き立ちて、落葉の音もやう〳〵まさりゆくめるを。あし引の誂住居し給ふ君には、如何ばかりさう〴〵しうあかし暮したまふらん。妾も最早かりおとづれまつるべき師の君も失せ給ひたれば、いとゞわびしくいやましに、そなたの空のみしたひ侍り候。かにかくにかたらまほしきふしの積りゆくままに、いよ〳〵おどろかしまつらまほしうて、こと寄せつべき事もがなと存じ侍る折から、今朝しも、朝消しつる折、妹のかけ來て、對ひの伯母様にこれもらひぬほしからずやなど、二つ三つほのめかしたる栗の實に、且つはおどろき且つは田舍のうらやましうて、去年の事など思ひ浮べ侍りぬ。來ん年もと確くちかひ置き候へば、今年は後れなとらぬ様にと、こなたよりそゝのかしまつる。あだ名したる山かつの君にも傳へてよ、來る日曜にては、御都合は如何に、とく返り言洩し給へ。妹の思ひ出してか、早う〳〵とせき立つるまゝに、しばし播木かいやりて、かくはものしまつる。

大阪　桝田益子

神な月、時雨るゝ空のふりみ降らずみ、たゞよふ雲の定めなきさ

へあるに、とほつ人の雲の上がき、と絶ゐ侍るにもいと覺束なさの、さし添はり侍るを、いかにかおはすらん、けしうはあらせ給はぬにやと、うしろめだうなん。昨日も、北山なる姉のもとより、日ごろの時雨に梢どもの、紅ゐ深う染渡して、山やまは、そこはかとなく千機のとばり、張りたらんやう、めもあやに、麗はしうなり侍るを、殊に名たゝる栗なん、いとよく實の結びたるが、さそふ嵐のまにま、はら／＼とこぼれ落つるを、里のうなゐどもは、袖もとをゝに拾ひつゝ、猶唐衣の晝けからぬを恨み顔に、此上なき遊び草となしぬとぞ、爰にも幼き者の侍れば、とくゐておはせよかし、はた、秋子の君にもそゝのかしきこゐて、白妙の袖ふりはへさせてんやとの、かりそめならぬ鴈の信りを、きゝ侍るにつきても、まづなつかしき君のみもとにも、和子君たちおはせば、御心靜けからん折見給へては、諸共に立ちいでたゝせ給ひなんや。倩なん姉が本意にも、叶ひていと／＼悦ばしう侍る。つぶらなる物は、稚き者にまかせて、たゝずまひ笑しき、山水のあはれを見はるかし、地も照りかゞやく、梢のにしきを愛でゝ、下陸の落葉かきつめ、よし温むべきほたりなくとも、心の色をたゞかはして、立田姫に手向け侍らんには、いか斗りか、見るかひある遊びにこそと。いはけなき者どもより、中なかに、其邊りの偲ばしうてなん。躬て君にも、いとれもごろになじませ給はしゝ、いろせがりに侍れば、露御心おかせ給はで、入らせ給はましかば、いと／＼嬉しう侍るになん。岸分小舟の、障りあらぬまに、何日ときこゐんよりは、明日なんていけ宜しう侍らば、とく／＼ゐておはし給ひなんや。萬づのまうけは、かしこにてゝうじ侍れば、いかで／＼、御かぞいろの君に、みけし何がはせ給ひて、みゆるしゐさせ給はんには、やがて此薗に、みかへり告げさせ給へ、嬉しう侍ちきこゐ侍るぞ、かし。

長崎　八尾いへ子

外からは、てもふれがたきいかめしきを、うちよりやりて、秋の朝風におつるさまいとをかし。里の子らにおくれさせ給はぬ樣、友どちゐていざ玉へ。尾花さへほに出でゝまち顔なりと今朝なん乳母がりつげこしぬ。されば明日ともいはず、おもひおこし侍るを、魂合へる歌子の君もよろこびうべなひ玉ひぬ。いかでおぼしたゝせ玉はずや。朝夕文の林の奥深うたどらせ玉ひ。小かめの花のみめで玉はんより、まのあたり心をのべの千草の花をわけ見つつ、何事も人にかち栗、あるはさゝくり拾ひ玉ひ。一日打興じ暮しなば、日頃のうき霧もはれ侍らんかし。かれておくれがちなる姿の秋に、今日こそは君にかちくり秋に包まめと心かまへせられてなん。歸るさには、小かめの料に女郎花もをらせ給へ。父君のには、をとこへしやよからん、そはとまれ、時を過さで、いざさせたまへ。あなかしこ。

名古屋・瀨木せき

一夜がほどに、いみじうも、吹きすさびし野分かな。いかにきゝ過させ給ひけん。御住居のあたり、さしたる御いたみもおはせずや。こゝろおちゐかたくなん。もらさせ給ひてよ。こなたは、幸にも、事なう打過し侍るを、つゆ御心になかけ給ひそ。さてもこの朝こゝの里人は、何がし山の栗、數多落ちたるを拾はんと、たかうのゝしり合ひて、男も女も大方の童ともが、いでゆくめるを、もの好める己が性には、餘所ごとにしも、見すごしがたうてなむ、さきつほどより、幼き妹のそゝのかすが、よきよすがなれば、いでやとおもひなりぬるにも、かはらぬものは心なりけりと、老いたる人のくりことざへ、おもひいだされて、われながらをかしうこそ。たゆみなく、いそしみ給ふこゝろには、あどけなしとや笑ひ給ふらん。愚なりとやおぼしわき給はん。さはいへ、いまは。

かたみに里がへりの身、いかで共にと思ひたゝせ給へや。よき歌の材料をゑて、都へのつとにもしたらんには、いかにうれしからまし、とまづはおのがかたさまに理りをつけて、ふんではしらせて、しひても誘ひごと聞ねまつるを、おとなげなしと、かいやり給はず、いかでうるはしき御いらへのほど、ひたふるにねぎまつるもおもふせなりや。あなかしこ。

長崎　内藤美與子

こなはめば、はしき子等を、しぬばるゝとさへ、昔人に歌はれて、美味きものゝ數に、かずまへられたる栗の、昨日今日の風に、音して落るさまいとをかし。友どちかいつられとく來よかしと、山里の叔母の許より、雁の使して告げ來しぬ。野山の秋色見ながら、里人のされ歌聞つゝ、少時ゑしらの群に入り、落栗あさるも、興あるすさびならんと、思ひ給はゞ、明日の朝まだきに立出まし。さはり玉ふことおはさず、思し立ち給はゞや、稚子の君夏子の君をも、そゝのかしまつりしかば、必ずといらへくし給へり、此つらにもれ玉はゞ、三人の中ひとつ、かけたる心地やし侍らん、いさゝかのあし分け小舟は、のりさしても、いざたまへ、拾ひし數にまけわざし侍らん。否もうもみかへし玉ひねかし。かしこ

松山　柳たけ子

千くさの吹きにほへる、庭の面を眺むるにつけても、去年君と共にあこがれし、野べのいとなつかしう、思ひ出られ侍り、この頃もかのわたりに、秋つられなば、いかにたのしからんなど、ひとりごつ今朝しも、訪ひきたりし花賣りの媼の、我山の柴栗は早こゝかしこにはらくくと落ちそめ侍り、拾ふもいとおもしろければきませよと、いとねもごろなるすゝめ嬉しう、かの某山はあまり遠くもあられば、千草の中をふみ分て栗などをあさりつゝ、一日を暮しなばなかくくに野べにもまして、興ふかきわざならん。かつは不足がちなる、運動の補ひにも成りはべらん。幸今日は日曜日にて空さへもいと晴れわたれば、いでや是よりまからんと思ひ立ちはべりぬ。あまりにはかのことゆへ御さしつかへの程もはかりかねはべれど、是非に操り合し給ひて、うれしきかへりごと、此のめのわらはに給ひてんや。右うべない給ふれば、直ちに御館へ迄參りて御供いたすべく、わりこの用意は、もはやこゝもとにて調へはべりつれば、必ずくく御心になかげたまひそ、まづはみだれ書ながら、御伺ひまで。あなかしこ。

東京　片山綾子

あさましうなりつる花の上、さては、築地の破目など、一入露しげきも、又、やう變りておかしう。獨、庭の面まもらひたる折から、末なる弟の、いと大きやかなる栗、四つ五つ嬉しき樣して、かい抱きぬるに。かつて、契り參らせし事の、ふと、思ひ出でられて、今日こそは、さぞな樂しうはべらん、あさりあかぬまに、籠にも袖にもと、覺へ侍れば。こゝらの人の分け入らぬさきに、いかで、思し立たせ給はずや、此方、妹ともの、日一日遊びてんと、わりごなど、はしためして、多く調らべさせ侍るを。御衣ぬらさせまつらんは、惡くて侍れど、はた、すさまじかるべき野分のあしたも、辿らま欲しう。例の、諸共ならではの心より、打つけながら、かくなん。かしこ。

東京　高橋津音子

先つ年の夏の中ばは、御國元をおどろかし參らせ、日々海に山に、遊びあるき、暫の休暇も夢の如、打過したる樂しさを、又今夏に思出て、獨ほゝゑみ居候、折柄、先に我家につかゑし媼の久々にて訪參り、飛鳥山續き、音無川の邊の栗林、今を盛りと笑ひはじめ候由にて、栗拾ひにそゝのかされ候を、此方にてもかゝる事胸にうかび居候折とて、早速にうけがいやり申候。幸ひ來る二十一

日は日曜日の、其日あたりに出立ばやと存候に、御差支もおはさずば、是非共に御連立遊ばされ給はずや、共にとて、御誘申上し春子夏子の君にも、御同行を約され給ひて、君をお待ち遊ばし候を、御出なくば、さぞや、本意なくおぼし、給ふらん。御心なくみ給いて、共に出立給ひてよ。いかに天然なる田舍の景色の美くあらん、都はなれし里の、天高く氣淸きわたりに、早稻、中稻、秋風にそよぐを見つゝ、皆樣と、此春以來の山遊びに、秋の一日を暮しなば、いかばかりか樂しからまじと、今より御返り事の、待たれ居候程に、何卒よきさが御聞かせ給はり度願上まつり度。其日の支度等は、何も媼の家にて致すはずなれば、御心づかひには、及申さず候。倘時間は、午前八時頃より、皆樣御さそひ申上候。委くは、其日御目もじの上と申のこし候。あなかしこ。

東京　田中貞子

一筆のはしりがきは、御心安だてと御許し給ひてよ。久しく御けしき伺ひまつらぬほどに、朝夕は冷しさおぼえて、秋たちし印しと驚れ候。御許樣此頃は文よみ物かくわざにのみつとめ給ふとか、いつもながら御すこやかにて、御うれしう存候。今日しも某所叔母の許より、おとつれ有之候ところ、山々の木々の紅葉もいろつきそめ、わけて木の實は出來よろしく、園べの千草も盛りすぎたれど、なほすてがたきながめこれあり候ゆゑ、是非に御許樣御すゝめ申上、一日まかりこすやうにと申參り候間、のどかなる此頃の日和にたれこめてのみあらんも、いと口をしく存候折柄、幸ひ明日は日曜の事故、まだきより、山路のつゆに袖ぬらし一笑こぼれたる笹栗ひろふも樂しき事と思立候。御妹子樣御つれ立いかでふりはへさせ給ふや。御さはりもおわさずば、御供いたし度、さ候はゞ叔母にも久々の御目もじも叶ひ、一入興あること、嬉しう存候。田舍の事故、草履はきにて身かるにいたし候方運動にも相成候と存候間、御ふだんのまゝにて、御出相成樣願上候。かしこ。

安藝　和住千鶴

露ふきはらふ朝風もはださむきに、よべより吹きしきりたる木枯の、一しほ身にしみ侍りぬ。さるをけさとく山に登りし人の、北山の栗の實、あまた落ちたりと云ふに、ゆかしき心とみに起りければ、今より行かんと、思ひ侍りぬ。されば隔てぬ君を、いざなひまつり、落栗ひろひつゝ、更け行く秋のけしきなど眺めなば、いかに、たのしかるらむ。みありさまいかゞにや。御さゝわりおわさずば、御供ゆるしたまひてよ。ひたすら、ねぎたてまつる。否やの御かへしはこの者に、おふせ、きけられたまひてよ、まづは御さそひまて、かくなむ。あなかしこ。

長門　杉道子

啓し上まゐらせ候秋もやう〳〵中ばとなり、天朗かに、氣爽かに、野山の景色いと長閑になり申候、折柄野遊びなどに杖曳く人引きもきらずと聞つるに、去歲のこの頃にや君と藤生山に□拾ひせし、樂しきことなど思ひめぐらし候、折しもあれ、岩田章子の君より、栗もいまは盛り、また野山の趣いと面白く、こよなき時にこそ侍れば、明日午前より、薫子の君をおさそひ申上げ、藤生山へまゐらむ心ぐみに候が、君は御都合如何に在らせられ候やと、文送り給ゐり。げに興あらむことて思ひ立ち、靜子の君をも誘ひまゐらせ、是非御供侍らむと、早速御返辭差出し申候。君には別に御障りあらせらずや、御同件申すは例の親しき君たちに候へば御心置はあらせられまじく候。萩や女郎花のこぼれ匂ふ野や、淸くそう〳〵と流る谷川のあたりなど、すさび步き栗拾ひするは、いとゞ興あることにて、かつは常々たれこめて文よみ給ふ御身のうさをも晴すべく候まゝ、何卒明朝早々御玉步まげさせ給ふよう、うべない給てよ、まづは御誘ひ申上まゐらせ候あら〳〵かしこ。

遠江　夏目松枝子

荻の上風身にしみて、朝は冷しき頃と相成候へども。君には時候の御障りもあらせられず、日もすがら、戯ち縫ふみちを、御いそしみ遊ばすにや、承らまほしうなん。さて此頃の野邊の景色のいと樂しさよ。四方の野はらは八千草の色々咲きいで、露に匂へるあしたのながめ、夕暮皆る鐘の音、千草の露をあやなして、なくはた織虫のこゑをもしろきなど、何れ樂しからぬはなし。幸ひ此頃は暑も谷間の水もろとも、流れ去りたる折なれば、散歩がてら、栗拾ひに御越し遊ばされ候ては、如何にや、少しくは御保養にもと、ぞんじ候。春子なつ子の件も、とうよりそゝのかしなき候まま、是非御出ましの程、くれ〴〵も御いざなひ申候。まづは、御進めまで、かくなん。あなかしこ。

肥後　佐々有鄰子

一筆拜啓仕候。昨日の土曜の歸路に。言上いたし置候。今日の栗拾ひは。如何の御都合にあらせられ候やらん。朝日影うるはしくにほひ出候へば。近傍の栗林に。嵐のさそひし落栗拾ひてまゐらせん。軒の椎實も落て侍りぬ。御かへりごと。たまはりたくなん。あなかしこ。

愛媛　珠川扇子

八束穗にゆたけき、秋の色見せて、ふきし名殘のその風に、春にもましてそれ〴〵心地よき、けふ此頃、うるはしき友の君には、朝な夕な學びの道の御いそしみに、御餘念もおはさぬ事と、御うらやましうなん、妾は例の奉りものとて、遊びの道をのみきはめ、此よき日頃をあだにすごし居り候、折ふし、あし引の山里より音つれこれあり、此頃は八千草咲きゝそひ、ちりゆく桐の一葉とゝもに、栗のみさはおちたれば、ひろひにこよ、との事に、飛び立つばかりうれしく、父母のゆるしも得候まゝ、明日は天氣もよろしく候はゞ、朝とくより一泊のつもりにて、參らんと樂しみ居り候、御許樣にはいかゞに候や、常々御學びのまどの御つかれをなぐさめたまひ、且は其わたりにおくれさきたつ千草に、日來御たしみの大和言葉の花をさかせ給はんも、めでたからん、あるは拾ひがちに、あるは夕をまたで、なく夕まつ虫の音をたづれんなども、一入をかしかるらんと、存じ候まゝ、御そゝのかしまゐらせ候。さりながらかまへていらへたまへといふにはゝべらず、御兩親樣とも御相談の上、御答へをまち侍るになん。あなかしこ。



○侍從御差遣

天皇陛下には過般鳥島噴火の慘狀を聞召され東京府を經て慘死者の遺族に對し御惠恤の御沙汰あらせられしが尚は同島噴火後の狀況及び遺族の現狀視察幷に御慰問の思召を以て今回侍從日根野要吉郎氏を鳥島、八丈島、小島、小笠原島、大

島の諸島へ差遣はさる可き旨御沙汰ありしにより同侍從は本月五六日頃横濱出帆の便船にて渡島の筈なりと云ふ

○皇族殿下の御下賜金

東京府に於て募集中なり鳥島遭難者遺族救恤義捐金の擧を聞召され東宮並に同妃兩殿下より金百圓各皇族殿下より金百五十圓何れも御下賜あらせらるべき旨東京府知事へ御沙汰あらせられたり

○迪宮殿下の御近狀　御歸京あらせられたる皇孫迪宮裕仁親王殿下の御近狀を承はるに何れに於かせられても御變りなく絶えて御醫藥を用ひさせらるゝ樣の御事は非ざりしが沼津御滯在中は全國一般の天候不順にて殿下にも御生育上御體量の御增加稍々少き樣に拜せしも箱根御移轉後は天候も回復し土地も高燥にして小田原灣の海氣を受けさせらるゝより御體量も日に增し御增加あらせられたり又宮の下御滯在中晴天の折は毎日午前に一回午後に一回御外出ありて底倉、氣賀、湯本、塔の澤の間を乳母車又は御抱上にて御運動あり御食は麵麭、御粥等に魚類を添へて差上げられし由にて昨今は御言語も段々御開分けに相成るをもてやがて自由に御歩行あらせらるゝに至るべく至つて御壯健の趣なるが近日宮中の御都合を伺ひ奉て御參内久々にて兩陛下に御對顏あらせらるべしといふ

○白耳義皇后崩御　白耳義皇陛下マリー、ハンリエットはスパ(同國著名の温泉場)に於て御食事中突然心臟痲痺に依りて崩御ありたり。御悼はしき限りにこそ、御齡本年六十七歲に渉らせられ、千八百五十三年八月二十二日現皇帝レオポール第二世陛下と大婚の禮を擧げさせられたる方なり。

○藍綬褒章幷に銀盃下賜　元奈良縣生駒郡片

桐村長村戶賢德氏は町村制實施以來再三選まれて村長と爲り專ら地方自治の發達を圖り公益の爲に盡力せし廉を以て客月二十三日付を以て藍綬褒章を又福岡縣八女郡二川村稲田素平氏は夙に心を農事に注ぎ殊に螟蟲驅除及び豫防法を研究し四十餘年間一日の如く公益に盡瘁せし廉を以て同日賞勳局より銀盃一個を賜せられたり

○義僕の受賞　岡山縣備中國川上郡宇治村仲田武一郎氏雇人笹部定吉氏に對し去九月二十三日付を以て賞勳局より左の通り綠綬褒章を下賜せられたり

資性温良年甫めて十九居村仲田武右衛門に仕へ服事三世七十餘年能く忠貞を竭す始め主家折閲の後を承け生計困乏なるや拮据家聲の挽回に努めしも不幸相踵き加ふるに武右衛門死去し家道再び衰ふるに當り其遺子作太郎を佐けて家政を整理し殊に現雇主武一郎夙に公私の職に從ひ家に在らざること茲に二十餘年其間百の家事を負荷し晝耕夜作克く一家を支持し雇主をして其職に安んじ今日の資產あるを致さしむ洵に奇特とす仍て明治十四年十二月十七日勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

○賜恩義肢義眼の修造●●●●●●●●●　征清戰役にて負傷したる軍人軍屬に賜はれる義肢義眼中、既に工合を損したるもあるべしとて皇后陛下より右修理改造を爲すべき旨御沙汰あり海陸軍とも旨を奉じて取調の上、愈よ軍醫を選拔し第一、二、八の諸師管へは岡隆太郎を第三、四、九、十、十一及び第五師管の一部へは馬杉篤彦を、第五、六、十二師管へは中村彌樹を派することとし三軍醫は斯道に熟練せる職工を隨へ先月廿五日より出發して各恩賜者を歷訪して其の修理を爲すといふ

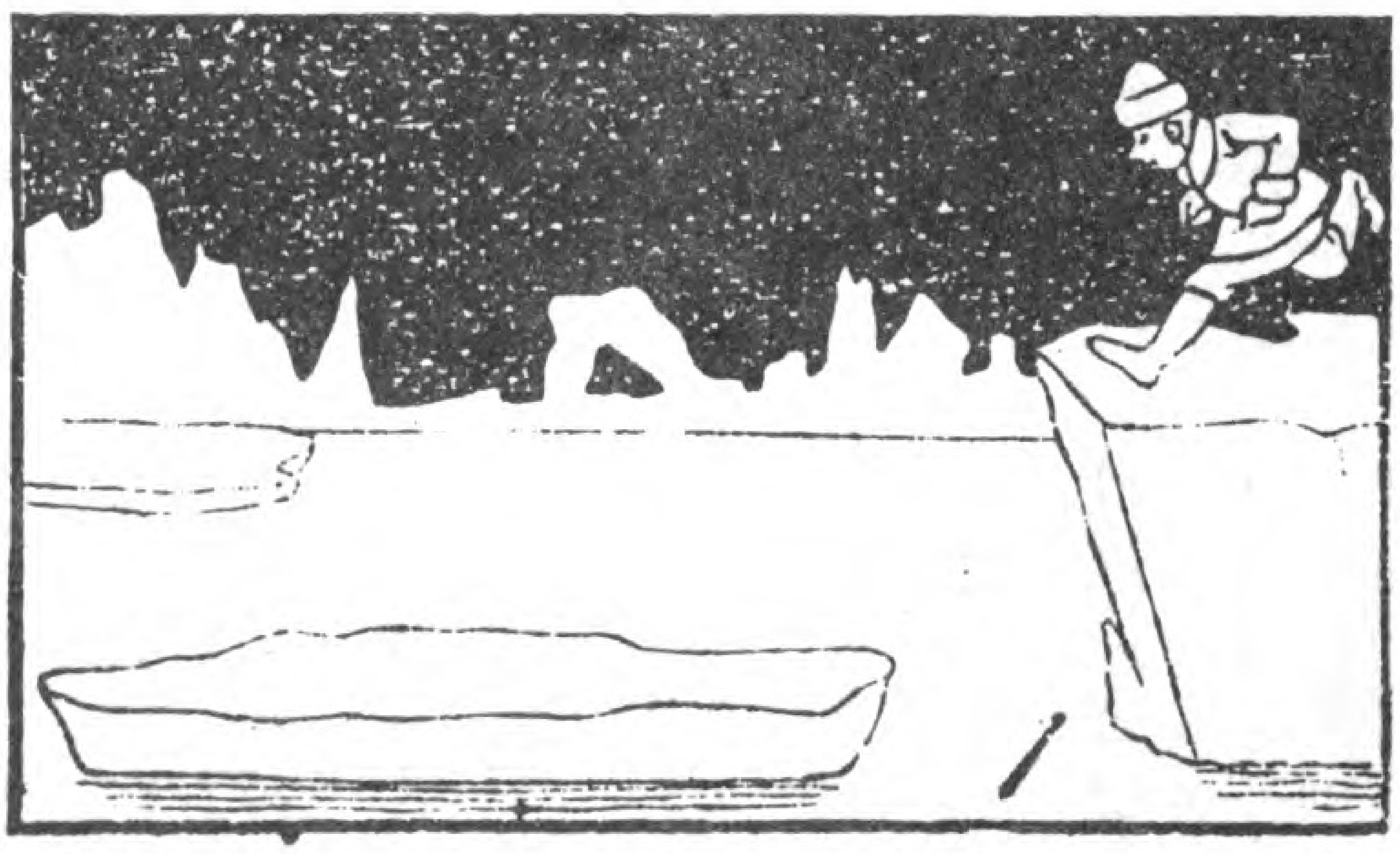
○女子大學の近況　同校には從來校內に八家族の寮舍三棟と校外に二家族の寮舍二棟ありしが今學期より樺山伯の好意にて同伯邸內に二家族の寮舍二棟を設け樺山寮と名けて七十名の生徒を收容し寺田勇吉氏の邸內に森村市左衛門氏の好意により三家族の寮舍一棟を建て豐明寮と稱し七十名の生

徒を收容したれば都合全生徒の半數即ち四百名の生徒を收容し得ることゝなり自宅以外の通學者にて止むを得ざる者の外悉く入寮せしめ嚴重に監督保護することとなしたる由

○兒童研究會の創立　今回高島平三郎、松本孝次郎の二氏發起となり表題の如き會を設立し事務所を牛込矢來町三番地教育研究所中に置けり目的は發達期にある人類の精神及び身体の狀態を科學的に研究し併せて之が應用を計るにあり會員たるを得る人は各種專門の學者及び教育者兒童の保護者兒童研究の特志者に限ると云ふ

●●●●●●

○女子躰操教員の需用　近年各地方の女學校に於ては躰操教師に女子を採用するもの多く昨今日本躰育會に向て女子躰操教師招聘の申込を爲すもの增加したるより同會にては今回女子部を擴張し躰操遊戲薙刀各種の教員を養成し專ら其需用に應ずる筈なりと云ふ



○讃岐鐵道の女子採用　同社にては各驛出札掛及び改札掛の一部に女子を採用せんとの計畫をなし先づ試みに客車中の喫茶室詰ボーイとして此程試驗の上八名の女子を採用したりと云ふ

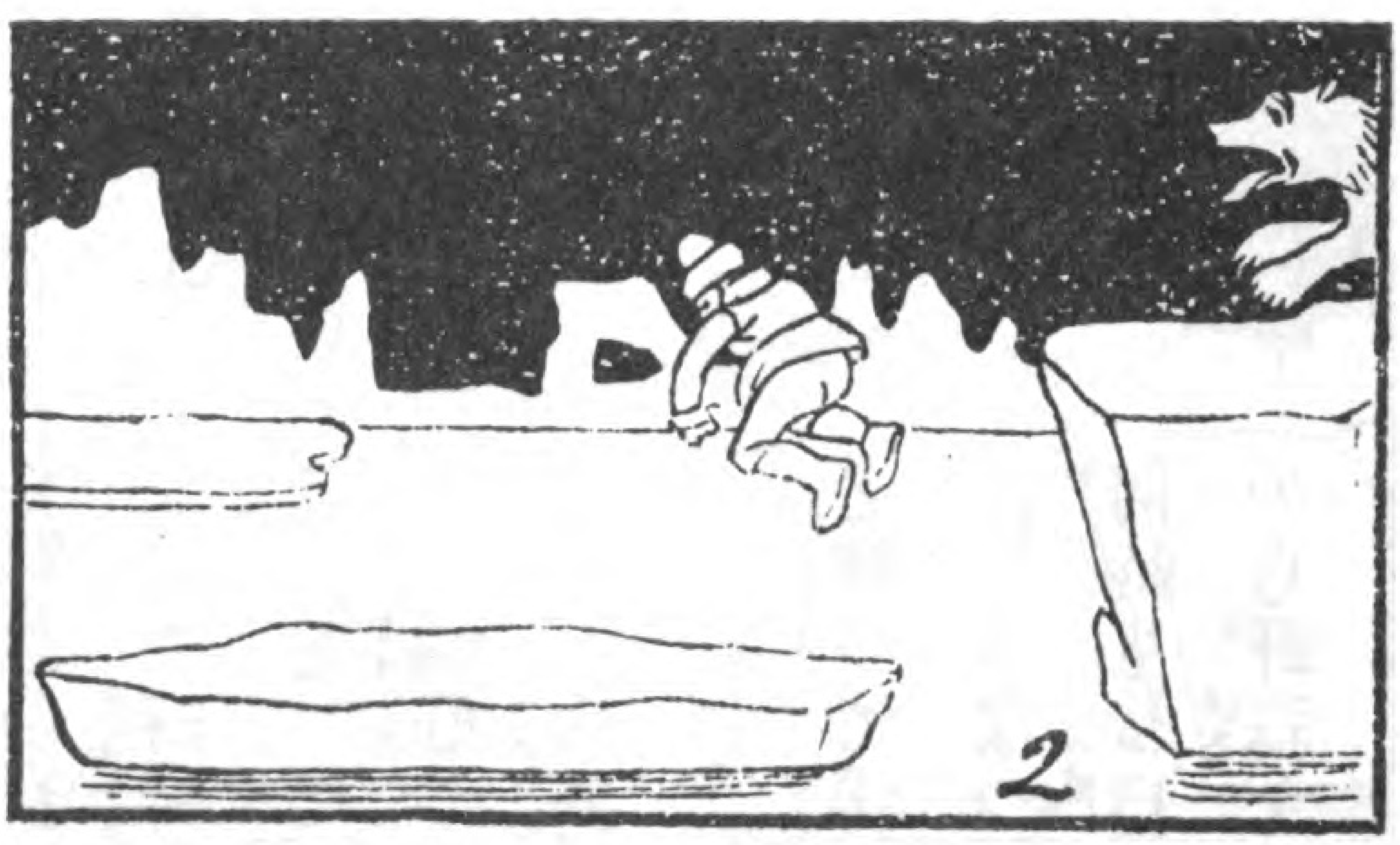
○女子講習會　高等女學校入學志望者のため下谷區仲徒士町二丁目の本島小學校内に設けたる女子講習會は高等女學校教諭數名日々出席し熱心に教授するにつき講習生は大いに滿足し居れりといふ因に記す同會にては當分の中三年以下豫備科の入會を許し又英語補習生の爲め

雜報

に選科の入學をも許す由なり

○三十年勤續の乳母　黄白の爲に立ち働くものは身を風船玉の夫れよりも輕く朝に甲所に轉ずと見れば夕べ亦乙所に轉じ恰も利の存する所を我が居所となせるが多き今の世に類ひ稀なる下婢小比賀リキ(五十)の女德を全うしたる話あり抑も此のリキといふは香川縣綾歌郡府中村の者にして父親は昔髮結職をなし居りて別に富めるといふにはあらねど又糊口に差支ゆる程のこともなき生活の中に生長しリキが二十二の春なりき　周旋するものありて同郡松田村字德田の某に嫁ぎて一子を擧げたれども不幸にして其子は育たず又故ありて夫とも離れしが乳の出るを幸ひに現在の主家なる坂田町菅谷某の中に乳母奉公として住み込みたり其時リキが乳房によりて育て上げたる菅谷の一子は現時本縣にて勤直の聞えある巡查宮本某なるが夫れより後は乳こそ出でね三男四男と出產する每に宛も我が子の如くにしていつくしみ晝は背負ひて守り育て夜は抱きて添寢をなしつゝ斯くして遂に八人を育てあげしが今亦主人の孫に當れる四才と乳兒との二人を優しく保育する事素より以前に異なる事なければ其の馴れ慕ふ樣親を慕ふが如く余所の見る目もいじらしき程なりと斯く馴れ〳〵しくなりても主從の分らは明らかにするものから家人も亦之れを勞わる事一方ならず主人の居らざる時などは日夜家事の相談相手となるなど余所より見る時は雇人とは如何にしても見へざる程ありと云ふ是より先き主家の家政改革ありて他の雇人と共にリキも解雇されしが其時同町に神崎某なる豪家ありて菅谷に謀り主人の紹介にてその神崎方に雇はれ居たるも亦一年ばかりにして菅谷に雇ひ戻されリキが始めて同家に雇れてより指折り數ふれば玆に

三十余年の長の月日なるを一日の怠りもなく一ツの過失もなく一日の如く勤續せるなりと此のリキには叔父はあれど兄弟とては唯從兄弟一人あるのみにて母には若き時死に別れ又父親にも八年前に死別れたりしが父の尙は此の世にある間は折々里に歸りて父を慰むるに努め居たりと又若き頃は緣談を申込むものもありしが性質内氣にして敢てそを欲せず斷然謝絶する程なりければ素より浮きたる噂立てられしことなど絶へてなく近隣の甲乙は皆リキの行ひに感せぬものなく若人ありて試にリキの行を問はゞ只誠に珍しき人なりと云ふの外なく苟にも批難するものなど未だ一人もなしといふ實に人に從ふものゝ龜鑑と云ふべきなり



●谷子爵夫人の籠城談

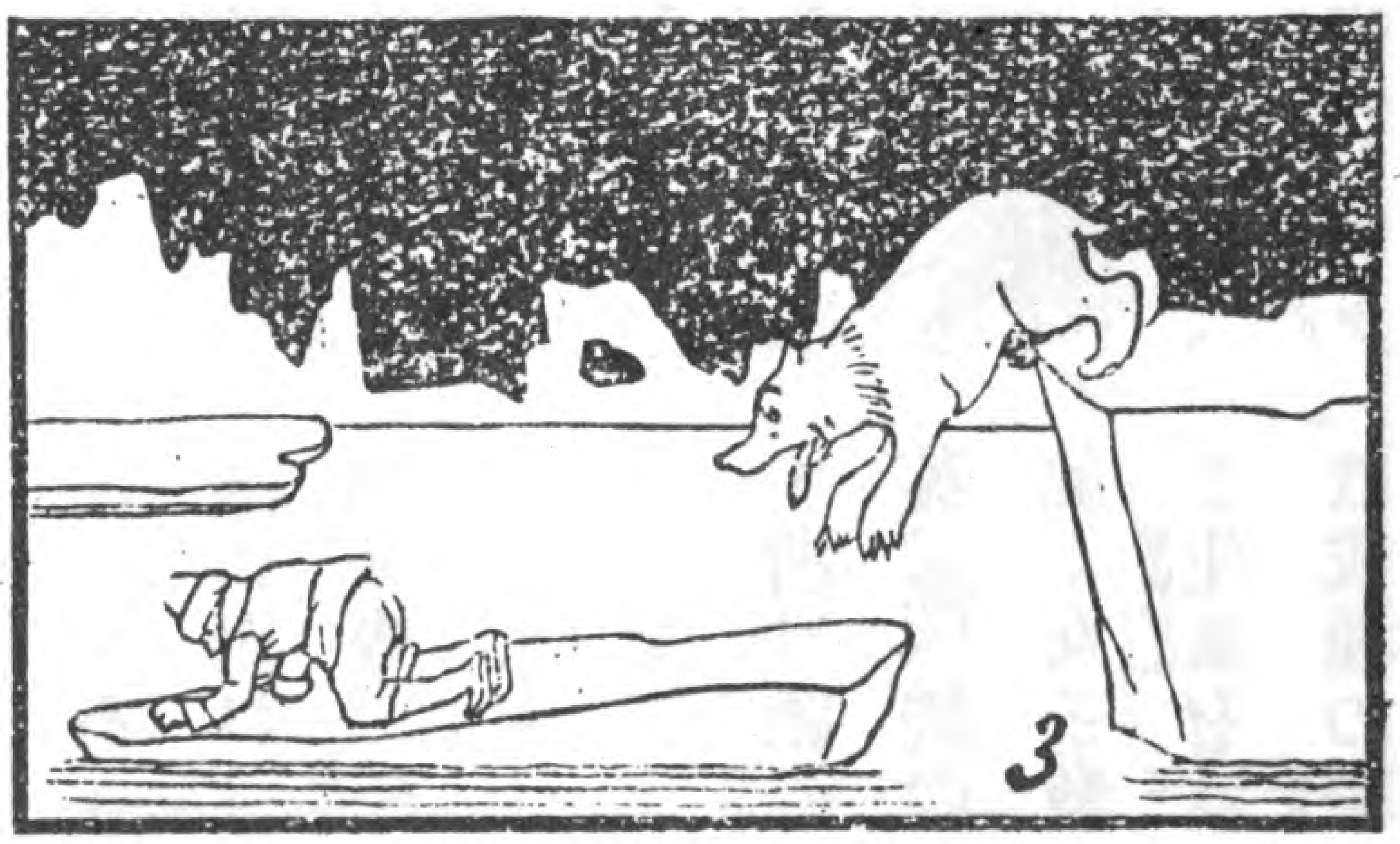
谷子爵夫人隈子が大阪の某新聞記者に語りたる熊本籠城談は左の如し

干城は三谷の別荘に引込で讀書三昧に日を送つて居りますが來月の廿四五日頃までには上京することになるでしよう、議會が開けますとナカ〳〵忙しくなります干城は自己の隨意で議會を休むといふことをしませぬから會期中は少しの隙もありませんソレに公私訪問の御客も多くなりますから臺所を働いて居る私の用事も自然多くなる譯でございます、よくお出でになるお客ですか、左樣です曾我さん三浦さんなどで御座ませう何分頑固な爺婆の所へは常世向の人は餘り來ないのです▲西

南戰爭の時ですか、あの時は私も干城と一所に籠城しました一所に籠城した士官方の夫人や妾なども六人計りありました尤も士官の夫人方には最初田舎に立退うといふ話もあつたのですが私が黑土になるまでも所天と共にしやうと申して堅く籠城說を唱へたものでありますから他の夫人方も奥さんが籠城なさるなら私も〳〵といふので遂に六人ばかりも籠城することになつたのでした、中には田舎に立退いた人もありましたが田舎にも賊の手が廻はつて居つたものですからソレは〳〵ひどい目にあつたそうで御座います、干城と共に籠城されたのは樺山(大將)奥(中將)小川(中將)與倉(中佐)さんなどで連絡をつける時には奥さんが斬つて出たのです、籠城日數は二月二十二日から丁度五十四日間で此間私共婦人連が何をしたかと申しますると其時分には今の樣に看護婦など申すものがなかつたのですから兵士の用ゐます足袋やシャツなどを縫ひましたので毎日天幕の中に這入つて鐵砲の音を聞きつゝ足袋やシャツを縫ふて居つたので時時將校方を慰めるために私は「おはぎ」をこしらへて本營の方に贈つて居りましたが樺山さんは酒好で「おはぎ」などは召上らなかつたものですから兵營の土手に生へて居ります嫁菜を摘んで「ひたしもの」にしてあげましたところが大層旨いと仰つて澤山お喰りになりました凱旋後お宅でお拵になつて召上つたら少しも旨くなかつたつて何時もお目にかゝると一つ話にいたします、ソレから野蒜を摘んで酢合をしましたが味噌は燒殘りのがありましたけれども酢がないので私が持つて居りました沸騰散を水に融いて酢の代りに用ゐましたところソレは〳〵酢つぱいことでありました、私の家では今でも紀念のために毎年二月廿二

日に「おはぎ」と粟粥をこしらへましてその日はドンなお客にも出すことにして居りますソレから毎年の籠城會にも「おはぎ」をこしらへて送ることにして居りますハイ籠城中の困難といふものはお話も出來ない程でありました糧食が盡きるといふ心配から粟粥を十日間程食べましてその後米に改めましたが連絡がついて初めて喇叭の聲を聞いた時は何ともいへないほど嬉しかつたです

●正岡子規氏逝く　一時大に衰へたる我が俳壇を振興し、芭蕉、蕪村以後第一人と稱せられたる正岡子規氏は久しく肺患に惱まされて根岸鶯横町の僑居に靜養せしが、病魔は深く肉を侵し骨に入り氏が起居の自由を奪ひて病床六尺の外に出でしむること能はざりしもの數年、氏は終に其の玲瓏の詩嚢を抱いて先月十九日午後一時空しく白玉樓上の人となれり悼しい哉、氏は伊豫松山の人、夙に東京に出で、大學に遊び後日本新聞に入り嘗つて軍に遼東に從ひたる事あり、病は即ちこの際に發したるなり、齡僅に三十餘歲



外報

●各國皇后の嗜好　英國皇后は、熱心に寫眞術を修め玉ひ、又動物を愛し、特に牛を飼ふて牛乳を絞取るを好ませらる。從來自轉車に乘り玉ひしも、近來は自動車に換へられたり。獨逸皇后は、撮影に妙を得させ玉ひ、皇太子もわれに倣ふ

て寫眞に深入りするやうになりたりと宣はせらる。近時慈善の目的を以て寫眞共進會を開設し、ゼルサレム旅行に際し、親ら撮影せられし寫眞を陳列せらる。サクソン國王妃の道樂は慈善にして、學校孤兒院養育院等を設立せり。和蘭女王は騎乘を好み、又氷を滑るに巧なり。性質動物を愛するが故に、獸獵競爭會を嫌し玉はず。瑞典那威王妃は、敬神の念深くして、宗教事業に全力を注ぎ、救世軍の保護者たり。ルミロヤ王妃は詠歌を善くし、又歴史に精し、常に寫字機械を手より離さず、手藝にも長せり。希臘王妃は、快走船に乘じて遊山するを好み、伊太利皇后は韻文を綴り、射的に妙を得、又自轉車を操れり。キルテンベルク王妃は空中遊戲に凝り、又男女同權說に同情を寄せらる。白耳義王妃の嗜好は、騎馬にして屢厩を見舞はせらるゝとぞ。

●和蘭の女子教育　和蘭にては、普通教育の制度、最も完全し居りて、孰れの階級を問はず、高きも賤しきも等しく同一の學校にありて教育を受けつゝあり。小兒は六歲にて就學し、女兒は十二歲に至れば試驗の上、高等學校に入り、更に五年間高等の學科を修めしむ。この高等學校は全國を通じて七十二個ありて、學校に於ては、男女の席を分たず。而して女子の教育に於て、最も力を盡す所は語學にして、中等以上の和蘭の女子にして、英、佛、獨の語を克くせざるもの無し。而して斯の如く女子教育の普及せる結果、婦人にして獨立して生業を執るもの多く、富裕なる婦人にして、獨は或種の職業に從事せしものあり。婦人の職業に從事するは貧賤なるが爲也といへる誤解は、和蘭に於ては見るべからず。而して和蘭に於ける婦人の職業は、主に女醫、齒科醫、寫眞業、園丁等に

して、其他には化學の助手一千餘人あり。看護婦は、女子の職業として最も適切なるを見る。又た婦人にしてハーレムの國立歴史博物館の監理者たるものあり。ヴトレヒトの博物館長も亦婦人にして、首府アムステルダム病院の手術長も、亦婦人の占むる所ありといふ。

▲恐るべき遺傳　英國某雜誌に載する處によれば或る青樓の女主は數年前五十一歳にて死去せしが此婦人性來大の飮酒家ありし爲め其血統を引く者よりして數多の罪人を出したる由にて即ち彼の血を引きしものは八百人に達せる内七百人は一犯以上の罪人にして其中三百四十二人は大酒家百數十人の婦人は淫賣或は謀殺犯にて處刑に處せられ



此一家を裁判するに同國法廷の費消高に三百萬弗を要せりとは驚くべし

落葉籠

▲武藏田邊房子さまへ、あなたはそれ程學問が勉强なされ度御心なら、東京のお知邊の方にでも御賴みなされて、當分郵便局か電話局へ御勤めなさるれば、夜分でも勉强は出來ると思ひます。かくまで御熱心の御考へがあるなら、御兩親方もヨモヤ否とはお仰いますまい。(神田ゆき女)

▲大町桂月先生の常盤御前と、國府犀東先生の靜御前はまだ御出版になりませぬか。(靜岡吉山しづ)

常盤御前は發行にありました。靜御前も四五日

内には發賣されるさうです。東京及び地方の重な書林には何處にでもある筈です。(かをり)

▲男子ならまだしもなれど、立派な御容子を爲された御婦人が、鐵道馬車の中で、スパリ〳〵と烟草を喫ふて入らつしやるのは、甚だ見惡く思ひます。(品川吉野菊女)

▲此節の新聞や雜誌の樣に、やれ海老茶式部のあんのと女學生のこと計り書いてゐるのは、あまりヒドイではありませんか。さうまで腐敗した御方のみであらうとは思ひません。これは讀者の好奇心を迎へる爲ではありますまいか。私はだうも左樣思ひます。(宇都宮高等女學生)

▲小畑郁子先生の插花の御話は、まことに面白く拜見いたします。だうぞ引續いて成る丈け委しく御出しを願ひます。(山城田舍女)

▲妾も神戸のむめ子さま、木挽町あや子さま、麴町の大内おさくさま方の御説に賛成します。アメリカ風は嫌いであります。(神奈川ゆき女)

▲私は新篇ひめかゞみを拜見いたしました。誠に家庭の讀物として、之に過ぎた書物はあるまいと思ひます。こんな書物が澤山出來るのを、私は一心になつて祈ります。(本郷駒込一女生)

▲一寸記者の君にお願ひ申します、妾は女鑑に御筆勢をとらせらるゝ皆さまが、誠におなつかしうござります。かねて三輪田先生、棚橋先生などは、おすがたを拜しましたので、田舍に居ながら、お逢申てお教へを受るやうな、心地がして嬉しいですどうか引續いて學士のお方初め皆さまのもお載せ下さいまし。(一讀女)

▲貴社御發行の女鑑へ衞生顧問と云ふ樣な者を掲げて頂たいと思ひますが、如何で御座りましよう。記者先生の御答へを待て居ます。(埼玉愛讀女の一人)

まだ準備が出來ませんか、追々はそんなものも載せたひと思ふて居ます。(か〻り)

▲醫學士山根先生の御著書改良服圖説とか申す本の價御ぞんじの御方に落葉籠にて御手數ながら御知らせを願ひます。(なにがし)

▲私はこれから後、苦學いたしたいと存ますが、どのような事をいたしましたらよろしいでありませうか。記者先生、ならびに皆々さまに御伺ひ申ます。(武藏田邊房子)

前號の貴孃の御問に對して、神田ゆき女さんの御答が本號に載せてあります。心切な答と思ひますから篤と御覧なさい。(か〻り)

▲福島君の歸りをことほきむかへてとの題にてとつ國をふみならしつ〻歸へりくる君がわしけの駒ぞいさましといふ歌は去廿六年の春、君の歸りませし時吾父のよまれしなり。前編の口繪のいともめでたきを見奉るにつきて、冊此短をとりいでてみるにつけてもみとせまへの九月廿九日は、父はあへなく身まかり玉ひぬかれこれ思ひつゞけてかけ床にいたすになむ。(京都坪内りゑ)



○三輪田女學校

(口繪寫眞版參照)

靖國神社の西、二町許、麴町區四番町十四番地に新築された宏壯なる建物が、則はち三輪田女學校で、校長三輪田眞佐子刀自、教頭は刀自の養嗣子文學士三輪田元道氏

である。校長なる刀自の傳記は、曾て本誌にも掲載し、又本社の出版に係る刀自の著書『女子の本分』第十一版の卷頭にも詳しく掲げてあるから、此欄には之を省くことゝして、極簡單に略傳中の一節を拔萃して、その爲人を紹介仕やう。

刀自は、弘化元年一月一日を以て京都に生る。雅號梅野女史と稱し、故從四位宇田淵氏の息女なり。中略　明治維新に際し、當時の勤王家伊豫松山の藩士三輪田元綱氏に嫁す。

要するに、刀自は名士の家庭に生れ、種々の變遷に接し、凡ての辛苦を忍び、或は令女たる時代あり、妻たる時代あり、母たる時代あり、或は名家の家庭敎育を托せらるゝあり、私立學校を起すあり、官立學校に勤むるあり、幼にして漢學と國文とを學び、嫁して夫より、皇學を受け、更に時勢と相推移して洋學をも窺ふ、是を以て浮薄に流れず、亦頑固に失せず、一種特有の主義を立てゝ、敎育に從事す。是れ先天的その技能あるが上に、精神的學殖の深き結果に外ならざる可し。畢竟刀自は、古今百科の學に通曉し、高尙なる理想を抱きて、慥に之を實行するの人なり。之を昭代の女傑といふも、豈敢て過賞ならむや。今年五十八歲、なほ老いたりと言ふべからず日夕孜々として、女德の修養を以て自ら任ずと云ふ。

斯の如く、一種特有の主義を立てゝ、敎育を畢生の事業として居る刀自が、積年の苦心經營も、漸く事實の上に表現して、學校建設の大事業を成就せしめたのは、定めて刀自の滿足する所であらう。

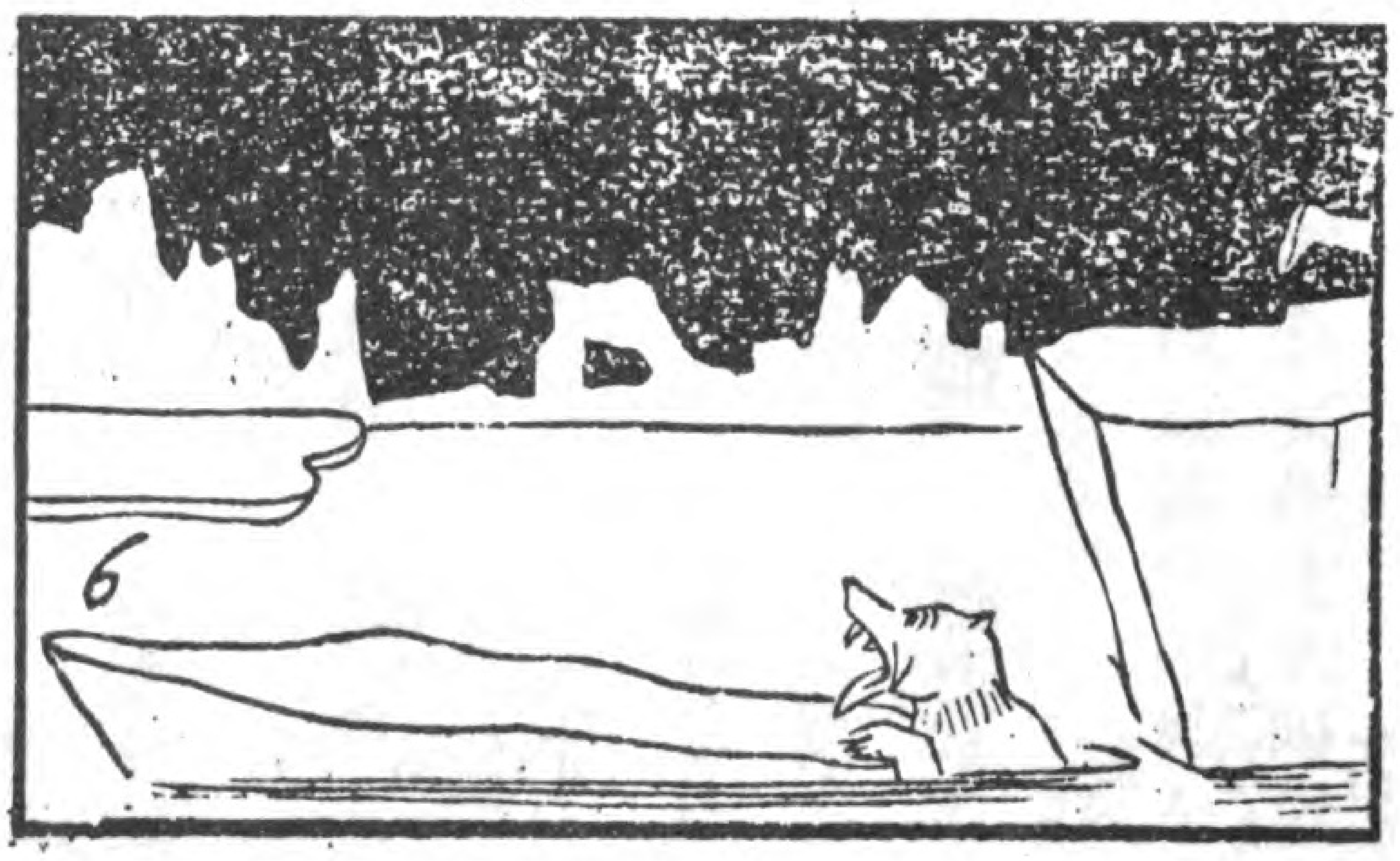
世間には、敎育の公共的事業なることを利用して、名利の爲に學校建設を企てるものがある。こ

れ等は、何れも、貴紳の補助を仰ぎ、有志の寄附を求めて、建設の資に充てるのが通例であるが、刀自は、最初から補助を辭退し、寄附を謝絶し、單に多年蓄積したる財嚢を傾倒して、その費金に注入したのであるから、苦心の度は、一ト通りならぬ次第であつたさうな。然しこれは、意志の堅固なる刀自にして、始めて之を遂行し得たので尋常一樣の女學者や、女先生等には、到底眞似の出來る事業ではあるまい。

學校の敷地は、約一千坪ある。其の內建造物則ち校舍(惣二階)と附屬建物との坪數が、平坪に換算して約二百坪に近く、その外在來の居宅一棟と塾寮三棟あつて、尚、食堂、浴場等も備はつて居る。今日の所では、諸般の設備も、完全とまでは行かないにしても、漸を追ふて擴張をする方針で、現に工事を繼續しつゝあれば全部が完成した曉には、優に都下有數の女學校として數へらるゝことになるであらう。

この敷地を買入れたのは、本年三月中の事ださうで、四月から在來の居宅を假校舍に充てゝ、生徒を收容して居たなれど、漸次增加するので、同月下旬地均工事に着手し、六月上旬から建築を始め、九月下旬に一部の落成を告げ、本月四日開校式を擧行する樣になつたのである。

校舍全體を外見から評する時は、敢て輪奐の美と稱すべき建築ではない、が、壯大にして虛飾の



なき處、堅固にして質實なる處、確にこの學校の特色を現はして居る。而して、又この工事の全部は、大倉組が請負ふたのであるから、總てが遺憾なく出來上つて居て、誠に宏壯な氣持のよい建物である。加之、土地は高燥であるし、空氣の流通は宜し、東は靖國神社の樹林を超えて遊就館を望み、北は外濠を隔てゝ牛込臺に對して居るので、無類の眺望である。

この外、學校建設前後に於ける、門生諸氏の美談逸話等を、詳細掲げたいのであるが、誌面の都合があるから、暫らくお預りとして置く。

◎三輪田女學校の開校式　別項に於て紹介したる如く三輪田女學校にては昨四日を以て開校式を擧行したりその詳況は次號に掲載すべきも今同校の校歌なるものを得たれば左に之を掲ぐ

千本の花につゝまれて
君に盡くしゝものゝふが
みたま鎮まる招魂社
ちかく仰くぞ尊さや。
氣はものゝふのいさましく
心は花のおてやかに。
いざやつとめん朝夕に
いざやはげまんもろともに。
御國をおもふ師の君が
紀念にたてしまなびやの。
もとゐをいよゝかたむべく
名をばます〳〵ひろむべく。

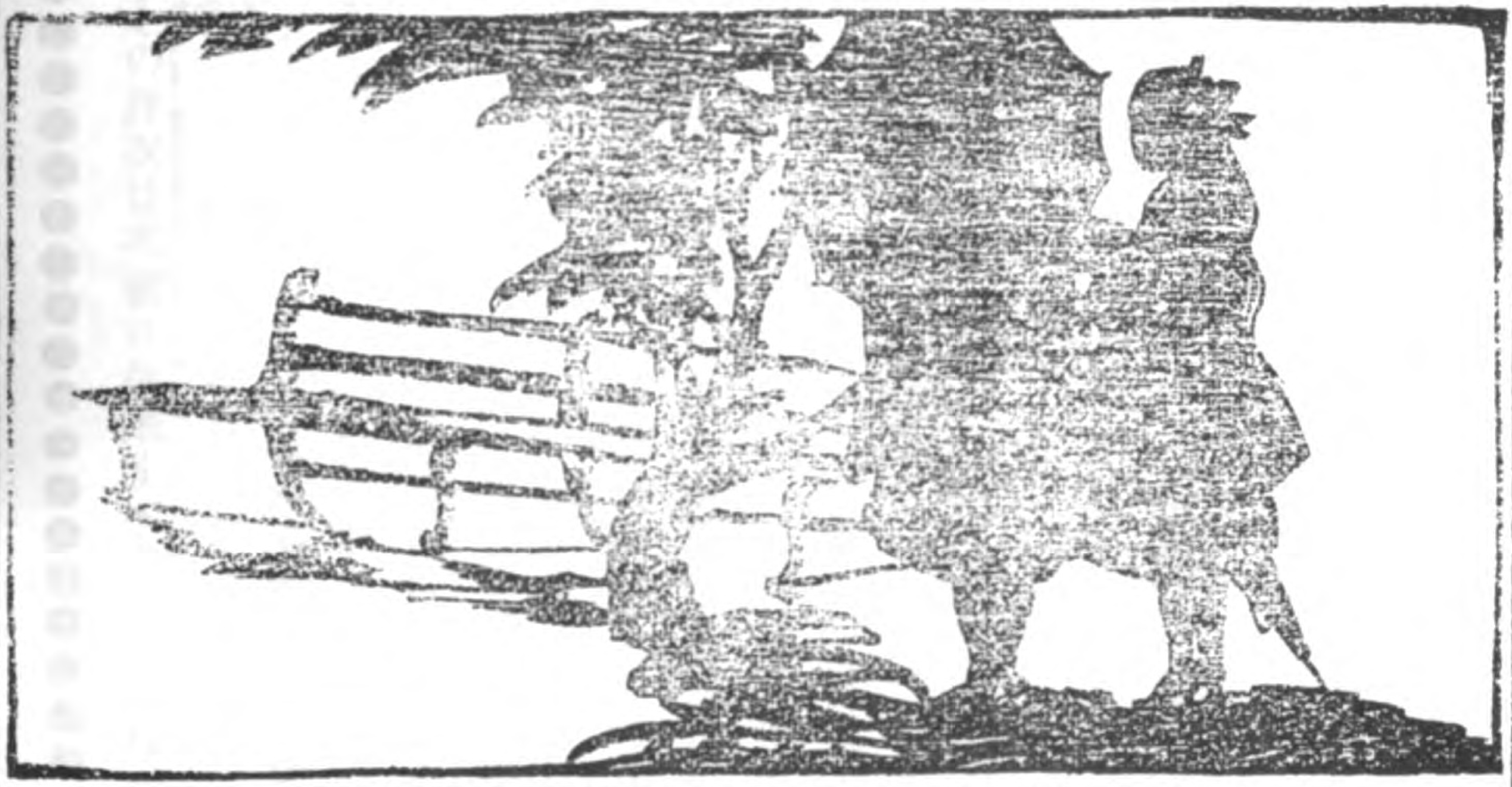
御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨の御附記被下度候

御注文の節は少女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

嬢さん方お待ちかねの

少女讀本

月の卷が出來ました



堀内新泉著 ◎ 壹冊價定拾八錢郵稅四錢

花の卷に對する批評

◎毎日新聞評 堀内新泉子の雅馴の筆に成れる家庭讀本にして、最と面白く、且つ有益の冊子なり、月次花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等なり

◎萬朝報評 まじめな所があつて先づ〱善い讀本と云はねばならぬ。

◎婦女新聞評 家庭小說を以て一旗幟を立つる堀内新泉子の著にして十三四の少女に讀ましむるため純潔なる短篇小說數種を集めたるものなり面白くなかしくまた哀れに悲しき間教訓的意味を含ませて泉たり妻たり母たるもの、心得を說きたれば家庭の讀本として最上のものならん、續いて出づべき月の卷雪の卷こそ待遠しけれ

◎敎育時論評 家庭向の著書、花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等の諸篇あり、家庭敎育の一助とすべし

◎中央公論評 家庭讀本、老人讀本を著はしたる氏は又少女讀本を著はせり、アドヶ無き物語中自然に敎訓を含む家庭の讀物として最も珍重すべし

◎東京日々新聞評 家庭讀本をあらはして以來、常に斯かる著を公にして、世の好評をほしいまゝにせし老人讀本に續いて、今又この著をなす、趣味の淵源は暫くこゝに言はず、吾人はたゞこの年少女子を害すなきを謂ふ。

◎國民新聞評 花の宴、ゆき姫、野末の露、たま椿、やま吹、ぬひはり等、既に少女らしき名題にして、著者亦夙に此種の書に經驗あり、且つ成功したるに近し。夏の浴場、避暑の山、少女の調度の中に收めらるゝは、またなく嬉しかるべし

◎國文學評 花の宴、ゆき姫、野末の露、玉椿、山吹、ぬひはりの六篇を輯めて、一冊としたもの、皆、孰れも、敎訓の意を寫して、最も、少女に適するやうな誠に罪のない物語である。讀み終つた跡に、淸らかな和氣藹々たる家庭の面影が、髣髴として、目前にあらはるゝやうな心地がする。吾人は、茲に、著者の家庭讀本を讀みて、この筆の、斯の種の著作に甚だ適するものなるを見た。本書を讀みて、なほその然るものあるを認める。著者の、美はしき性格が、おのづと筆の上に現はれるものであらう。

發行所 東京築地 國光社出版部 ◎賣捌 國光書房 北隆館 東京堂 文魁堂

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨の御附記被下度候

華族女學校編纂

國語假字遣ひ一覽

壹部 定價拾貳錢
郵送料金 貳錢
郵劵代用一割增

從來國語の假字遣ひを教ふるに多くは、たゞ五十音の順次のみによりてその語を配列するを、例とせるが、本書は、まづ、その語原近きもの、意義通へるものを一括して、之を類推せしめむと計り、成るべく記憶の勞力を省かしめんとせり。本社今回華族女學校の御下附を得て、世に公にす、國語研修者、文學者には座右必携の要書なり。

發行所 東京京橋區築地二 電話新橋二六九三 株式會社 國光社出版部

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨の御附記被下度候

東京高等師範學校附屬小學校編纂

茗溪叢書

學校生活

東京高等師範學校附屬小學校に於ける訓練に關する研究報告

壹部定價金貳拾錢
郵税四錢

本書は東京高等師範學校に於て多年實施せられし經驗と佐々木訓導の研究報告とに基きて編述せられたるものなり學校生活を系統的に研究せんとするの士は一讀せざるべからず

發行所 東京本郷元町二丁目 茗溪會

發賣元 東京築地二 電新二六九三 國光社出版部

●注意● 茗溪會員及び同會の證明ある人には定價の一割五分引

明治三十五年十月五日發行

每月二回五日廿日發行 第貳百六拾貳號

明治廿五年三月二十日 第三種郵便物認可

丁目株式會社國光社